

# 総社市埋蔵文化財調査年報 20

(平成 21 年 度)

2011年3月

岡山県総社市教育委員会

# 序

総社市は、肥沃な平野と豊かな水、そして瀬戸内の温暖な気候に恵まれ、稲作による食料資源の安定化を背景にして古代吉備の中枢地として栄えてきました。古くは北部九州と畿内を結ぶ山陽道の中間地点として、また山陰と四国を結ぶ南北交通の要衝として機能し、現在でも陸上交通では、道路網・鉄道網とも各地方を結ぶ中心拠点であります。

こうした歴史的・地理的環境により、市内には、国指定史跡作山古墳・備中国分僧寺・備中国分尼寺・鬼ノ城をはじめとして数多くの遺跡が残されています。これらの遺跡は、過去の歴史を伺い見るだけでなく、これからの未来を知ることの出来る重要な指標であります。

総社市は、昭和29年3月31日に人口36,968人で市制が発足し、平成16年には市制施行50周年を迎え、平成17年3月22日の合併により人口67,733人の新総社市となりました。その後、少子化・景気の低迷等も影響し人口はわずかに減少して、平成22年12月現在67,474人となっていますが、県南広域圏におけるホームタウンとして、また内陸工業地域として発展しています。

しかしながら、こうした発展に伴う開発によって保護しえなかった遺跡もあり、それらはやむなく記録保存として発掘調査を実施してまいりましたが、遺跡の保護・保存、また活用が課題となってきました。この年報は開発によって行われた遺跡の調査成果を少しでも早く公開し、今後の文化財の保護・保存が進むことを目的として刊行しております。

最後になりましたが、本市教育委員会の文化財保護行政に御指導・御協力いただいた関係機関・関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

総社市教育委員会

教育長 栞 田 交 三

## 例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が、2009（平成21）年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会、確認調査の概要をまとめたものである。
2. 本書は、各調査の担当者である谷山雅彦、平井典子、武田恭彰、高橋進一、松尾洋平が執筆し、それを編集したものである。それぞれの文末に執筆者名を記し、文責とする。全体の編集は高橋が行った。
3. 遺物の整理及び資料の整理にあたっては、田中富子・犬飼真弓（総社市埋蔵文化財の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は海拔高であり、遺構図の方位は国土座標が示されたもの以外は磁北である。
5. 本書に使用した地形図は、特記したもの以外は総社市発行のものを複製して使用している。
6. 本書に関する実測図、写真、遺物等の資料は総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。
7. 本書の刊行にあたり、御指導、御教示を賜った関係の皆様には厚く御礼申し上げます。



総社市位置図

# 目 次

序 文

例 言

## 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2009（平成21）年度 埋蔵文化財行政の概要 ..... 1

## 2. 立会・試掘・確認調査の概要

特別養護老人施設建設に伴う試掘調査（黒尾） .....	7
個人住宅建設に伴う立会調査（原字西ノ田） .....	9
個人住宅建設に伴う立会調査（南溝手字上サギセ） .....	10
個人住宅建設に伴う立会調査（南溝手字上サギセ） .....	11
市道拡幅工事に伴う立会調査（真壁） .....	12
市道改良に伴う立会調査（東阿曾牛神） .....	13
墓地造成工事に伴う試掘調査（西郡字中郡） .....	14
個人住宅建設に伴う立会調査（秦字宮林） .....	16
個人住宅浄化槽建設に伴う立会調査（北溝手） .....	17
個人住宅の造成工事に伴う立会調査（北溝手字釵先キ） .....	18
個人住宅建設に伴う立会調査（清音軽部） .....	19
個人住宅建設に伴う立会調査（山手地頭片山） .....	21
地頭3号墳の確認調査（山手地頭片山） .....	22
個人住宅の建設工事に伴う確認調査（井手字西延） .....	27
携帯電話基地局建設工事に伴う確認調査（北溝手字柚木） .....	28
個人住宅造成工事に伴う立会調査（清音軽部梶木） .....	30
農業用水路改修工事に伴う立会調査（清音軽部梶木） .....	32
個人住宅造成工事に伴う立会調査（総社字荒神西山前） .....	36
電柱建設に伴う立会調査（福井） .....	37
鬼ノ城史跡整備に伴う立会調査ほか .....	38

## 3. 発掘調査の概要

駅南区画整理事業に伴う発掘調査 .....	49
常盤小学校校舎増築に伴う発掘調査 .....	51
市道改良工事に伴う発掘調査（第二次調査） .....	53

4. 不時立会調査	
備中国分尼寺推定寺域内の土取りについて .....	55
5. 発掘調査の報告	
延遺跡発掘調査報告 .....	57
6. 史跡整備事業の概要	
2009（平成21）年度 鬼城山環境整備事業 .....	75
7. 付 載	
鬼ノ城城外における表採遺物について .....	77
稲荷山古墳群出土の須恵器について .....	78

## 目 次

<p>第1図 調査地位置図 (S=1/70,000) ……………5            特別養護老人施設建設に伴う試掘調査</p> <p>第2図 トレンチ配置図 (S=1/2,500) ……………7</p> <p>第3図 トレンチ土層図 (S=1/60) ……………8            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第4図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………9</p> <p>第5図 調査地位置図 (S=1/500) ……………9</p> <p>第6図 土層断面図 (S=1/60) ……………9            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第7図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………10</p> <p>第8図 調査地位置図 (S=1/600) ……………10</p> <p>第9図 土層断面図 (S=1/60) ……………10            出土遺物 (S=1/4) ……………10            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第10図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………11</p> <p>第11図 調査地位置図 (S=1/600) ……………11</p> <p>第12図 土層断面図 (S=1/60) ……………11            市道拡幅工事に伴う立会調査</p> <p>第13図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………12</p> <p>第14図 遺構検出位置 (S=1/800) ……………12</p> <p>第15図 遺構平・断面図 (S=1/60) ……………12            市道改良に伴う立会調査</p> <p>第16図 調査地位置図 (S=1/25,000) ……………13            墓地造成工事に伴う試掘調査</p> <p>第17図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………14</p> <p>第18図 トレンチ配置図・断面図            (S=1/300, 1/60) ……………15            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第19図 調査地位置図 (S=1/10,000) ……………16</p> <p>第20図 調査地位置図 (S=1/400) ……………16</p> <p>第21図 土層断面図 (S=1/40) ……………16            個人住宅浄化槽建設に伴う立会調査</p> <p>第22図 調査地位置図 (S=1/2,500) ……………17            個人住宅の造成工事に伴う立会調査</p> <p>第23図 調査地位置図 (S=1/10,000) ……………18</p> <p>第24図 調査地位置図 (S=1/400) ……………18</p> <p>第25図 土層断面図 (S=1/60) ……………18            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第26図 調査地位置図 (S=1/25,000) ……………19</p> <p>第27図 土層断面図 (S=1/40) ……………20            個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第28図 調査地位置図 (S=1/2,500) ……………21            地頭3号墳の確認調査</p> <p>第29図 調査地位置図 (S=1/25,000) ……………22</p> <p>第30図 墳丘平面図 (S=1/150) ……………23</p> <p>第31図 T-1・T-2 墳丘土層断面図            (S=1/30) ……………25</p>	<p>個人住宅の建設工事に伴う確認調査</p> <p>第32図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………27</p> <p>第33図 調査地位置図 (S=1/600) ……………27</p> <p>第34図 土層断面図 (S=1/60) ……………27            携帯電話基地局建設工事に伴う確認調査</p> <p>第35図 調査地位置図 (S=1/20,000) ……………28</p> <p>第36図 トレンチ配置図 (S=1/400) ……………28</p> <p>第37図 土層断面図 (S=1/60) ……………28            個人住宅造成工事に伴う立会調査</p> <p>第38図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………30</p> <p>第39図 トレンチ配置図 (S=1/600) ……………31</p> <p>第40図 土壌6出土遺物 (S=1/4) ……………31</p> <p>第41図 トレンチ断面図 (S=1/80) ……………31            農業用水路改修工事に伴う立会調査</p> <p>第42図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………32</p> <p>第43図 調査地 (S=1/1,000) ……………33</p> <p>第44図 平面図 (S=1/200) ……………33</p> <p>第45図 柱状図 (S=1/60) ……………33</p> <p>第46図 出土遺物 (S=1/4, 1/3) ……………34            個人住宅造成工事に伴う立会調査</p> <p>第47図 調査地位置図 (S=1/1,000) ……………36</p> <p>第48図 土層位置図 (S=1/600) ……………36</p> <p>第49図 土層断面図 (S=1/40) ……………36</p> <p>第50図 出土遺物 (S=1/4) ……………36            電柱建設に伴う立会調査</p> <p>第51図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………37</p> <p>第52図 土層柱状図 (S=1/40) ……………37</p> <p>第53図 寄贈遺物 (S=1/4) ……………37            鬼ノ城史跡整備に伴う立会調査ほか</p> <p>第54図 遺構平面図 (S=1/600) ……………39</p> <p>第55図 城内側敷石平・断面図 (S=1/100) ……………40</p> <p>第56図 B調査区位置図 (S=1/600) ……………42</p> <p>第57図 柱穴8-1平・断面図 (S=1/30) ……………42</p> <p>第58図 B調査区・平断面図 (S=1/100, 1/80) ……………43</p> <p>第59図 土壌1断面図 (S=1/30) ……………43</p> <p>第60図 土壌2平・断面図 (S=1/60) ……………43</p> <p>第61図 出土遺物ならびに表採遺物            (S=1/4・1/3) ……………45            駅南区画整理事業に伴う発掘調査</p> <p>第62図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………49</p> <p>第63図 区画道61号線3区遺構配置図            (S=1/200) ……………49</p> <p>第64図 区画道50号線・第2号(児童)公園・            区画道39号線遺構配置図 (S=1/300) ……………50            常盤小学校校舎増築に伴う発掘調査</p> <p>第65図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……………51</p> <p>第66図 遺構配置図 (S=1/200) ……………52</p>
--	---

市道改良工事に伴う発掘調査（第二次調査）	
第67図	調査地位置図（S=1/2,500）……………54
備中国分尼寺推定寺域内の土取りについて	
第68図	調査地位置図（S=1/8,000）……………55
第69図	調査地位置図（S=1/3,000）……………56
第70図	西壁土層図（S=1/60）……………56
延遺跡発掘調査報告	
第71図	調査地位置図（S=1/5,000）……………62
第72図	調査地全体図（S=1/300）……………62
第73図	トレンチ平・断面図（S=1/60）……………63
第74図	トレンチ出土遺物（S=1/4）……………63
第75図	建物1（S=1/60）……………65
第76図	建物2（S=1/60）……………65
第77図	溝1断面図（S=1/60）……………66
第78図	溝1出土遺物（S=1/4）……………66

第79図	溝2断面図（S=1/60）……………66
第80図	溝2出土遺物（S=1/4）……………66
第81図	溝3断面図（S=1/60）……………66
第82図	溝5断面図（S=1/60）……………66
第83図	溝4ほか断面図（S=1/60）……………66
第84図	調査地と周辺の遺跡（S=1/1,500）……………67
第85図	遺構変遷図（S=1/400）……………67
鬼ノ城城外における表採遺物について	
第86図	表採地点位置図（S=1/8,000）……………77
第87図	表採遺物（S=1/4）……………77
稲荷山古墳群出土の須恵器について	
第88図	稲荷山古墳群と須恵器出土地点 （S=1/10,000）……………78
第89図	採取遺物（S=1/4）……………80

## 図 版 目 次

墓地造成工事に伴う試掘調査	
第1図版	T1（西から）……………15
第2図版	T2（南から）……………15
地頭3号墳の確認調査	
第3図版	墳丘遠景（東から）……………24
第4図版	石室検出状態（北から）……………24
第5図版	墳丘断面T-1（D-Cライン）……………24
携帯電話基地局建設工事に伴う確認調査	
第6図版	調査状況……………29
個人住宅の造成工事に伴う立会調査	
第7図版	トレンチ断面（南から）……………31
第8図版	トレンチ断面（南東から）……………31
第9図版	トレンチ断面（東から）……………31
農業用水路改修工事に伴う立会調査	
第10図版	調査区北端（北から）……………33
第11図版	調査区中間（北から）……………33
第12図版	調査区南半（南から）……………33
第13図版	出土遺物……………35
鬼ノ城史跡整備に伴う立会調査ほか	
第14図版	調査地（北東から）……………40
第15図版	調査地（北西から）……………40
第16図版	城内側柱穴8-1（西から）……………42
第17図版	調査区全景（東から）……………47
第18図版	調査区全景（東から）……………47
第19図版	土壌1（北東から）……………47
第20図版	土壌2（北西から）……………47
第21図版	土層断面（南東から）……………47
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	
第22図版	区画道45号線完掘（東から）……………50
第23図版	区画道39号線完掘（北から）……………50

常盤小学校校舎増築に伴う発掘調査	
第24図版	調査区全景（東から）……………51
第25図版	地下げ内埋土堆積状況（北東から）……………51
第26図版	溝-1遺物出土状況（東から）……………52
第27図版	P-2遺物出土状況（東から）……………52
第28図版	東壁断面斜め（南西から）……………52
市道改良工事に伴う発掘調査（第二次調査）	
第29図版	1区全景……………54
第30図版	2区全景……………54
備中国分尼寺推定寺域内の土取りについて	
第31図版	土層断面（東から）……………56
延遺跡発掘調査報告	
第32図版	P-2断面（南から）……………63
第33図版	土壌2断面（西から）……………63
第34図版	確認調査（北西から）……………69
第35図版	確認調査（南東から）……………69
第36図版	調査区全景（北西から）……………70
第37図版	南北調査区（南から）……………70
第38図版	東西調査区（南西から）……………70
第39図版	溝2断面（北から）……………71
第40図版	溝3（南東から）……………71
第41図版	溝4（北から）……………71
第42図版	建物1（南東から）……………72
第43図版	掘立柱建物群（南西から）……………72
第44図版	掘立柱建物群（北東から）……………72
第45図版	出土遺物……………73
2009（平成21）年度 鬼城山環境整備事業	
第46図版	版築土塁……………76
第47図版	板塀表示……………76
第48図版	園路整備……………76

鬼ノ城城外における表採遺物について	
第49図版 表採位置	77
第50図版 出土状況	77

稲荷山古墳群出土の須恵器について	
第51図版 稲荷山古墳群出土の須恵器	81

## 目 次

表 1	2009（平成21）年度 立会・試掘・確認調査一覧表	3
表 2	2009（平成21）年度 発掘調査一覧表	4

延遺跡発掘調査報告		
表 3	土器観察表	68
稲荷山古墳群出土の須恵器について		
表 4	遺物観察表	80



## 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

## 2009（平成21）年度埋蔵文化財行政の概要

本市における文化財行政は、教育委員会文化課文化財係が担当しており、埋蔵文化財をはじめとした文化財全般の調査・記録・保護・啓発を主たる業務としている。

### <組織>

教育長	栗田 交三	主任	松尾 洋平
教育次長	加藤 信二	主事	佐野 功
課長	荒木 泰行	[埋蔵文化財学習の館]	
主幹（係長兼務）	谷山 雅彦	館長	村上 幸雄
課長補佐	平井 典子	臨時職員	田中 富子
課長補佐	武田 恭彰	臨時職員	犬飼 眞弓
主査	前角 和夫	[鬼城山ビジターセンター]	
主査	高橋 進一	指導員	脇本 浩
主任	笹田 健一	指導員	秋山 浩一

### [埋蔵文化財の調査]

2007（平成19）年以降続いていた景況感の悪化は、2009（平成21）年度第1四半期に底を打ったと見られ、以後実質1%程度の成長ながら回復傾向が続いている。そのため金利の低さとも相まって個人住宅の建設は順調に推移し、個人住宅の建設を中心とした埋蔵文化財発掘の届出・通知は、2008（平成20）年度・2009（平成21）年度ともに45件を上回っている。

2009（平成21）年度に実施した発掘調査は5件で、このうち公共事業に伴う発掘調査は3件で、民間開発等によるものが2件であった。全体として例年並みかやや少ないとすることができる。短期の調査や同一事業でも調査期間に中断を挟むものもあり、全体的な発掘調査の減少傾向は続いている。

### [文化財保護・普及啓発]

2001（平成13）年度から続く鬼ノ城の整備は、第31回鬼城山整備委員会を4月15日に、第32回鬼城山整備委員会を11月19日に開催し、西門周辺の整備工事・土塁保護工・敷石保護工・城内側整地工等を行った。

史跡の下草刈り清掃については例年どおり、作山古墳、鬼城山、宮山古墳群、江崎古墳、秦原廃寺等で実施し、保護・活用に努めた。

岡山県立大学の依頼で実施している博物館実習は、今年度も20余名の県立大学生を対象として鬼ノ城や埋蔵文化財学習の館の見学・古代吉備の歴史と文化についての講義・ガラス玉作りのワークショップを実施した。

資料の調査依頼・掲載許可・写真撮影許可は合計28件あり、大半が写真掲載の許可であった。

資料等の展示に伴う貸し出しは8件あり、下記のとおりであった。

- ・大阪府立弥生文化博物館 2009（平成21）年4～6月  
春季特別展「弥生建築—卑弥呼のすまい—」  
横寺遺跡出土家形土製品・窪木遺跡出土絵画土器
- ・荒神谷博物館 2009（平成21）年6月29日～9月9日  
特別展「もう一つの青銅器世界—変わる銅鐸への想い—」  
横寺遺跡出土小銅鐸・市後遺跡出土鐸形土製品
- ・岡山県立博物館 2009（平成21）年7月13日～9月30日  
夏季特別陳列「大地からの便り2009—県内の発掘調査報告展—」  
上原遺跡・一倉遺跡・宮山遺跡・長良小田中遺跡出土絵画土器
- ・岡山県古代吉備文化財センター 2009（平成21）年9月15日～2010（平成22）年4月30日  
後期企画展「海を越えた交流」  
南溝手遺跡出土粘土痕土器・孔列文土器・丹塗磨研土器
- ・岡山県立博物館 2009（平成21）年9月11日～12月上旬  
特別展「土と火のオブジェ—縄文の土器・土偶から現代備前焼まで—」  
横寺遺跡出土家形土製品
- ・広島県立歴史民俗資料館 2009（平成21）年9月15日～2010（平成22）年4月30日  
秋の特別企画展「古代の出雲と吉備の名宝」  
窪木薬師遺跡出土鉄鋌・砥石・韃の羽口，千引カナクロ谷遺跡出土鉄鉾石・鉄滓，栢寺廃寺  
出土軒丸瓦，大文字遺跡出土軒丸瓦・写真，隋庵古墳出土甲冑・玉類・鉄鉤・鉄斧・鉄鏃・  
鉄矛，窪木薬師遺跡出土鉄鉾石
- ・岡山県立吉備路郷土館 2009（平成21）年10月1日～12月初旬  
企画展「こうもり塚と周辺の古墳」  
緑山17号墳・緑山6号墳・こうもり塚古墳・江崎古墳出土資料
- ・岡山県立博物館 2010（平成22）年1月5日～2月7日  
交流展「古代出雲展—国宝青銅器の世界—」  
横寺遺跡出土小銅鐸・市後遺跡出土銅鐸形土製品

以上、2009（平成21）年度の文化財行政の概要を記した。

（高橋 進一）

表 1 2009(平成21)年度 立会・試掘・確認調査一覧表

番号	所在地	調査原因	種別	調査期間	調査所見	報告頁
1	上林地内	用水路改修	立会	4月1日	攪乱により遺構不明	
2	黒尾地内	特別養護老人施設建設	試掘	4月3日	谷部	7
3	原字西ノ田2123-1	個人住宅	立会	4月7日	遺跡縁辺部	9
4	南溝手436-1	個人住宅	立会	4月10日	低湿地	10
5	南溝手436-12	個人住宅	立会	4月17日	低湿地	11
6	三輪石原1071-7	個人住宅	立会	4月30日		
7	宿1426-7, 1426-10	個人住宅	立会	5月1日		
8	三輪974-1	個人住宅	立会	5月8日		
9	真壁1182-17外	市道改良	立会	5月12日	弥生時代以降の遺構	12
10	東阿曾牛神地内	市道改良	立会	5月14日	中近世水田層	13
11	福井地内	個人住宅	立会	5月15日	遺構・遺物なし	
12	三輪三本松778-6	個人住宅	立会	5月26日		
13	西郡中部1872-3, 4	墓地造成	試掘	5月26日	遺構なし	14
14	中央4-2-122	個人住宅	立会	6月1日		
15	秦字宮林141-1	個人住宅	立会	6月3日	氾濫原	16
16	三須水落1227-10	個人住宅	立会	6月3日		
17	中央地内	個人住宅	立会	6月25日	遺構・遺物なし	
18	北溝手地内	個人住宅	立会	7月3日	水田層・遺物なし	17
19	真壁荒神ヶ市643	個人住宅	立会	7月13日	微高地	
20	門田地内	個人住宅	立会	7月22日	遺構・遺物なし	
21	真壁荒神ヶ市2109	個人住宅	立会	7月31日		
22	清音三因天神後1-7	個人住宅	立会	8月6日		
23	地頭片山上谷638	個人住宅	立会	8月14日		
24	延本村地内	個人住宅	立会	8月18日	遺構・遺物なし	
25	北溝手424-1外	個人住宅	立会	8月25日	中世水田	18
26	清音軽部	個人住宅	立会	9月2日	古墳時代住居址ほか	19
27	西郡字前田1437-1	墓地	立会	9月4日		
28	山手地頭片山地内	個人住宅	立会	9月8日	造成土内	21
29	岡谷213-1	個人住宅	立会	9月8日		
30	山手地頭片山413	古墳	確認	9月11日	地頭3号墳	22
31	井手西延492-1	個人住宅	立会	10月1日	延遺跡	27
32	岡谷九文給10-1	店舗	立会	10月1日		
33	岡谷地内	個人住宅	試掘	10月7日	遺構・遺物なし	
34	三輪東楨前687-7	集合住宅	立会	10月8日		
35	北溝手柚木203-1	携帯基地局建設	確認	10月21日	低位部	28
36	北溝手溝尻189-1外	防球ネット建設	立会	11月15日		
37	北溝手地内	個人住宅	立会	11月25日	遺構・遺物なし	
38	清音軽部梶木780-14	個人住宅	立会	12月8日	中世遺構あり	30

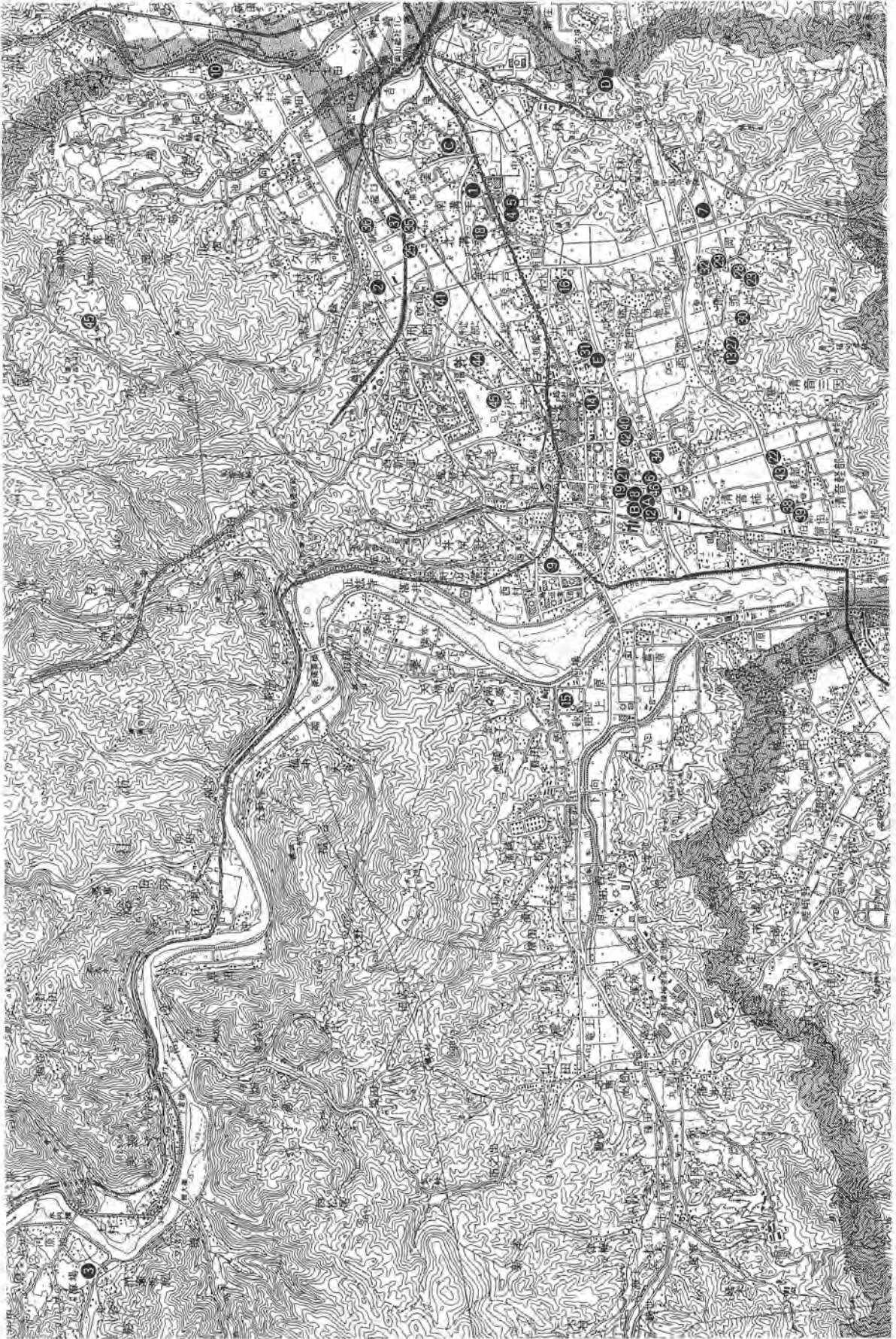
番号	所在地	調査原因	種別	調査期間	調査所見	報告頁
39	清音輕部780-4外	水路改修	立会	1月12日		32
40	中央6-2-119	個人住宅	立会	1月15日		
41	総社1954-6	個人住宅	立会	1月19日	中世水田	36
42	中央6-114	個人住宅	立会	2月4日		
43	清音三因天神後1	個人住宅	立会	2月8日		
44	福井240	電柱建設	立会	2月25日	水田層・低位	37
45	奥坂地内	史跡整備	立会	3月3日	城内敷石	38
46	福井阿部前45-8	個人住宅	立会	3月25日		
47	三輪西楨前978-3外	個人住宅	立会	3月31日		

表 2 2009（平成21）年度 発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	報告頁
A	三輪遺跡群	三輪1086-2外	区画整理道路建設	4月28日～12月9日	49
B	上三本松遺跡	三輪926	小学校校舎増築	6月8日～6月19日	51
C	窪木遺跡	窪木地内	市道改良工事	10月8日～6月30日	53
E	鬼城山	奥坂地内	史跡整備事業	3月3日～3月16日	75
F	延遺跡	井手204-5外	自動車修理工場建設	3月18日～3月27日	57

不時立会調査

番号	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	報告頁
D	備中国分尼寺	下林1695	溜池堤防補修	2月25日	55



第1図 調査地位置図 (S=1/70,000)



## 2. 立会・試掘・確認調査の概要



## 特別養護老人施設建設に伴う試掘調査

所在地 総社市黒尾

調査期間 2009（平成21）年4月3日～25日

### 調査概要

今回の試掘調査は、黒尾地区内で計画された平成22年度中の工事着工・完成を予定する特別養護老人施設の建設に先立つものである。

調査対象となった建設予定地（第2図）は、県立大学の西北、県道総社足守線と岡山自動車道に挟まれ緩やかに南に下降する地形に位置し、現況は水田や畑として利用されており、わずかな遺物の散布は見られるが周知の遺跡としては認識されていない。

今回の施設建設予定地は県道沿いの約1haで、工事計画では1m以上の土盛りを行い建物を建設するため地下に影響を及ぼすのは建物と造成地の擁壁基礎掘削部分のみに止まる予定であった。

確認調査は諸般の事情で重機を使用できないため、人力で19本のトレンチを掘り下げて遺構の有無と地形の把握を行った。

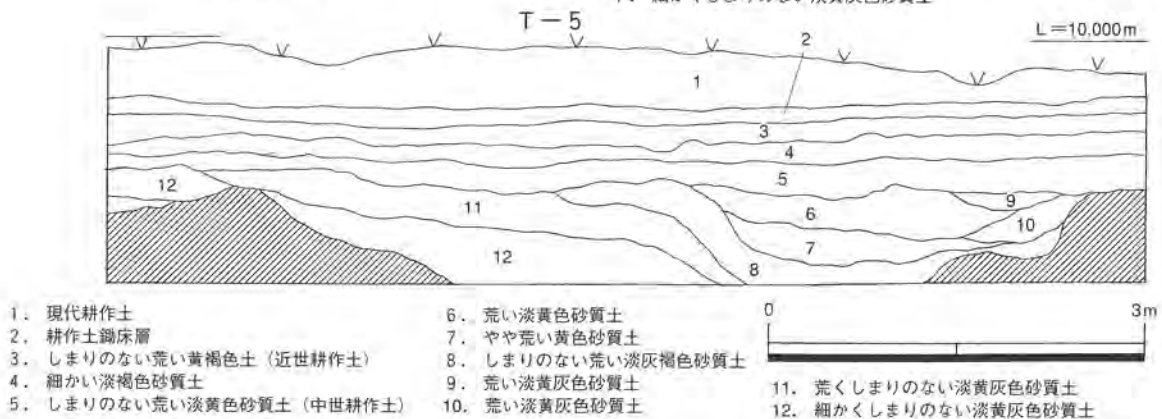
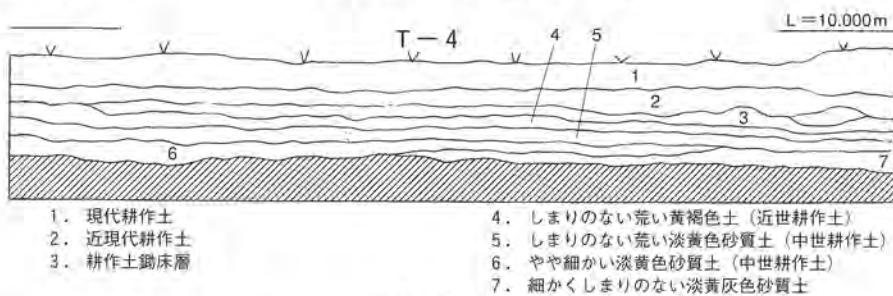
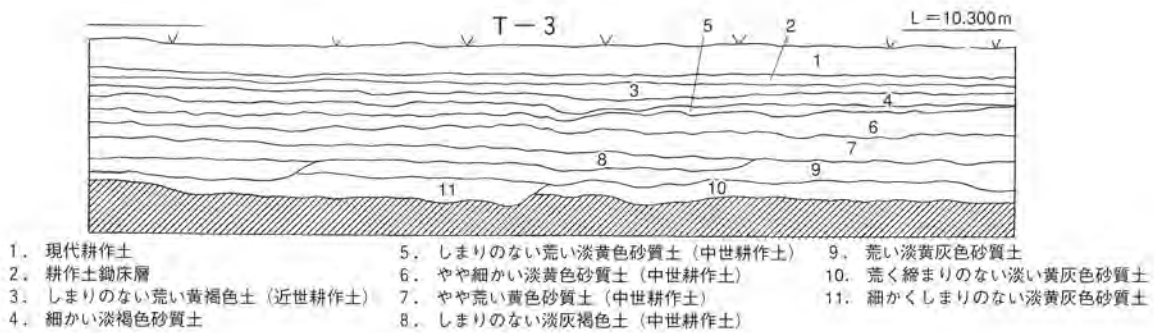
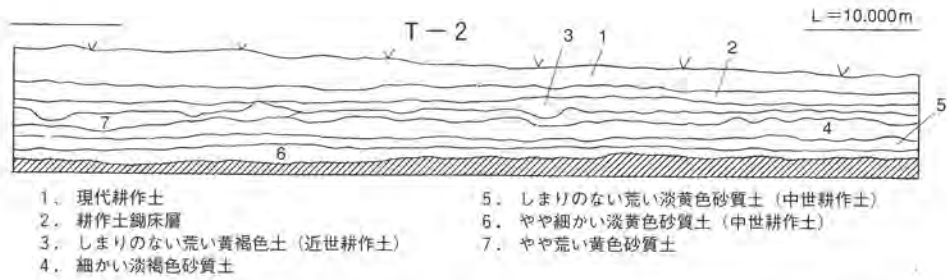
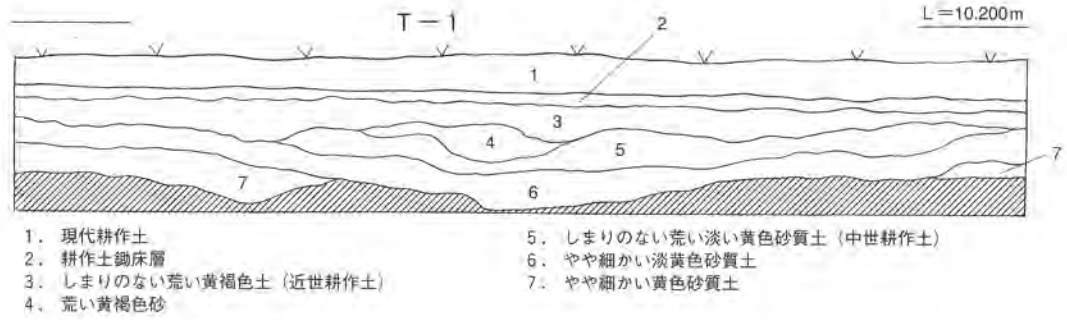
この結果、すべてのトレンチで遺構は確認できず、一見、現況では南向き緩斜面で集落の立地に適した感があるが、トレンチの土層断面（第3図）でみると一帯は北の丘陵部から派生した小谷が無数に存在し、荒い流砂とグライ化した粘質土が随所に堆積する不安定な状況が明らかになった。

各トレンチからは若干の弥生・古墳時代の土器片が出土したが、これらは県道より北側の現集落に存在が予想される集落遺跡から流れ込んだと考えられ、緩斜面が広がる現在の景観は近世以降の耕地造成により形成されたことも明らかになった。

（武田恭彰）



第2図 トレンチ配置図 (S=1/2,500)



第3図 トレンチ土層図 (S=1/60)

## 個人住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 水内金屋遺跡

所在地 総社市原字西ノ田2123-1

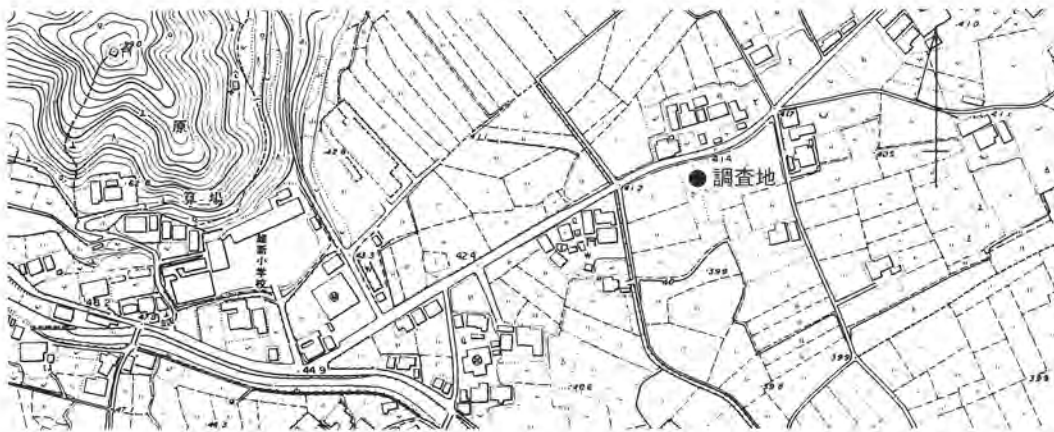
調査日 2009（平成21）年4月7日

### 調査概要

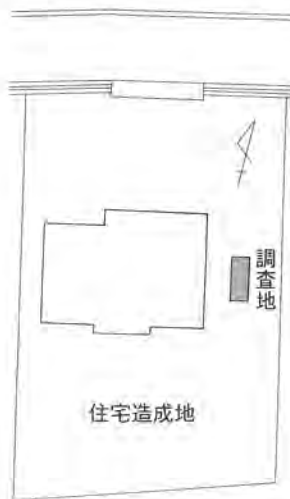
調査地は総社市北部の原に所在し、維新小学校から東へ約300m離れた造成地に位置する。影谷川は山間部の滝山方面から高梁川へと流走しているが、平野へいたる谷の延長上に水内金屋遺跡が所在する。

今回の調査は個人住宅の建設に伴い、深い掘削が及ぶ浄化槽部分について立会調査を実施することになった。層序は現在耕土（1～2層）の下は、近世水田層（3～4層）と推移し、6層の上面でピットを確認した。この6層はマンガンやわずかに土器片を含んでおり、小片につき時期を判別しがたいが中世に比定される。7層はしまりのある砂質土で基盤層と考えられる。

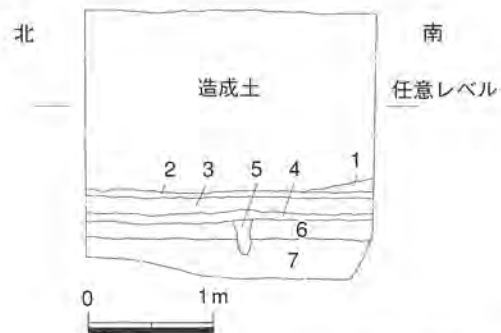
調査の結果、検出した遺構はわずかで採集遺物もなく密度は希薄である。水田に残された旧河道の地割りは西へ約120m離れた位置にあり、水内金屋遺跡の本体も調査地より東側に展開していることから、遺跡の縁辺部と考えられる。  
（松尾洋平）



第4図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第5図 調査地位置図 (S=1/500)



#### 層序

- |                             |                                     |
|-----------------------------|-------------------------------------|
| 1. 耕作土                      | 5. 褐灰色砂質土 (10YR5/1)                 |
| 2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR6/3) 床土   | 6. 灰褐色砂質土 (10YR5/2)<br>マンガン中、土器粒わずか |
| 3. 灰白色砂質土 (10YR7/1)<br>近世耕土 | 7. にぶい黄褐色砂質土<br>(10YR4/3) 無遺物層      |
| 4. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) 床土     |                                     |

第6図 土層断面図 (S=1/60)

## 個人住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 大文字遺跡

所在地 総社市南溝手字上サギセ436-1

調査日 2009（平成21）年4月10日

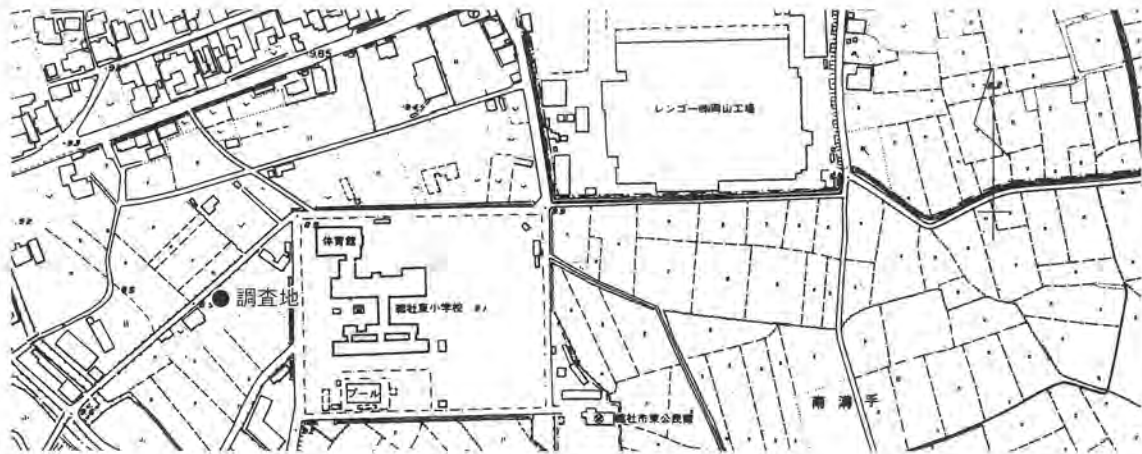
### 調査概要

調査地は南溝手地区の大文字遺跡に属し、総社東小学校から西へ100m離れ、国道180号線から南へ120mの地点に位置する。現況は個人住宅用地として造成され更地となっている。今回の調査は住宅の新築に伴い、深く掘削が及ぶ浄化槽を対象として工事立会を実施することになった。

層序は造成土下が現代耕作土（1層）で、2層の灰黄色粘質土はグライ化した低湿地を思わせる。3層のにぶい黄色砂質土は洪水砂の堆積で、砂質が強い状況であった。4層の浅黄色砂質土（粘性あり）は比較的安定した砂質土と思われるが遺構は検出できず、5層以下はグライ化した粘質土で、層中から早島式土器碗が混入していた。

調査の結果、調査地の状況は少なくとも中世以降は低湿地であり、遺跡の形成された状況はうかがえなかった。周辺地形をみると調査地よりも西へ140m離れた場所が国府川と前川の合流地点であり、河川の影響を受けやすい当地の影響を考えれば、大文字遺跡の本体は調査地よりも北側ないし東側と考えられる。

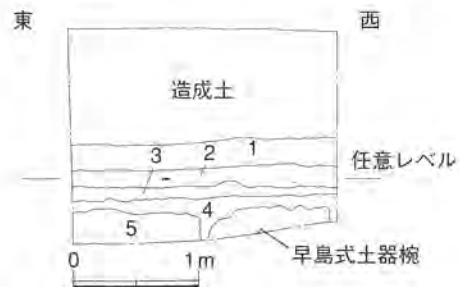
（松尾）



第7図 調査地位置図 (S=1/5,000)

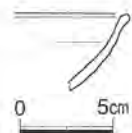


第8図 調査地位置図 (S=1/600)



### 層序

1. 褐灰色粘質土(耕土)
2. 灰黄色粘質土(2.5Y4/2) 近代湿地
3. にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3) 洪水砂
4. 浅黄色砂質土(2.5YR7/4)
5. オリーブ灰色粘質土(5GY5/1) 中世湿地



第9図 土層断面図 (S=1/60), 出土遺物 (S=1/4)

## 個人住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 大文字遺跡

所在地 総社市南溝手字上サギセ436-12

調査日 2009（平成21）年4月17日

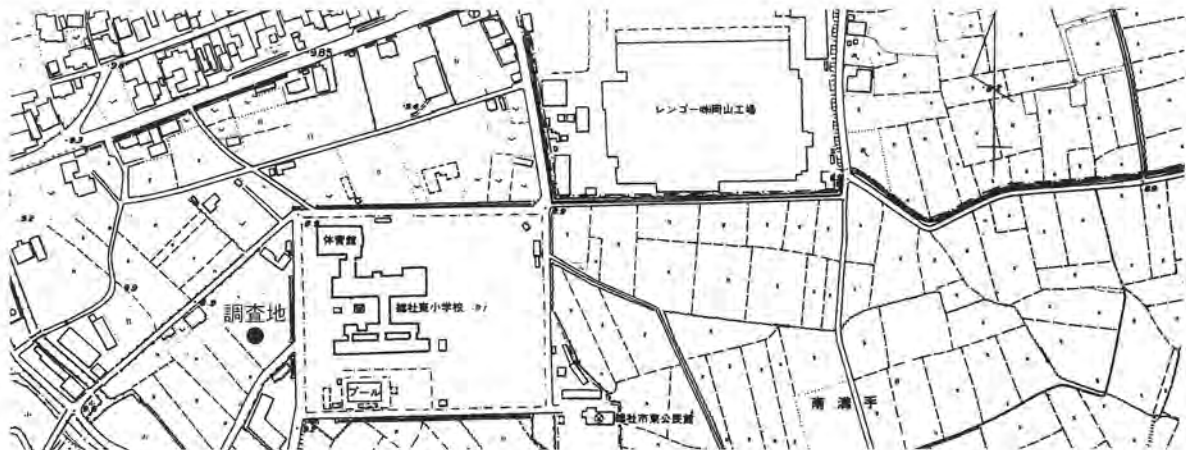
### 調査概要

調査地は南溝手地区の大文字遺跡に属し、総社東小学校から西へ約70m離れ、国道180号線からは南へ170mの地点に位置する。現況は個人住宅用地として造成され更地となっている。今回の調査は住宅の新築に伴い、深い掘削が及ぶ浄化槽を対象として工事立会を実施することになった。

層序は造成土下が旧耕作土（1層・2層）で、3層のにぶい黄褐色砂質土は比較的しまった砂質土となり、層中には土器の細片やマンガンが含まれていたが、遺構は検出できなかった。

4層のにぶい黄色砂質土は3層よりも強い砂質土となり、中世土器の細片を含んでいた。5層はさらにシルト質となり、6層以下はグライ化している状況が確認できた。

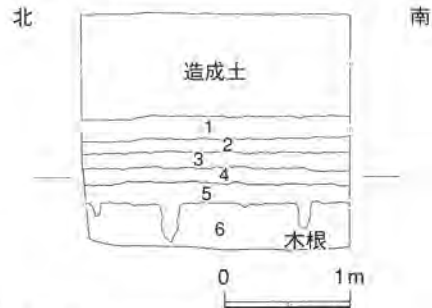
調査の結果、4月10日に実施した隣接地での立会調査の成果と同じく、耕作土以下は同一の層序である。最下層の6層は中世の低湿地を示し、当地では安定した地形ではなかったことがうかがえ、総社東小学校からその西側を流れる前川までは、低湿地か氾濫原と予想される。（松尾）



第10図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第11図 調査地位置図 (S=1/600)



層序

1. 灰色粘質土(7.5YR5/1) 耕土
2. 灰色砂質土(10YR5/1) 耕土
3. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) マンガン中、土器片含
4. にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)
5. 浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
6. オリーブ灰色粘質土(5G5/1) 中世湿地

第12図 土層断面図 (S=1/60)

## 市道拡幅工事に伴う立会調査

遺跡名 阿弥陀遺跡

所在地 総社市真壁1182-17ほか

調査日 2009（平成21）年5月12日

### 調査概要

調査地は総社市街地の北西部にあたり、国道180号線から総社大橋にいたる486号線よりも北へ約80mの住宅地に位置する。

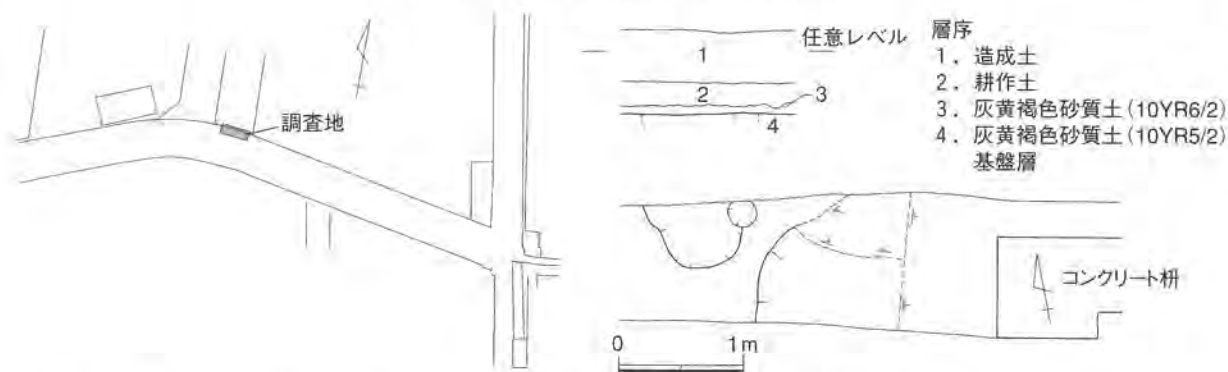
調査地周辺は旧来の田園風景から宅地開発の急速な進展により、市街化が進展しつつある。市道改良工事は幅員のせまい現道路を生かしつつも、北側に拡幅して道路側溝を設置するのが主な工事内容である。掘削工事が道路の端を根切りし、幅が狭小であることから工事中に立会調査を実施した。

層序は1層が宅地造成土、2層が耕作土、3層が近世の堆積層である灰黄褐色砂質土、4層の灰黄褐色砂質土で遺構検出面となる。4層はしまりがあり、しっかりとした砂質土で、検出面からは近世のピット、ならびに土壌を2基検出した。遺物は弥生時代後期の土器小片が出土した。

掘削工事は3層の近世層で終了し、部分的に遺構面に達しているのみであった。また、土層断面を見る限り東西道路のうちで、東側が高く西側に向かって地形が下がる状況からみて調査地は安定した微高地であり、弥生時代以降の遺跡が展開していると見られる。 (松尾)



第13図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第14図 遺構検出位置 (S=1/800)

第15図 遺構平・断面図 (S=1/60)



## 墓地造成工事に伴う試掘調査

所在地 総社市西郡字中郡1872-3, 4

調査日 2009（平成21）年5月26日

### 調査概要

調査地は山手浄化センターより北西へ270m、市指定重要文化財一里塚跡から南へ530m離れた丘陵裾部に位置する。尾根は福山山塊から南へ派生する低丘陵部の一つで、頂部を中心に地頭古墳群として周知されている。この尾根の西斜面に墓地造成が計画され現地を確認したところ斜面は雛段状となりすでに開墾されていることが確認された。

墓地は斜面を17m×10mの範囲で掘削し、平場に墓地を2基設置する計画であり、新たに斜面を切ることになるため、所有者の承諾を得て事前の試掘調査を実施した。

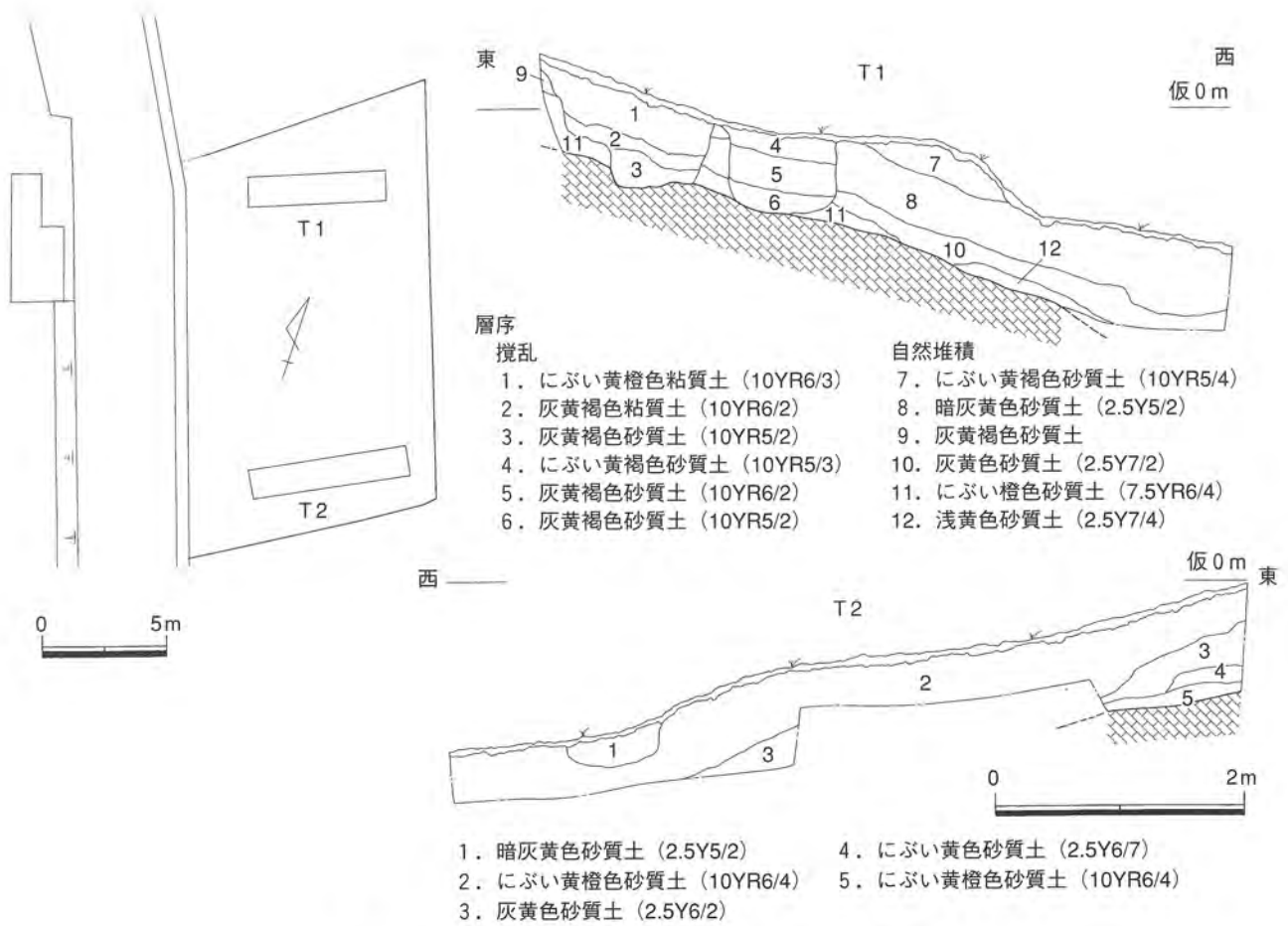
調査は敷地内にトレンチを2本設置し、北からT1、T2とした。T1は表土下70cm前後で地山を検出した。ブドウ栽培に伴う攪乱を確認したほかは、全て自然堆積層である。T2はトレンチの上位から深さ約80cmで地山を確認した。工事掘削の関係上、全域で地山の追求をすることはできなかったが、下位においては底の一時停止面より1m以上もピンポールが貫入されるため、著しく地山が下降していると見られる。

各トレンチからは遺構が検出できず、自然堆積層には遺物を含んでいなかった。地山の傾斜をみれば下位に向かって著しく落ち込んでいるため、調査地に限れば遺跡は形成されていない。（松尾）



第17図 調査地位置図 (S=1/5,000)





第18図 トレンチ配置図・断面図 (S=1/300, 1/60)



第1図版 T1 (西から)



第2図版 T2 (南から)

## 個人住宅建設に伴う立会調査

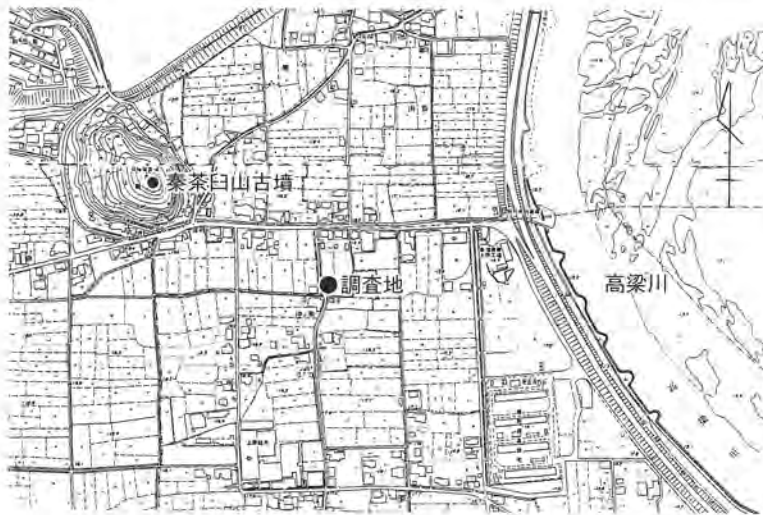
遺跡名 上原遺跡

所在地 総社市秦字宮林141-1

調査日 2009（平成21）年6月3日

調査地は高梁川よりも西へ350m離れ、上原遺跡の北端部に位置する。周辺地形を見れば北部の正木山山系に向かって徐々に高くなっており、整然とした条里が現在も良好に残されている。

今回、個人住宅の建設に伴い、浄化槽部分を掘削することから工事立会を実施することになった。耕作土以下の層序は1～4層が軟質な砂質土であり、4層は厚さ15cmもの洪水砂であった。5層は上層とは異なりしっかりとした粘質土で、比較的新しい時期に形成された微高地の可能性ある。6層は湿地を示す腐植層で7層以下はグライ化した粘土である。



層とは異なりしっかりとした粘質土で、比較的新しい時期に形成された微高地の可能性がある。6層は湿地を示す腐植層で7層以下はグライ化した粘土である。

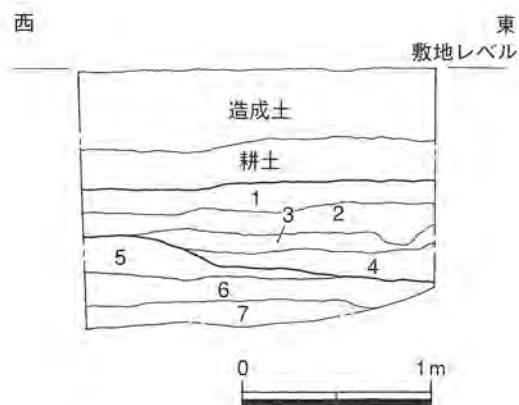
調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかったが、調査地よりも東側は高梁川の影響下にあり、氾濫原と推測される。

(松尾)

第19図 調査地位置図 (S=1/10,000)



第20図 調査地位置図 (S=1/400)



層序

1. 灰白色砂質土 (2.5Y8/2)
2. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
3. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)
4. 灰白色粗砂 (2.5Y8/1), 洪水砂
5. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4)
6. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1), 湿地腐植層
7. 暗オリーブ灰色粘質土 (5GY4/1)

第21図 土層断面図 (S=1/40)

## 個人住宅浄化槽建設に伴う立会調査

遺跡名 深町遺跡

所在地 総社市北溝手地内

調査期日 2009（平成21）年7月3日

### 調査概要

今回の立会調査は個人住宅建設に伴うもので、提出された建築計画によると地下に影響を及ぼす掘削は浄化槽設置による据え付け穴だけであるため掘削時に立会を行った。

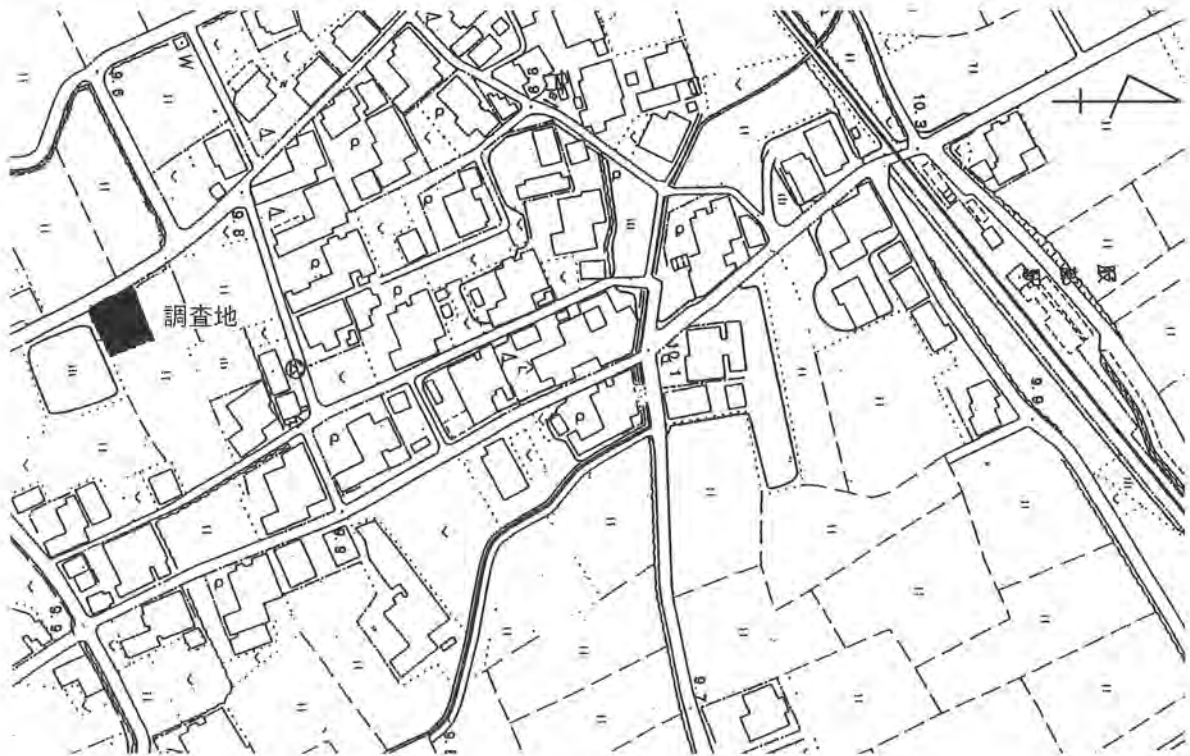
調査対象地（第22図）は国道180号バイパスからJR吉備線服部駅へ通じる市道の西側に位置し、地形から推定すると平成14年度に国道バイパス建設に伴い県教委が発掘調査を行った北溝手遺跡に含まれると考えられる。

この県教委による発掘調査では古代～中世の遺物を包含した旧河道が確認されており、現在のJR服部駅の南に広がる深町集落一带に集落遺跡が存在することが予想されている。

浄化槽は1×2mの大きさと深さ約2mの掘削を予定しており、重機で掘り下げて土層断面の精査を行い遺構の有無の確認を行った。

土層断面は、薄い中近世水田層の下層には、遺構・遺物は存在しなかったものの厚さ約40cmのやや砂質の暗黄茶色の安定した基盤土層があり、その下層にはやや粘土質の暗黄褐色土層が確認された。

このことから、調査地は遺構は希薄であるが安定した微高地であり、周辺の調査成果を勘案するならば開発に際しての細やかな対応が必要な地域であろう。（武田）



第22図 調査地位置図（S=1/2,500）

## 個人住宅の造成工事に伴う立会調査

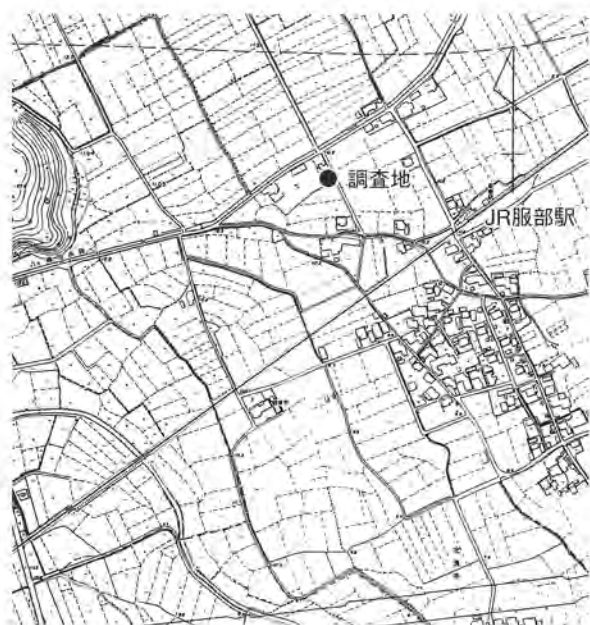
所在地 総社市北溝手字釵先キ424-1ほか

調査日 2009（平成21）年8月25日

調査地はJR服部駅から北西へ約200m、岡山自動車道から南へ約150mの水田に位置する。調査地の西側には西山丘陵が東西へ延び、丘陵東側の頂部には式内社の古郡神社が鎮座している。また、西山丘陵の南裾から調査地の西側にかけては旧河道が存在し、水田地割がその痕跡を留めている。

調査地では個人住宅の敷地造成が行われ、外周に擁壁が設置されることから擁壁の掘削部分を対象に工事立会を実施した。造成地北側の土層を断面調査した結果、水田層を確認した。4層を境に灰色の強い粘質土となり、中世以降、連綿と水田経営された状況がうかがえるが、遺物は出土していない。

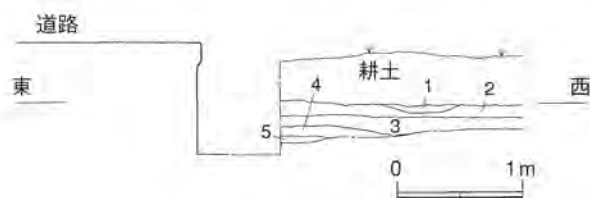
なお、当地は12カ郷用水の縁辺部であり、「備中国賀陽郡服部郷図」では「八妹里、坪付四条四丁」となっており、鎌倉時代には条里水田であったことが判明している。（松尾）



第23図 調査地位置図 (S=1/10,000)



第24図 調査地位置図 (S=1/400)



第25図 土層断面図 (S=1/60)

### 層序

1. 褐灰色砂質土 (10YR6/1)
2. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2), 中, 水田層
3. にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/3), 中, 水田層
4. 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1), やや硬, 水田層
5. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3), 中, 水田層

## 個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市清音村軽部梶木780-4番地

調査期間 2009（平成21年）年9月2日

### 調査概要

今回の立会調査は、個人住宅建設に伴う擁壁基礎建設に対応したものである。

通常、個人住宅の擁壁は浅い基礎掘削で済む場合が多いが、今回の用地は西側を走る南北方向の農業用水路との関係から強固なコンクリート壁を建設する必要が生じ、基礎掘削の規模は長さ6.5m、幅1.5m、深さ1.5mが予定された。

調査対象地が含まれる軽部地区はJR清音駅の東、県道清音真金線沿いに位置し、旧清音村域の中でも比較的古い集落が営まれてきたことから一帯は古来より安定した微高地であったとみられる。

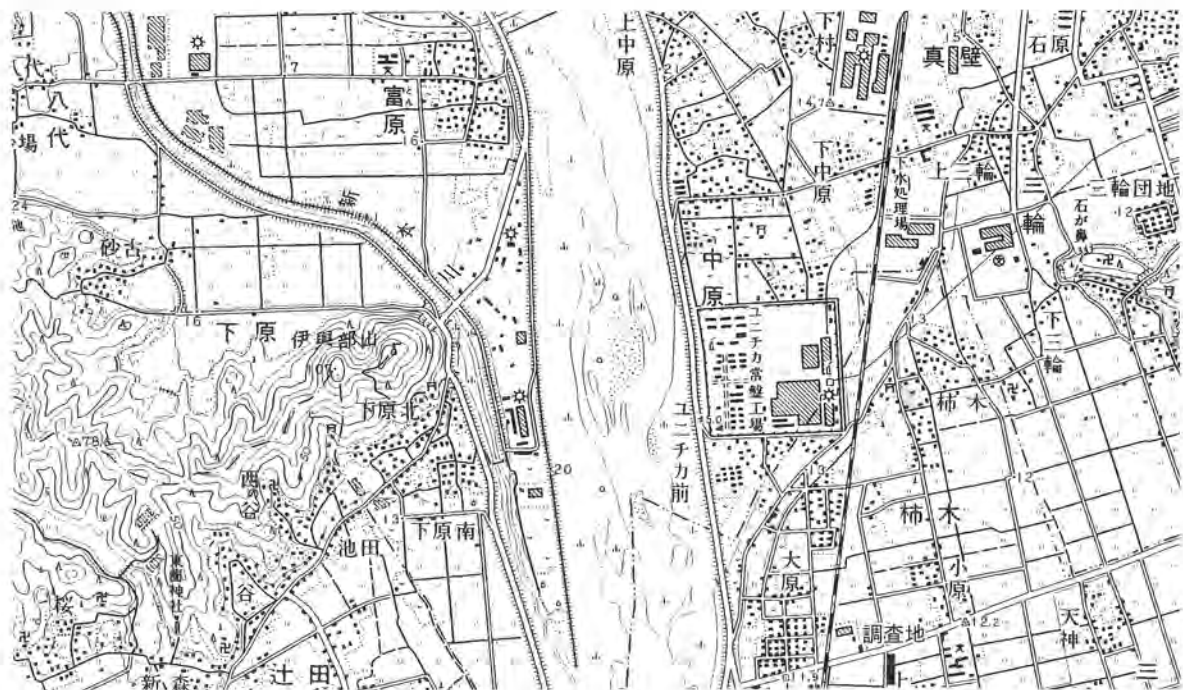
立会調査は前述のように用水路に隣接しており、掘削予定レベルも水路底面より低いことから湧水や水路建設時の攪乱が予想されるため遺構の平面検出は断念し、重機により掘り下げて土層断面の観察を行った。

土層断面の観察から、調査対象地には旧水田に1m近い造成土が盛られており、旧水田下のほぼ海拔11mで柱穴・土壙等の中世の遺構面が確認できた。（第27図）

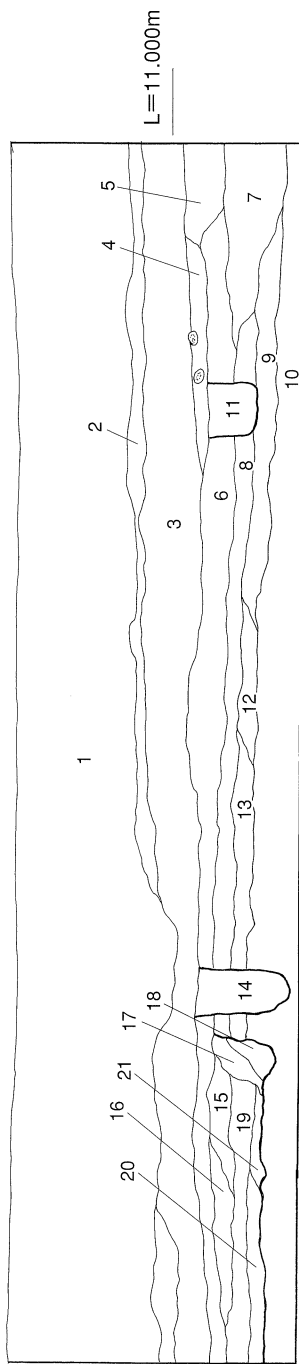
また、ほぼ同じ面で須恵器を含む古墳時代の住居跡も確認された他、住居が掘りこまれているのも須恵器・土師器を含む遺物包含層であることから今回の掘削予定レベルでは無遺物の基盤層は確認できなかった。

以上のことから、従来、発掘調査例の少なかった調査対象地一帯が古くから安定した微高地で濃密な遺構と分厚い遺物包含層が存在することが明らかになり、今後の開発に際しては細心の注意が必要であろう。

（武田）



第26図 調査地位置図 (S=1/25,000)



層序

1. 造成土
2. 近世水田
3. しまりがない淡灰褐色砂質土、土器片・炭を含む（中世包含層）
4. しまりのない淡黄灰色砂質土（中世土壌）
5. 細かい淡灰褐色砂質土
6. 淡灰褐色砂質土、砂利少量含む（中世包含層）
7. 細かく締まりのある灰褐色砂質土
8. 細かく締まりのある暗褐色砂質土
9. 細かく締まりのある淡暗灰茶褐色砂質土
10. よく締まった茶黄褐色土、須恵器・焼土・炭を含む（古墳時代包含層）

11. 細かい淡灰色砂質土（中世柱穴）
12. やや砂質の暗灰茶色土
13. やや砂質の淡灰茶色土
14. 細かく締まりのある淡灰茶色砂質土（中世柱穴）
15. 細かく締まりのある暗灰茶色土（15～21は住居址埋土）
16. 細かく締まりのある暗黄茶色土
17. 細かく締まりのある暗灰黄褐色土
18. やや粘質の暗灰黄褐色土
19. よく締まった暗黄灰褐色土、焼土・炭を含む
20. よく締まった暗茶灰褐色土、焼土・炭を含む
21. よく締まった暗黄灰色土、焼土・炭を含む（住居址貼り床）

第27図 土層断面図 (S=1/40)

## 個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市山手地頭片山

調査期間 2009（平成21）年9月8日

### 調査概要

今回の立会調査は個人住宅の建築に伴うもので、対象地は地頭片山地区の奥まった狭小な谷に位置している。福山山塊から北に派生する細長い尾根に挟まれ、主に谷水田として利用されてきた北向きの緩い斜面の谷開口部には、谷を遮るように片山新池、地頭新池が築造されている。

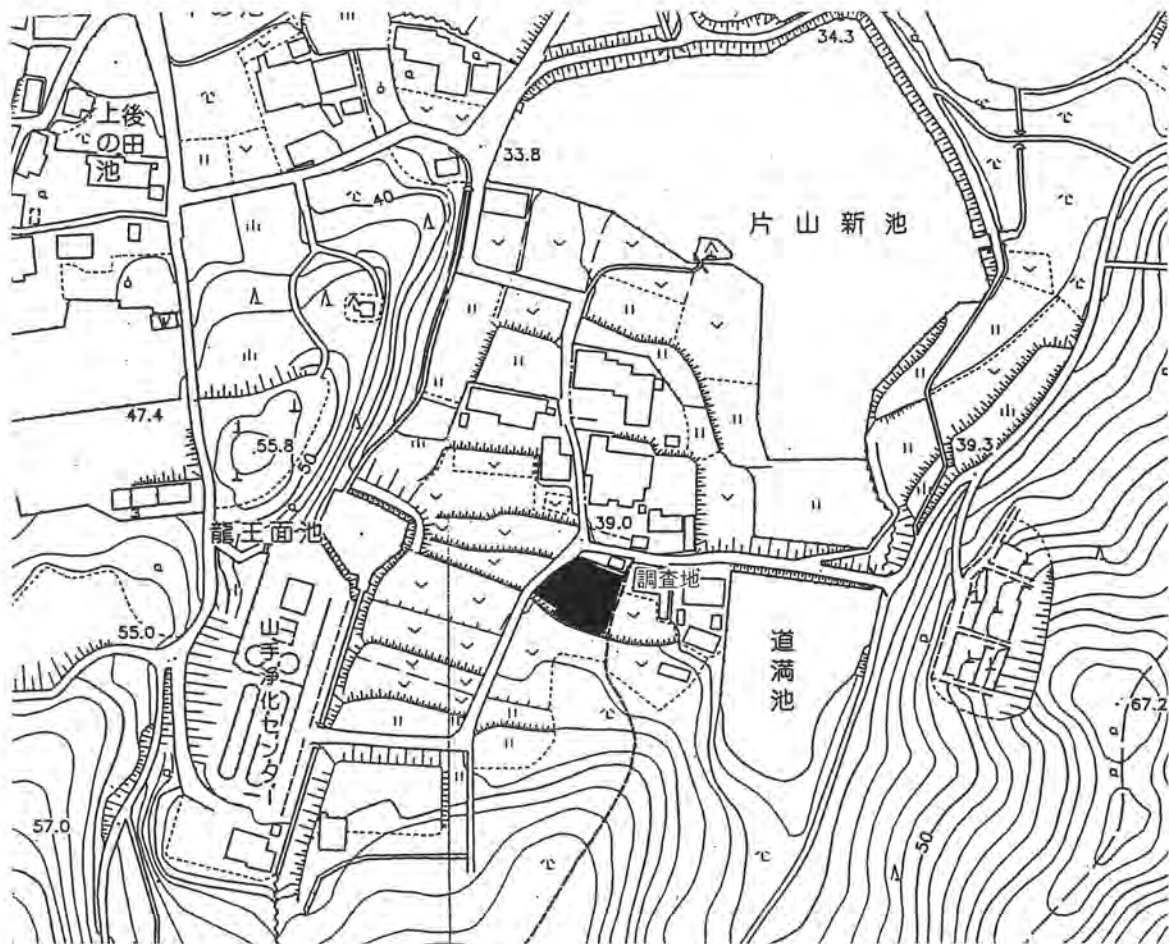
この小谷の両側の低い尾根部～斜面には多数の古墳の存在が確認されており、中でも調査対象地の上方にある道満塚古墳は旧山手村内では最大級の7m弱の横穴式石室を有することで知られている。

今回の個人住宅の建設は、階段状の旧水田に薄い土盛りを行う計画であり、地下に影響を及ぼすのは造成に伴うコンクリート擁壁の基礎掘削のみであるため工事時の立会を行うこととした。

工事着手前の水田は斜面を削平して谷側に埋め出したと考えられ、山側の掘削では水田層の直下で地山面が露頭したのに対し、谷側では約1mの深さの掘削予定レベルで地山面は確認できなかった。

今回の立会で観察できた土層断面では水田造成土内であるため遺構は確認できなかったが、造成土中に須恵器・土師器片の散布がみられる点と地形を勘案すれば、一帯には古墳時代の集落が存在していた可能性は十分考えられる。

（武田）



第28図 調査地位置図 (S=1/2,500)

## 地頭3号墳の確認調査

遺跡名 地頭3号墳

所在地 総社市山手地頭片山413

調査期間 平成21年9月11日

### 調査概要

今回の確認調査の対象となった地頭3号墳は総社市地頭片山に所在し、岡山県遺跡地図作成時の現地調査では、開墾により著しく損壊し土器などの遺物が出土したと伝えられている。

本墳が所在する福山山塊から北に緩やかに派生する尾根には、本墳を含む地頭片山古墳群と呼ばれる20基前後の古墳群が所在していたと推定されるが、過去の開墾と土砂採取により旧地形は大きく改変され、古墳群を構成していた古墳の多くは旧状をとどめていない。

ただ、本墳が所在する尾根稜線頂部周辺は近世墓が存在することから旧山手村有地となっていたため開発を免れたものの、用地境の西側と北側は高さ20m以上の絶壁状に削られている。

今回の確認調査は、平成21年9月に公有地に隣接する民有地での土取り中に古墳の周溝とみられる地山の改変が確認されたことを受け、将来的な保存検討資料とするため古墳の残存状況と規模の確認を、残存する公有地の高まりを対象として実施した。

確認調査は高まりの頂部に所在する近世墓を中心にして東西方向の2本の試掘溝（第30図）を設定して掘り下げ、併せて途中で確認された竪穴式石室の検出も行った。

T-1（第31図）では、平坦な旧表土層上に2m以上の非常に緻密な墳丘盛土が確認された。また、埋葬主体部の竪穴式石室が通常の当地域の古墳にみられるように地山に墓壙を掘ることなく、旧表土から約1mの高さに墳丘の盛土と同時に石材を組み上げて構築した特異な構造が明らかになった。

T-2（第31図）では、果樹園で削平された西側斜面でわずかに残る周溝が検出され、東側斜面で確認された落ち込みと併せて推定すると、本墳の規模は直径約20mの円墳と考えられるが、削平が著しい尾根主軸の地山の高さを復元して勘案すると南側に造り出しが付く可能性が高い。



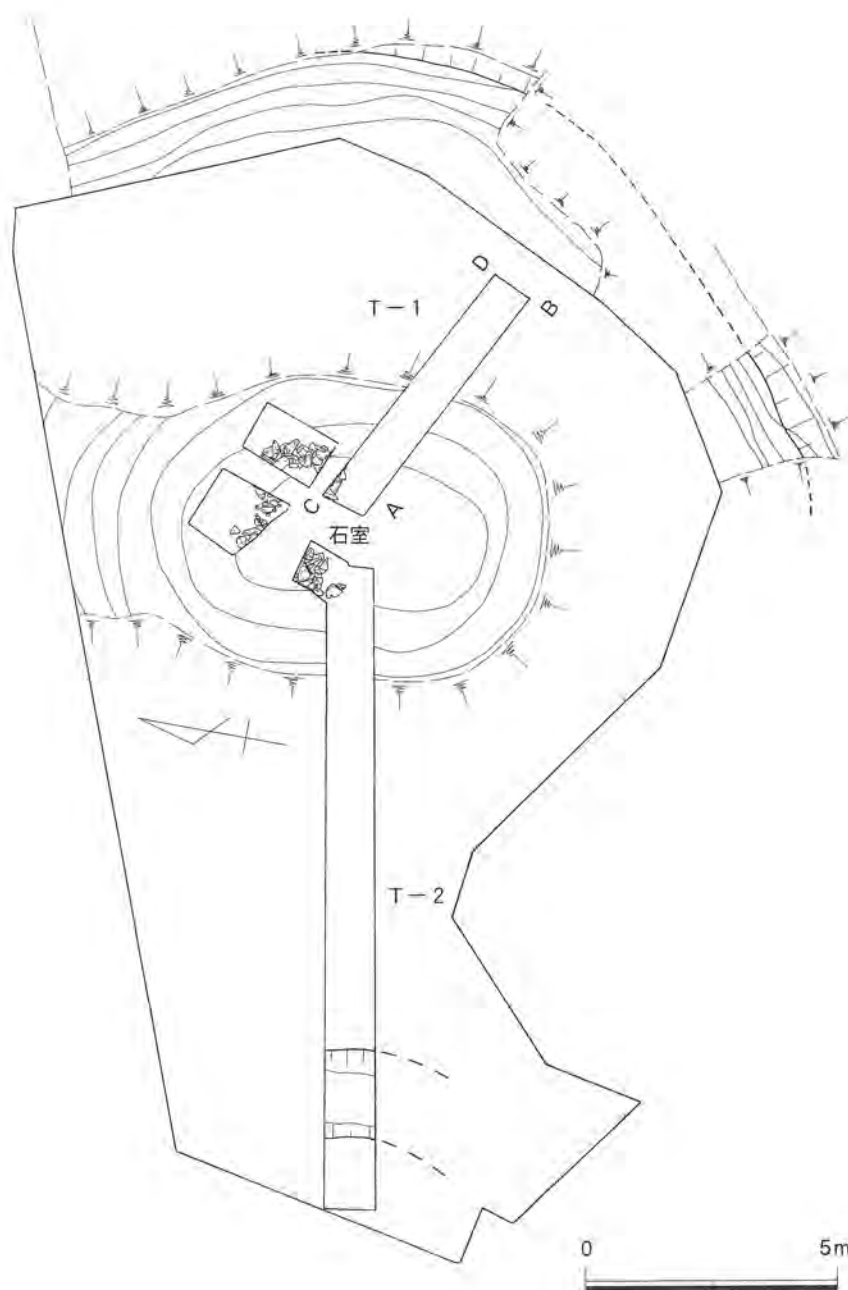
第29図 調査地位置図 (S=1/25,000)



竪穴式石室は盗掘により側壁上端の石材が散乱しており、遺存する石積みの上端のみの検出を行い平面的な規模の把握にとどめた。検出状況から推定される石室の規模は、内矩で全長約350cm、幅約150cmと考えられ、その主軸はほぼ東西方向である。

本墳に伴う出土遺物は、石室の攪乱土中から翡翠製の勾玉1点、蛇紋岩製の勾玉2点、ガラス製小玉8点と小型の銅鏡片1点が出土した他に周溝中から埴輪片と須恵器片が少量出土した。

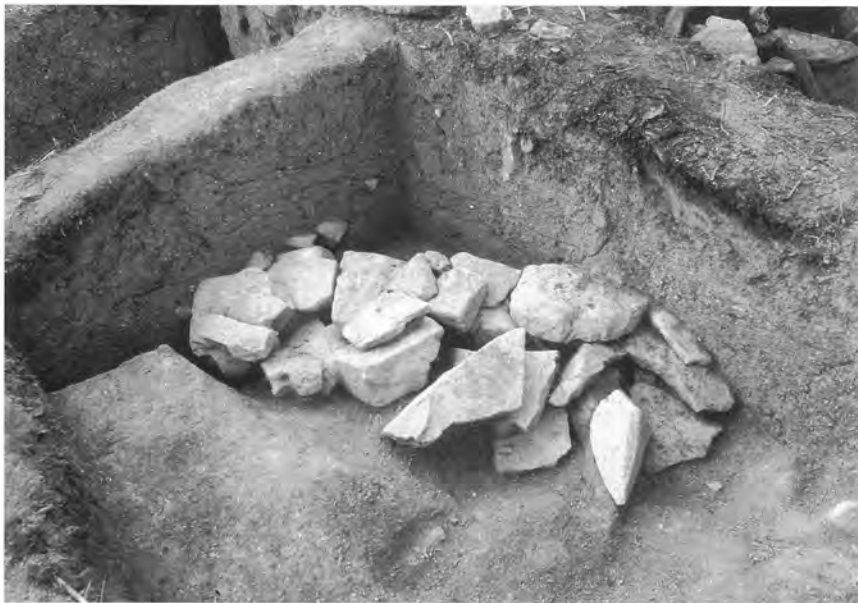
以上の遺物が示す年代は6世紀初頭と推定され、竪穴式石室の構造とも矛盾がないことから本墳の築造時期はほぼその時期とみて大過ないと考えられる。 (武田)



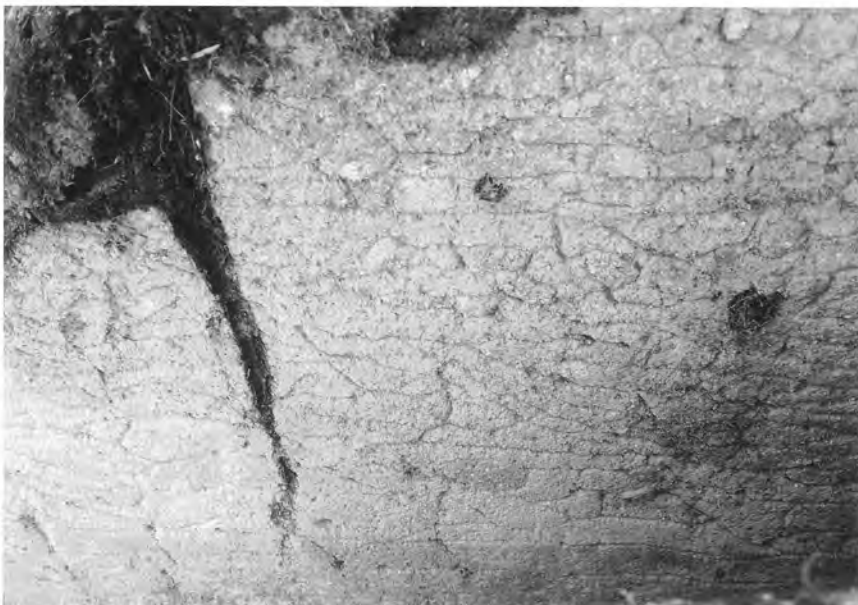
第30図 墳丘平面図 (S=1/150)



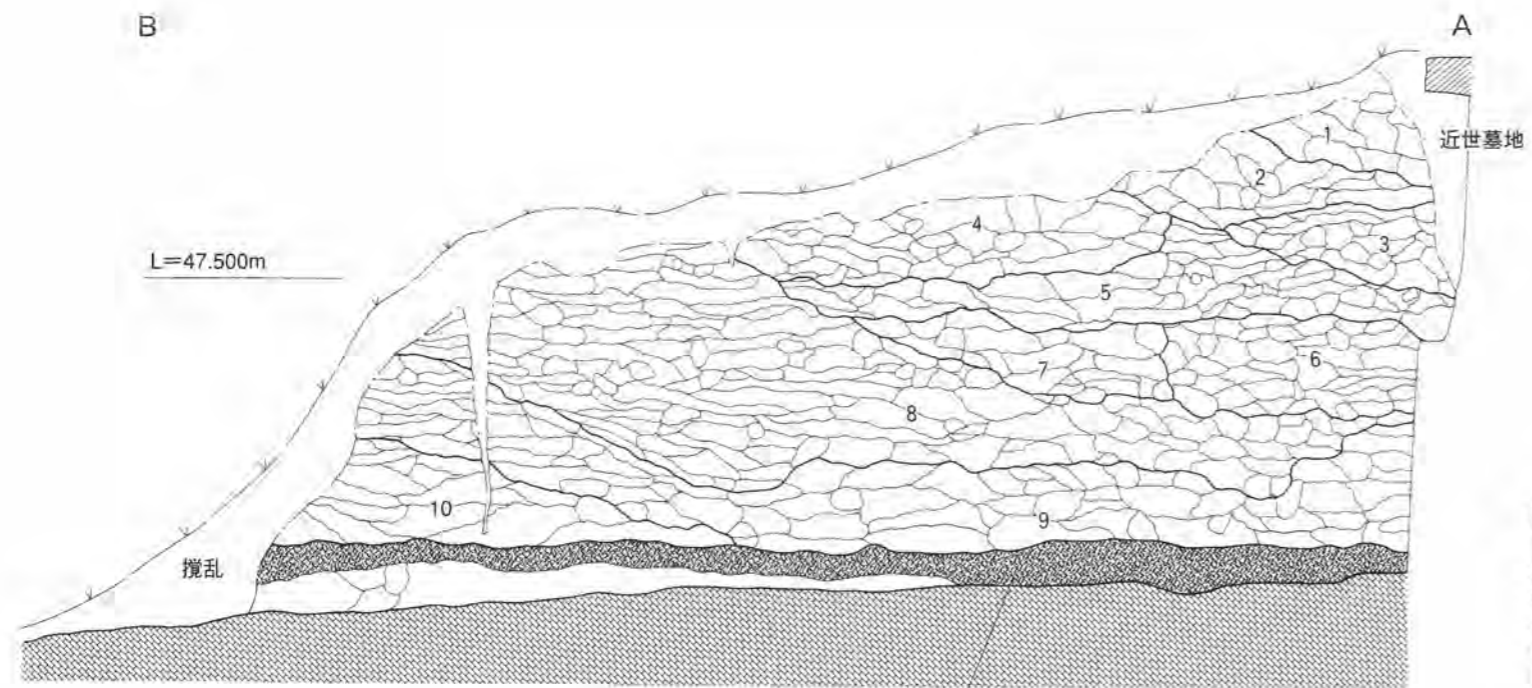
第3図版 墳丘遠景  
(東から)



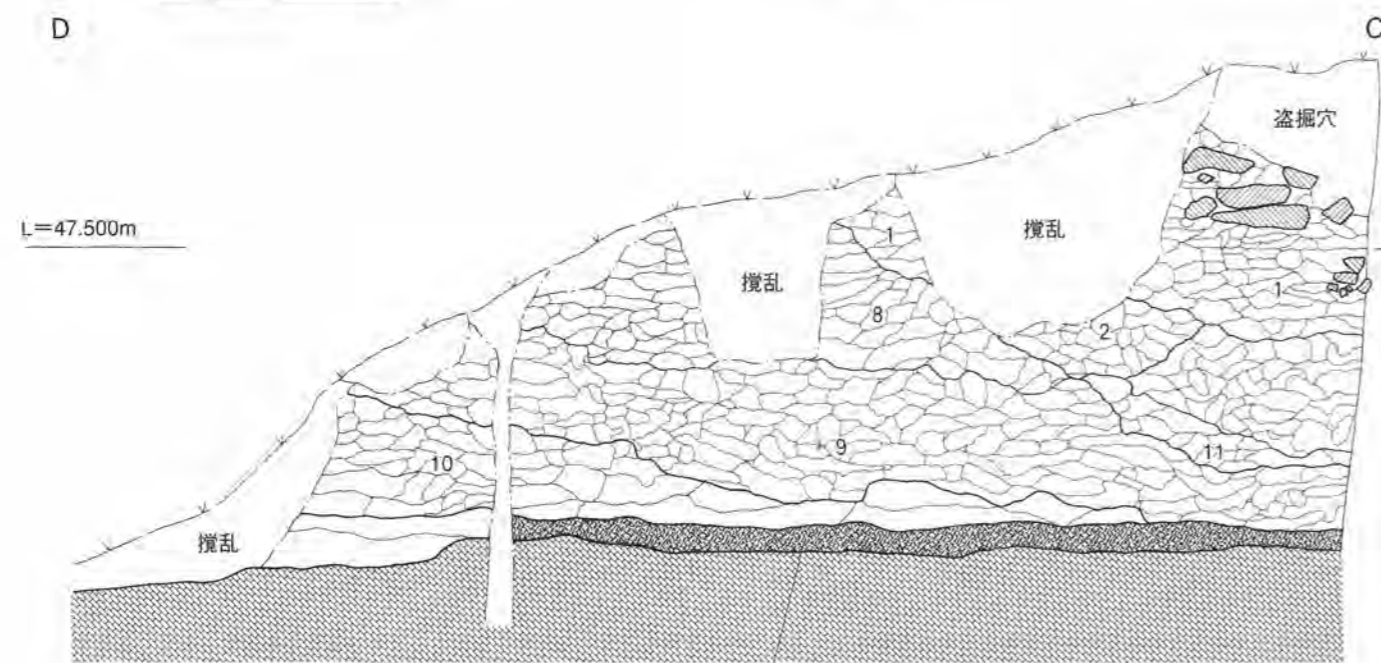
第4図版 石室検出状態  
(北から)



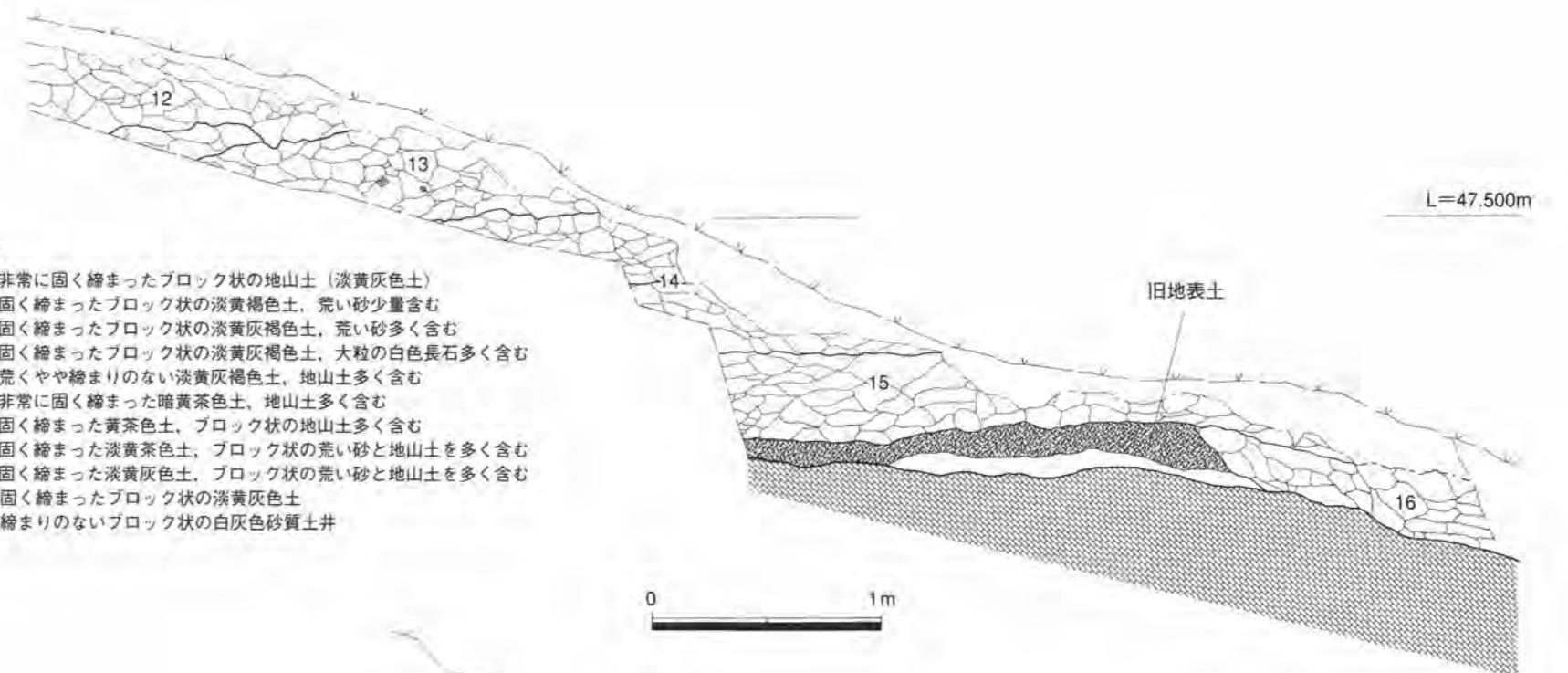
第5図版 墳丘断面T-1  
(D-Cライン)



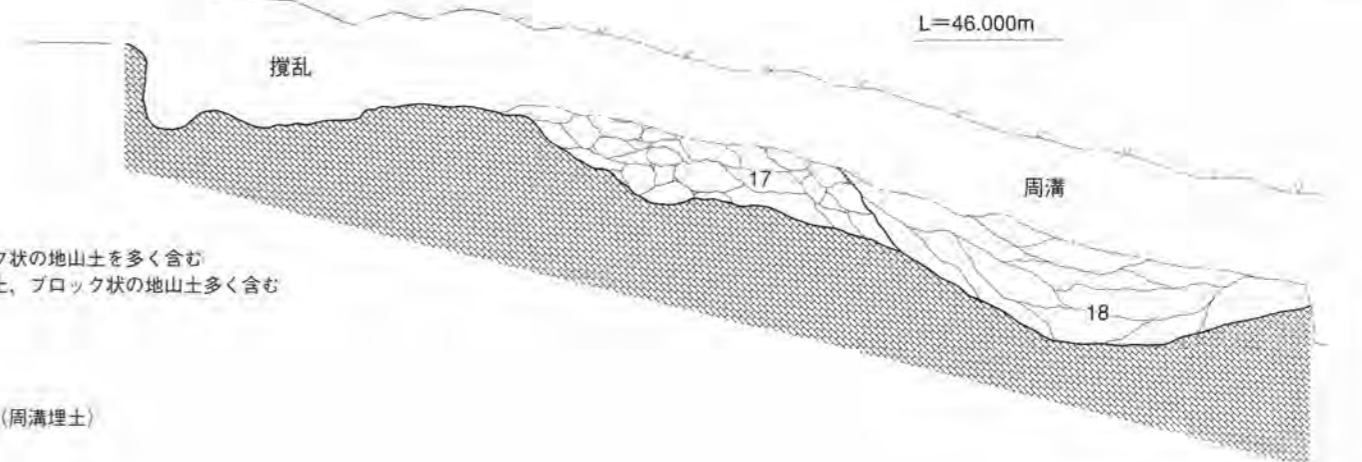
0 1m



0 1m



0 1m



- 層序
1. 非常に固く締まったブロック状の地山土 (淡黄灰色土)
  2. 固く締まったブロック状の淡黄褐色土, 荒い砂少量含む
  3. 固く締まったブロック状の淡黄灰褐色土, 荒い砂多く含む
  4. 固く締まったブロック状の淡黄灰褐色土, 大粒の白色長石多く含む
  5. 荒くやや締まりのない淡黄灰褐色土, 地山土多く含む
  6. 非常に固く締まった暗黄茶色土, 地山土多く含む
  7. 固く締まった黄茶色土, ブロック状の地山土多く含む
  8. 固く締まった淡黄茶色土, ブロック状の荒い砂と地山土を多く含む
  9. 固く締まった淡黄灰色土, ブロック状の荒い砂と地山土を多く含む
  10. 固く締まったブロック状の淡黄灰色土
  11. 締まりのないブロック状の白灰色砂質土井

12. 固く締まった淡黄茶色土, ブロック状の地山土を多く含む
13. やや荒く締まりのある淡黄灰褐色土, ブロック状の地山土多く含む
14. 7と同じ
15. 8と同じ
16. 12と同じ
17. 5と同じ
18. 締まりがなく細かい暗黄灰褐色土 (周溝埋土)

第31図 T-1・T-2 墳丘土層断面図 (S=1/30)

## 個人住宅の建設工事に伴う確認調査

遺跡名 延遺跡

所在 総社市井手字西延492-1ほか

調査日 2009（平成21）年10月1日

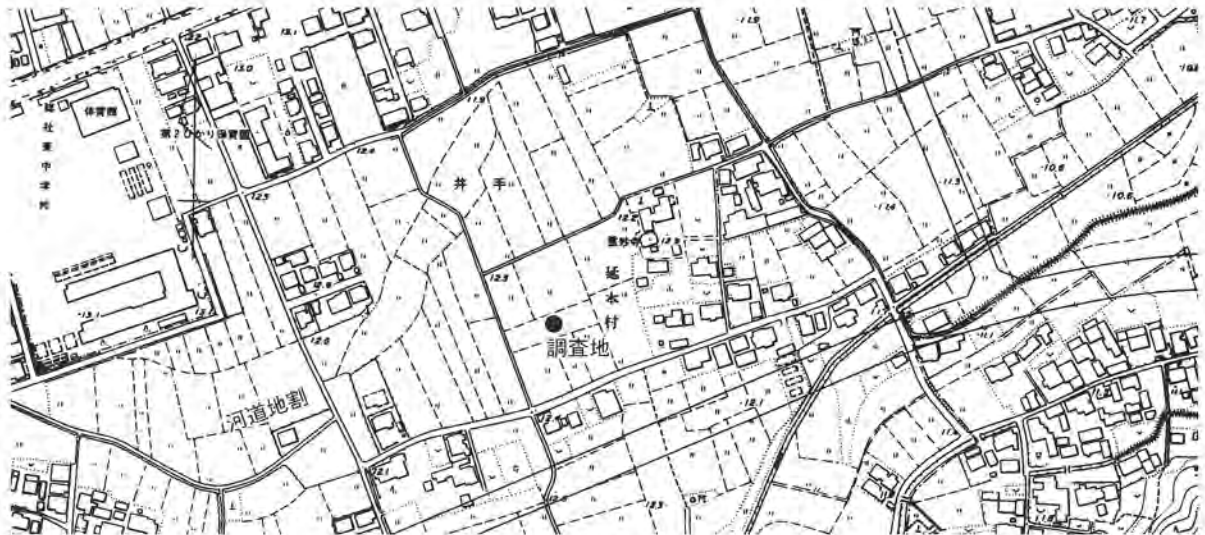
### 調査概要

調査地は総社市街地より東側の延遺跡に含まれる。現況は水田を埋め立てた分譲宅地であり、周囲では住宅開発が進行している。調査地より北へ100mの水田には高梁川分流の河道地割が残されているが、当地は平成14・15年度に発掘調査された西延遺跡（延遺跡に統一）と同一の微高地に立地する。

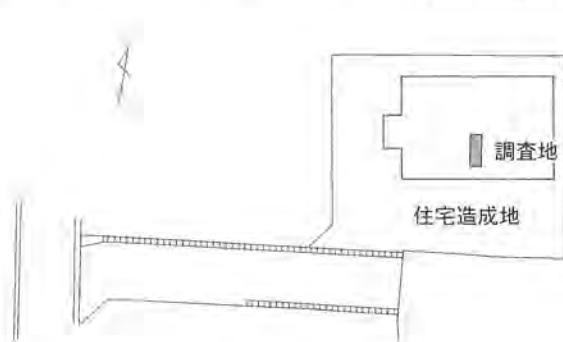
工事は個人住宅の建設工事に伴い建物基礎を約12m×8mの範囲で、造成面から深さ1.2mを掘り下げる表層改良を実施することになった。現地はすでに田面から約80cmの高さまで地上げされていたが、事前に確認調査を実施することにした。

掘削範囲の中央にトレンチを設定した結果、層序は1層が耕土、2層は水田床土、3層は近世の床土であり、3層上面より焼土層を検出した。そして7層が比較的硬く安定した基盤層となり、層上面から掘り込まれた土層を2基検出した。遺物は出土していないため時期は不明であるが、確実に遺構が存在することから遺構面（7層上面）までは掘削しないよう変更を申し入れた。承認された。

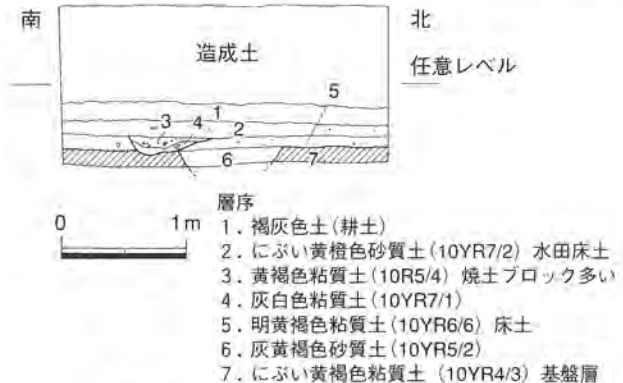
そのため、慎重工事での対応となり、当地では遺跡が保護されることになった。（松尾）



第32図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第33図 調査地位置図 (S=1/600)



第34図 土層断面図 (S=1/60)

## 携帯電話基地局建設工事に伴う確認調査

遺跡名 北溝手遺跡

所在 総社市北溝手字柚木203-1

調査日 2009（平成21）年10月21・22日

### 調査概要

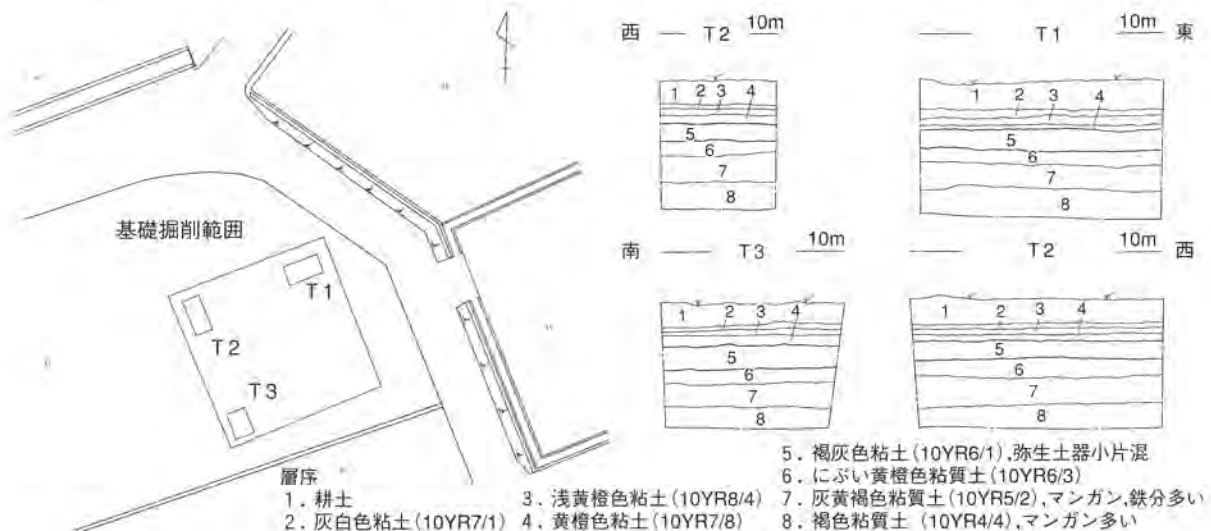
調査地は岡山県立大学より北へ約100m、岡山自動車道から南へ30mの水田に位置し、北溝手遺跡に含まれる。

水田部分に携帯電話基地局を新設することとなり、鉄塔、周辺機器を設地するための工事が実施されることになった。この内、地下掘削を伴うアンゲル鉄塔については、掘削範囲が8.7m四方で、深さ約1mを掘り下げるため鉄塔の基礎部分を対象に事前に確認調査をおこなった。

調査は断面観察ができるよう東西、南北方向に3箇所のトレンチを設定した。層序は1層が耕土、2層～4層は近世の水田層であり、層中から弥生土器、須恵器、磁器片を包含するが、全てが小片でローリングを受けており、すぐ近くの南溝手遺跡から流入したものと考えられる。5層の褐灰色粘土は弥生時代後期の土器片をごくわずかに含んでいた。6層から8層は砂を含む粘質土となり、下層ほどマンガンを多く含み、8層は層全体が硬質となっていた。



第35図 調査地位置図 (S=1/20,000)



第36図 トレンチ配置図 (S=1/400)

第37図 土層断面図 (S=1/60)

南溝手遺跡に含まれる岡山県立大学では、敷地の北側が微高地の低位部になることが判明しており、岡山自動車道の発掘調査では、当地よりも東側と西側に微高地が確認されている。つまり調査地は低位部に相当し、遺構・遺物も少ないと評価されている。

今回の調査も、これらの調査結果を追認するものであるが、岡山県がわずかに確認したとされる縄文晩期の土器片は最下層（8層）においても出土せず、無遺物層であった。（松尾）

#### 参考文献

「藪田古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121岡山県教育委員会 1997年

「服部遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』162岡山県教育委員会 2002年



調査地全景（北西から）



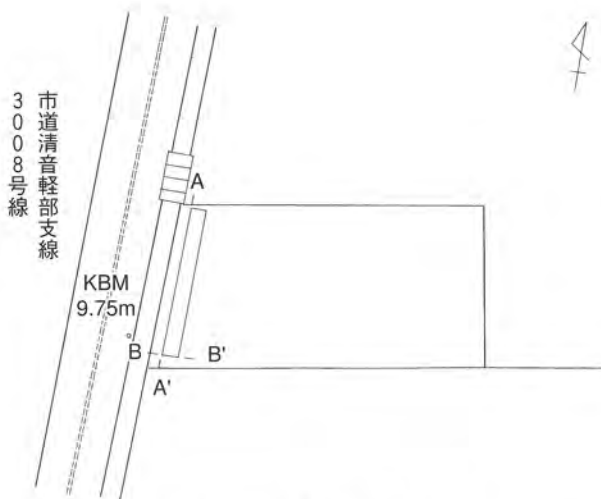
T 2（南から）



T 3（東から）

#### 第6図版 調査状況

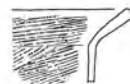




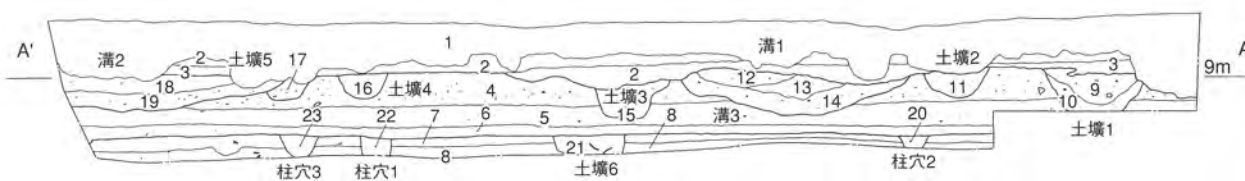
第39図 トレンチ配置図 (S=1/600)



第7図版 トレンチ断面 (南から)

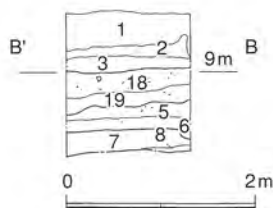


第40図 土壌6出土遺物 (S=1/4)



層序

- |  |  |
|--|--|
| 1. 造成土                                 | 5. にぶい黄橙色微砂 (10YR6/4) 炭少含              |
| 2. 耕作土                                 | 6. 暗灰黄色微砂 (2.5YR5/2) 中世土器片含, 炭少, 遺物包含層 |
| 3. 水田床土                                | 7. にぶい黄色微砂 (2.5Y6/4) 硬い                |
| 4. にぶい黄橙色砂質土 (10YR5/3) 中世土器片, 炭粒, 多く含む | 8. 灰黄色微砂 (2.5Y6/2) やや硬い, 遺物少           |



遺構埋土

- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 土壌1 9. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/5)<br>炭, 土器混 | 土壌3 15. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)<br>炭, 土器片混 |
| ◇ 10. オリーブ褐色砂質土 (2.5YR4/3)<br>炭少混    | 土壌4 16. 15と同じ                       |
| 土壌2 11. にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/3)<br>土器粒混  | 土壌5 17. 15と同じ                       |
| 溝1 12. オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/4)           | 溝2 18. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)<br>炭, 土器片混 |
| ◇ 13. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)<br>炭, 土器片少    | ◇ 19. 黄褐色砂質土 (2.5Y8/3)<br>炭, 土器片混   |
| ◇ 14. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)<br>土器, 炭混  | 柱穴1 20. 黄褐色微砂 (2.5Y5/4)             |
|                                      | 土壌6 21. 浅黄色微砂 (2.5Y7/3) 中世土器含       |
|                                      | 柱穴2 22. 21と同じ                       |
|                                      | 柱穴3 23. 21と同じ                       |

第41図 トレンチ断面図 (S=1/80)



第8図版 トレンチ断面 (南東から)



第9図版 トレンチ断面 (東から)



## 農業用水路改修工事に伴う立会調査

遺跡名 軽部遺跡

所在地 総社市清音軽部梶木780-4番地先～747-3番地先

調査日 2010（平成22）年1月12・13日，2月8・9日

### 1. はじめに

調査地は清音小学校より西へ200m離れ、県道清音真金線と交差する南北道路に併設された農業用水路である。このたび県道との交差点から南へ約145mまでの水路が改修されることになった。

周辺地形は調査地の北端が高く、漸次南に向かって低くなり、字名は北側から中央にかけて「向原」、南端近くは「又八川」であり、地形と字名が符号すると推測された。また、調査地の隣接地では宅地造成に伴う立会調査で、中世の遺構面を2面確認している。

水路工事は現況の水路を除去し、同一位置に新設するもので既存の水路を撤去し、水路底をすき取る段階で立会調査を実施した。調査は遺構検出に留め、断面は隣接する造成工事の土層に準じ（第41図参照）、適宜柱状図を作成した。

### 2. 北側調査区

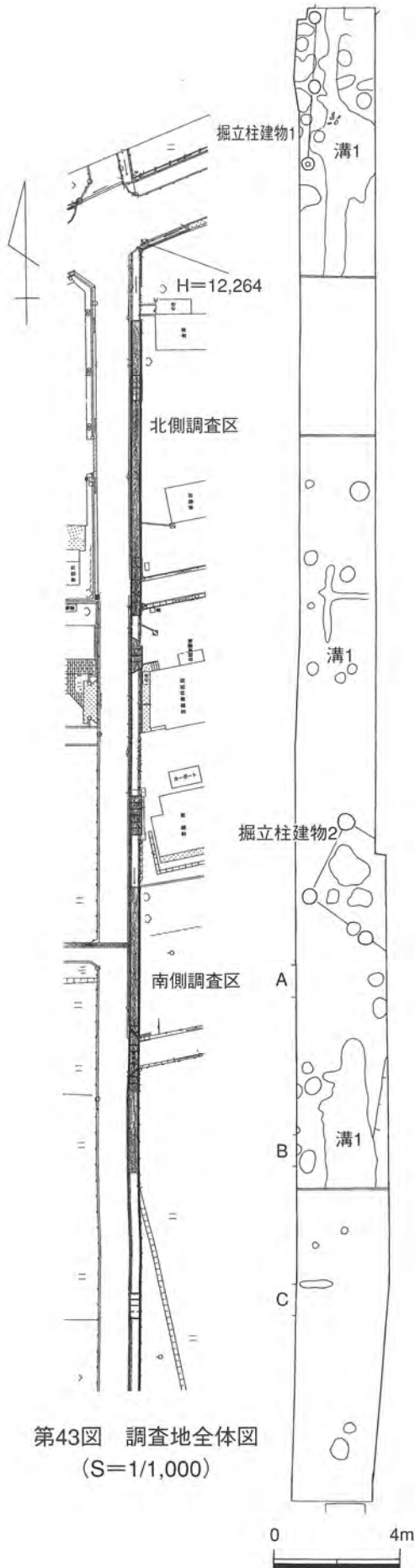
層序は1層が中世土器や炭粒を含む遺物包含層，2層は無遺物層である。2層以下は13世紀の遺物を含む包含層であるが、今回は掘削が及んでいない。

遺構は全体的に北端部で密度が濃く、南に向かうにつれ希薄となり、掘立柱建物2棟，柱穴，土塋，溝1条を検出した。掘立柱建物1は2間分の柱が南北方向に並び，柱穴から14世紀中葉の備前焼摺鉢（11）が出土した。掘立柱建物2は主軸を北西から南東にとり，出土した遺物小片から時期は14世紀以降と考えられる。柱穴や土塋は1層上面から掘り込まれ，中世後期の遺構である。

南北方向に流れる溝1は埋土がグライ化しており，農業用水路よりも前身の水路と考えられる。切り合い関係から最も新しい遺構であり，中世土器（7～10）が混入していた。



第42図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第43図 調査地全体図  
(S=1/1,000)



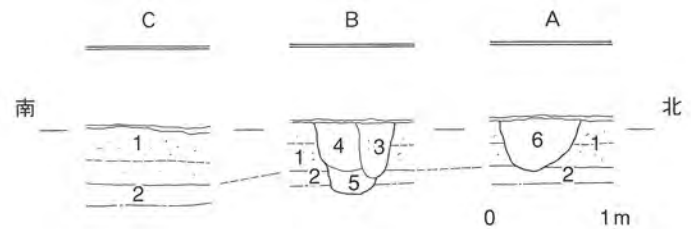
第11図版 調査区中間  
(北から)



第10図版 調査区北端  
(北から)



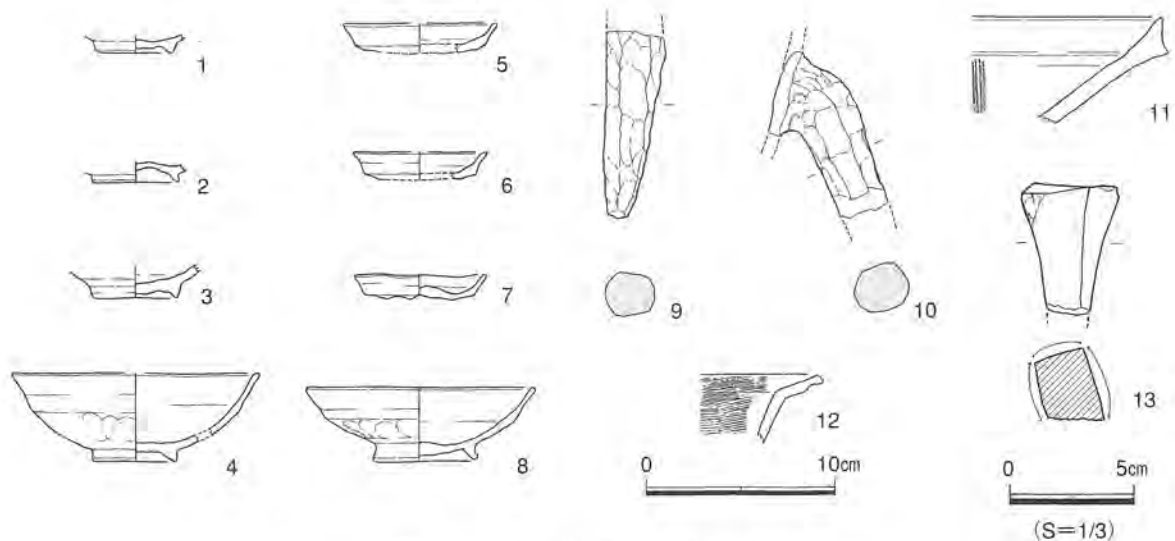
第12図版 調査区南半  
(南から)



- 層序
- |  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)<br>中世土器片, 炭粒多く含む | 3. 黄褐色砂質土(2.5Y5/3)    |
| 2. にぶい黄褐色微砂(10YR5/3)                   | 4. にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) |
|  | 5. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) |
|  | 6. 黄褐色砂質土(2.5Y5/3)    |

第45図 柱状図 (S=1/60)

第44図 平面図 (S=1/200)



第46図 出土遺物 (S=1/4, 1/3)

出土遺物は1層の中世包含層から早鳥式土器碗(1~4)、皿(5, 6)などが出土した。溝1からは早鳥式土器皿(7)、碗(8)、三足付鍋(9, 10)が出土し、掘立柱建物1の柱穴内より備前焼摺鉢(11)と、調査区の北端より南へ約7mまでの遺構検出面において鍋(12)、砥石(13)が出土した。

早鳥式土器碗(1~4, 8)は高台が低く、断面が3角形状となり小形化した器形である。体部はヨコナデで仕上げ、内面底部には重ね焼き痕がある。焼成は良好で黄白色を呈し、14世紀初頭に比定される。皿(5~7)は底部外面をヘラ切り後に、ヘラ起こしの跡がみられ14世紀初頭に比定される。三足付鍋(9, 10)は棒状の脚部を指ナデと押さえで成形し、いずれも断面は円形を呈する。(9)は脚部が直線で先端がとがり、(10)は鍋の体部との接合部にあたる。体部内面はヨコハケ調整で、いずれも14世紀前半の所産である。

備前焼摺鉢(11)は頸の外面を外に引き出し、口縁端部は3角形状となる。内面にはスリメが施され、内外面に友土が塗られることから14世紀中葉に比定される。土師質鍋(12)は頸部がくの字に屈折し、端部を強くヨコナデする。外面は縦ハケ調整、内面はヨコハケ調整で仕上げる。

砥石(13)は長さ5.3cm、最大幅3.9cm、重さ64gを量り側面の3面を研磨し、残る一面と小口は自然面として残されている。

### 3、南側調査区

北側調査区から南へ43m隔てた南側調査区では、既存の水路と同じ位置と深さで改修されるため、水路底より深い掘削はなかった。調査区の北側ではグライ化した青灰色砂礫を検出し、幅12.3m以上の河道堆積を確認した。これが小字名に残る「又八川」であり、これより南側では全て軟質な砂質土であり洪水砂と考えられる。遺構、遺物はなく字名も「堤之上」であることから旧河道の影響を受けやすい氾濫原であったことがうかがえる。

### 4、まとめ

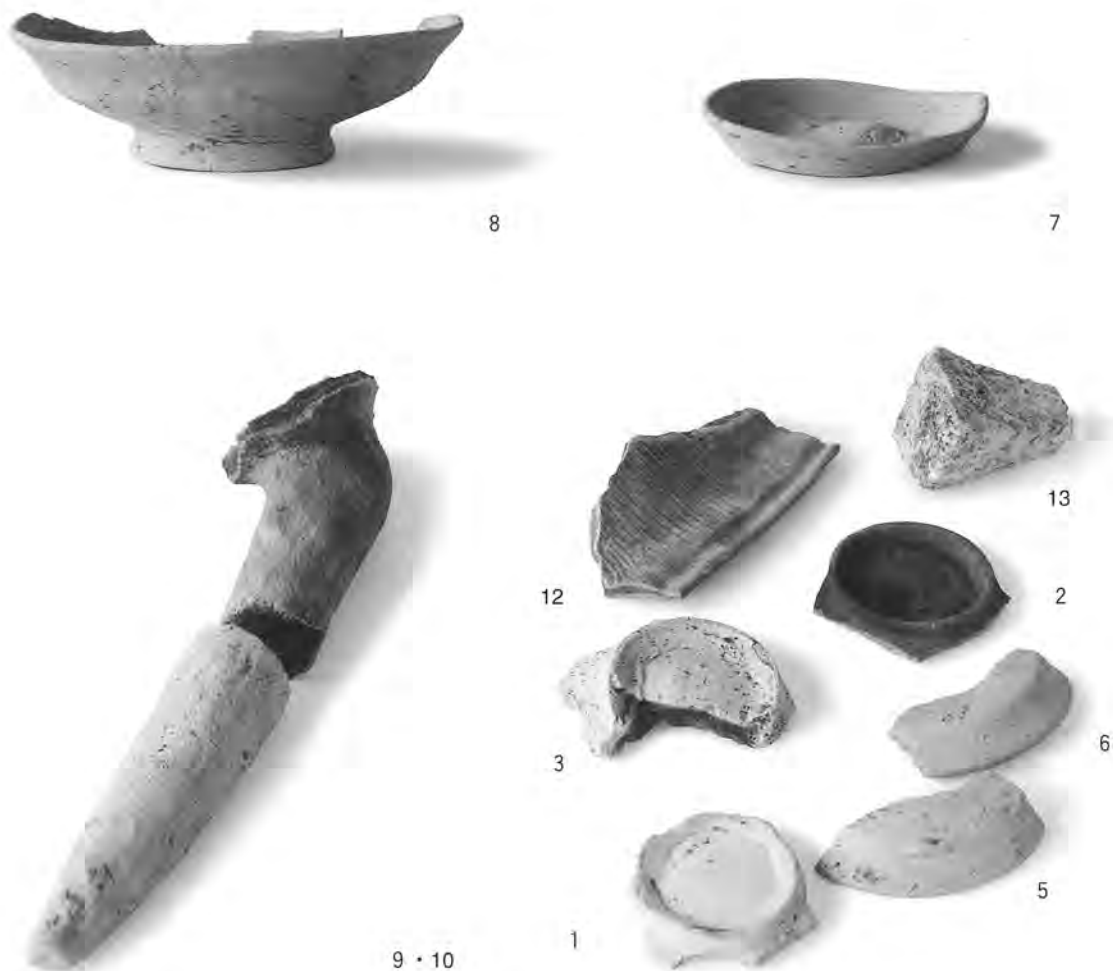
今回の調査は軽部遺跡の南北方向にトレンチを設定したに等しく、調査地の北側に検出遺構の中心

があり、南側には字名のとおり旧河道が埋没していることが判明した。当地では中世の遺構面が少なくとも2面あり、遺物の出土状況からみて、厚さ約30cmある1層は14世紀の遺物を含む包含層であり、下層の包含層（13世紀）から急速に沖積化が進行した様子がうかがえた。

また、北側調査区の東側は字名が「極楽寺」であり、遺構が集中している状況と関連が推測され、南側調査区では「又八川」が確認できるなど、軽部遺跡周辺の字名は中世以降の古環境が反映されている可能性がある。

調査の結果、清音軽部地区の沖積地において、北側調査区に中世集落が営まれることを確認したばかりではなく、軽部宿の周辺地において新たな資料を提供することになった。（松尾）

参考 「鹿田遺跡」4『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第11冊 岡山大学埋蔵文化財センター 1997年  
 時實奈歩「岡山県における中世前半期の煮炊具の様相」『環瀬戸内海の考古学』下巻 古代吉備研究会 2002年  
 「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告167』岡山県教育委員会 2002



第13図版 出土遺物

## 個人住宅造成工事に伴う立会調査

所在地 総社市総社字荒神西山前1954-6

調査日 2010（平成22）年1月19日

調査地は西山丘陵の南山麓に位置し、六ヶ郷用水に隣接する水田である。個人住宅の造成工事に伴い、敷地の南側と東側に擁壁を設置することになり工事立会を実施した。工事は幅約1.3m、深さ約60cmの規模で筋状に掘削し、主に南側の壁面を断面観察した。

層序は1～3層が耕土ないし水田床土層であり、以下の4～7層はいずれも中近世の水田層である。特に6層から中世後期の土師質鍋片が出土したことによって、中世から現在に至るまで連綿と水田経営されていたことがわかる。土師質鍋は口縁部が長く斜め上方に立ち上がり端部を肥厚する。内面には細かいヨコハケ調整と、外面に粗い縦ハケ調整を施し、端部をヨコナデする。時期は15世紀後葉に比定される<sup>(註)</sup>。

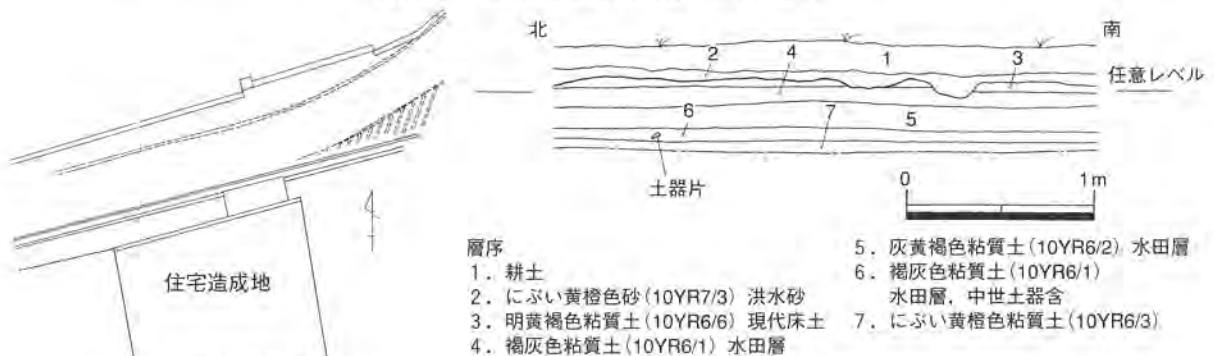
当地では山際を六ヶ郷用水が西から東へ流れ、さらに高梁川東分流の一つが調査地より南へ170m地点に河道地割として残されているなど、本来の地形は低位であり河川の影響を受けやすい環境にあったと考えられる。

(松尾)

註 「本谷遺跡ほか 圃井土井遺跡 鍛冶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 岡山県教育委員会 1988年



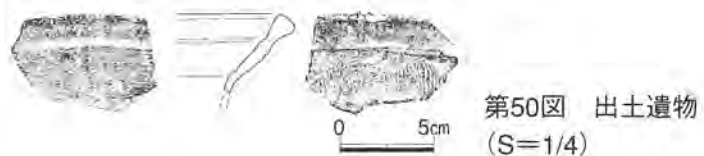
第47図 調査地位置図 (S=1/1,000)



第49図 土層断面図 (S=1/40)



第48図 土層位置図 (S=1/600)



第50図 出土遺物 (S=1/4)

## 電柱建設に伴う立会調査

遺跡名 神明遺跡

所在地 総社市福井240

調査日 2010（平成22）年2月25日

### 調査概要

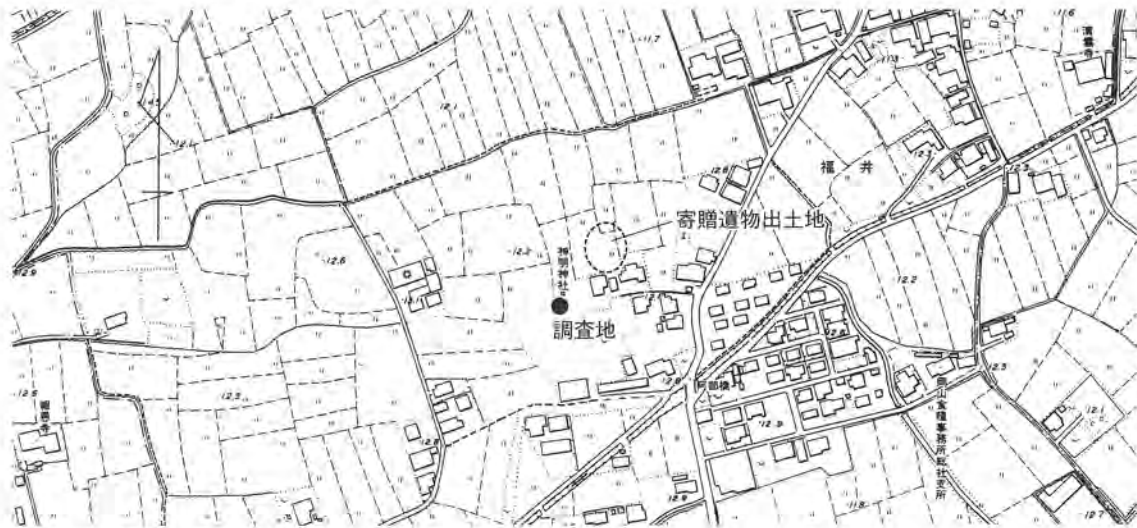
調査地は東総社駅より北東へ670m離れた神明神社境内に位置する。神明神社周辺は西山丘陵の南側山麓や東の刑部地区にみられる水田高と較べ地形が高く、周囲を踏査しても弥生土器片、須恵器片などが散布している。このたび神社に電気を引き込むための電柱が建てられることになり、工事立会を実施した。工事は電柱を埋めるため主に断面観察を行った。

層序は1層が神社の敷地造成土、2層がしまりのある灰黄色砂質土で周囲の耕作土と同レベルになる。3層はやや軟質のにおい黄色砂質土で、この層で掘り込んでピットを確認した。

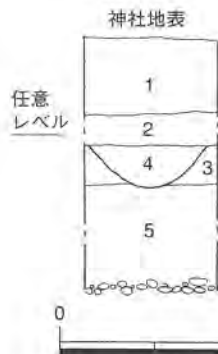
5層は厚さ約50cmもある浅黄色砂で礫層となる。5層以下は砂層の堆積が厚いため、旧河道の影響下にある氾濫原の堆積とみられる。

神明神社の関係者によると、江戸時代には神社周辺を地下げし遺物が出土したとする話が伝わっており、現在でも耕作時に遺物が出土することからみて、周辺地は神明遺跡の本体の可能性がある。

また、神明神社よりも東側の耕作地から、かつて土器が出土したとして地元の梶野直己氏より弥生土器の壺片を寄贈していただいた。壺は口縁部から頸部にかけてのもので、弥生時代後期中葉に比定される。遺物を寄贈いただきました梶野直己氏に謝してお礼申し上げます。（松尾）



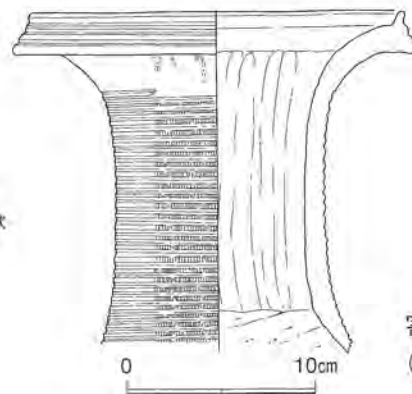
第51図 調査地位置図 (S=1/5,000)



### 層序

1. 神社境内造成土
2. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) 硬
3. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) やや軟
4. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) ピット埋土
5. 浅黄色砂 (2.5Y7/5) 無遺物層

第52図 土層柱状図 (S=1/40)



第53図 寄贈遺物 (S=1/4)

## 鬼ノ城史跡整備に伴う立会調査ほか

### 1. はじめに

鬼ノ城の第1期史跡整備事業は、角楼から第0水門周辺までを対象に平成12年に環境整備基本計画書を策定し、平成13年度から本格整備が始まった。

これまでに角楼、西門、高石垣、第0水門、版築土塁の復元整備を手がけ、足かけ10年にわたる整備事業は平成22年度に終了することになった。今回の立会調査は城壁である第3塁状区間に敷かれた城内側敷石の一部を再検出し、整備公開に耐えられるよう残存状況を調べることにあった。調査地は高石垣の背面から西門にかけての約9m間で、平成22年3月3日から16日にかけて断続的に立会調査を実施した。そして、平成21年度をもって史跡整備に伴う調査は終了することになった。

また、平成17年度に実施した小規模な発掘調査の概要はすでに報告しているところであるが<sup>(註1)</sup>、わずかに検出した遺構と遺物については未報告のため、補足として掲載することにした。

### 2. 補足調査の報告

#### (1) 平成21年度の立会調査

第3塁状区間は版築土塁と高石垣、第0水門で構成され、城壁の長さは城外側の折れを基準に計測すれば長さ約69m、城内側列石までの幅は約7.5mを測り、城壁の城内側と城外側に敷石が敷設されている。残存状況は第3塁状区間の頭部である第0水門から高石垣までは良好であったが、尾部である高石垣から西門側は、後世の流水による影響を受けかなり崩落し、城内側列石や敷石も欠損していた。

しかし、平成10年度に実施した西門の発掘調査では、高石垣から西門の城内側にトレンチを設定し、城内側敷石の一部を確認していたことから<sup>(註2)</sup>、平成21年度に実施した版築土塁の整備工事に合わせて、城内側敷石の再検出を目的に立会調査を実施した。

調査では3段で構成された城内側敷石の残欠と、版築遺構面において土中に埋め込まれた石材を多数検出した。以下では、城内側敷石が敷き並べられた順序として城内側列石と接する方から1段目、2段目、3段目として説明する。

#### 城内側敷石

1段目の敷石は、主に8石が残存しており、長さ45cm～76cmもの扁平で細長い石を使用している。2～3段目の石材に較べて相対的に大きく、端石は城内側に向けてそろえている。

2段目の敷石は、1段目の敷石端から約5cm低く下げて敷かれており、幅約140cmを測る。西門側の敷石がかるうじて残存しており、端石がズレているものも含めれば、端部のラインが復元できる。

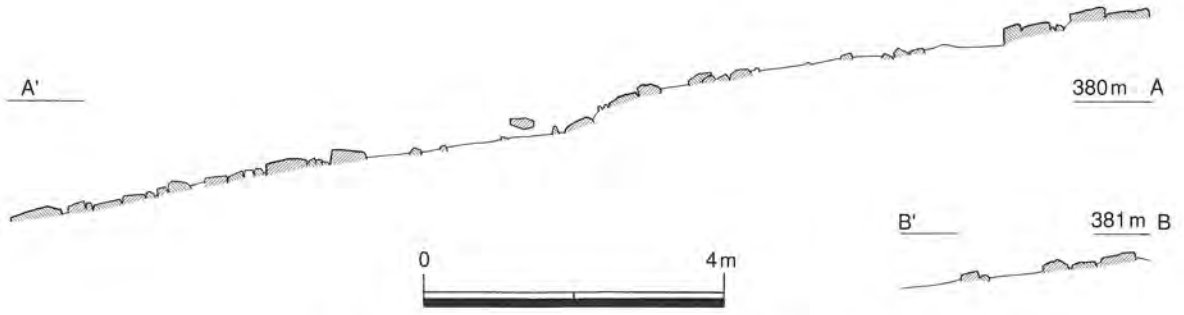
3段目の敷石は、小形の石を多用しながら敷かれ、第0水門側の残存が良好であった。その一方、西門側は敷石が流出し、盛土中に埋め込まれた石材も露出していた。

調査の結果、第3塁状区間の城内側敷石は複数年にわたる継続的な調査により、1段目から3段目までかなりの範囲で敷設されていることが分かり、第0水門の背面にある捨石群に接続することが判明した<sup>(註3)</sup>。今回の調査地では残念ながら城内側敷石は欠落が多く、敷石の1段目はかるうじて端石の一部が残存していたにすぎない。2段目も欠損し端石の大半は原位置から明らかにずれ落ち、中には水道により谷状に落ち込んでいる所もあった。3段目の敷石は小形の石材を多用していたが、西門



第54図 遺構平面図 (S=1/600)





第55図 城内側敷石平・断面図 (S=1/100)



第14図版 調査地 (北東から)



第15図版 調査地 (北西から)

側にいたっては敷石が敷かれた様子はいかがえなかった。なお、敷石の石材は合計203であり、その内、花崗岩が9、非花崗岩が194である。

以上、小規模な調査ではあったが第1期史跡整備に伴う補足調査は平成21年度をもって終了した。

## (2) 平成17年度の発掘調査（補足）

平成17年度に実施した小規模な発掘調査は西門の周辺部にあたり、角楼の南側（A調査区）と第3塁状区間尾部の城内側（B調査区）を対象に実施した。調査概要はすでに『総社市埋蔵文化財調査年報』16<sup>(註4)</sup>に掲載しているが、わずかに遺構を検出し遺物も出土していることから以下に報告したい。

発掘調査は整備範囲の内、大きく2箇所に分けて調査を行った。A調査区は角楼のすぐ近くを通る進入路の脇を対象に小規模な調査を行ったものであり、角楼から西門にかけて版築土塁が築造された位置にあたる。

次にB調査区は、第3塁状区間尾部の城内側敷石付近に、流土が厚く堆積していたため、城内空間の追求と整備の中核を占める西門の景観を、可能な限り原況に復することを目的に小規模な発掘調査を実施した。

### (a) A調査区 城内側柱穴の調査（第57図参照）

角楼側の城内側柱穴は、かつてオートレース場の進入路を工事した際に土塁が切り通しとなり、進入路脇の平坦部から検出した。切り通しの壁面には昭和53年に実施された鬼ノ城の範囲確認調査においても版築層が確認され、これまでも注目されてきた場所である。

この部位の土塁復元工事に先立ち、施工箇所に城内側柱穴が存在する可能性が高いため、検出可能な約3㎡の範囲を対象に確認調査を実施した。

柱穴は道路工事の際、掘削された平坦部において検出し、直径40cmを測る丸柱であった。道路にそって土塁が削り取られたとは言え、土塁線と平行し連続性のある城内側柱穴の性格からすれば、道路下にはあと2ヵ所に柱穴が埋没していると考えられる。

### (b) B調査区 西門城内側の発掘調査（第58図参照）

調査地は西門から東へ10m離れた城内側に位置する。平成10年度に実施した西門の発掘調査では、城内にまで調査区を広げ、目隠し塀や地山の形状などを確認した。

今回の調査は、関連する遺構の広がりを追求しつつ、西門の景観を可能な限り原況に復することを目的とした。

層序は1～5層が流土堆積で、基底には露岩と6～10層におよぶ盛土を確認した。調査地では地山と版築盛土が擦り付く境を検出し、盛土は石を混在させつつ硬く締まっていた。特に調査区の東端では、盛土中の石材が多数認められた。

遺構は土壙を2基検出した。土壙1は半円形を呈し径1.2cmを測り、内部には小礫が集積されていた。土壙2は近代の砂防工事の際に形成された焼土壙（攪乱）である。楕円形を呈し幅1.1cm、深さ90cmを測り、底部は平坦である。埋土を除去した土壙の底部から多数の石材が露出することになったが、これらは版築盛土下の集石であり、かつて第1塁状区間で検出した敷石状小石群と考えられる。

### (c) 出土遺物

史跡整備に伴う発掘調査に伴わずかに遺物が出土した。1～3は西門より城内側のB調査区で出土し、4～16は後述する鬼ノ城の各所において表採したものである。また、角楼の発掘調査時に出土

した鉄製の鉄器18を保存処理した際に、内部断面が判明したので再掲しておきたい<sup>(脚5)</sup>。

1の須恵器壺片はB調査区の版築遺構面から出土した。外面は3本/cmの平行タタキで、内面はナデている。色調は明灰色を呈し焼成は堅緻である。

2の須恵器甕片はB調査区の土壌2から出土したもので、砂防工事時に排土の中に混入したものと考えられる。外面は5本/cmの平行タタキの後にカキ目調整が施され、内面は緻密な同心円状タタキである。色調は青灰色を呈し焼成は堅緻である。

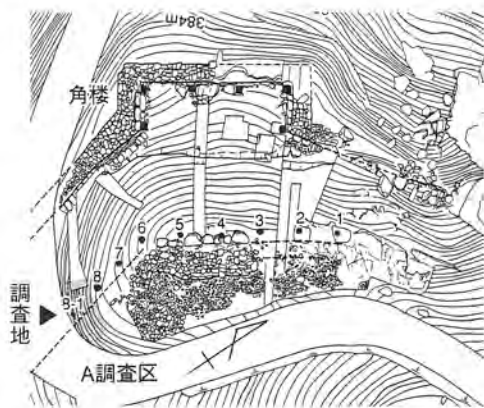
3は刀子状の鉄器で、B調査区の版築遺構面から出土した。残存長5.4cm、厚さ2～5mm、幅1.1～1.5cmを測る。

4の須恵器甕片は西門付近で表採し、外面は4本/cmの平行タタキのち、カキ目調整を施し内面は同心円状タタキである。色調は灰白色を呈し、焼成はやや甘い。

11は早島式土器の深皿で、角楼から西門間の城外側に遊歩道を設置した際、出土したものである。ほぼ完形で底部外面にはヘラ切り痕が残り、内面は強い押圧により爪形が認められた。時期は12世紀である。

14は西門付近の排土中から表採した亀山焼の甕で、外面は5本/3cmの格子目タタキ、内面はヨコナデで仕上げる。時期は13世紀である。

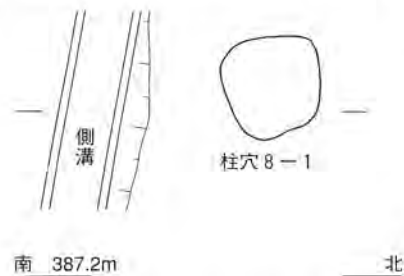
5～8は第2水門の貯水池より表採したものである。5の須恵器甕片は、外面を3本/cmの平行タタキで成形した後にカキ目調整を施し、内面は同心円状タタキである。外面には緑色の自然釉が付着して堅緻に焼き上がり良質であることから備前産の可能性がある。6の須恵器甕も平行タタキの後にカキ目を施し、内面は同心円状タタキである。色



第56図 B調査区位置図 (S=1/600)

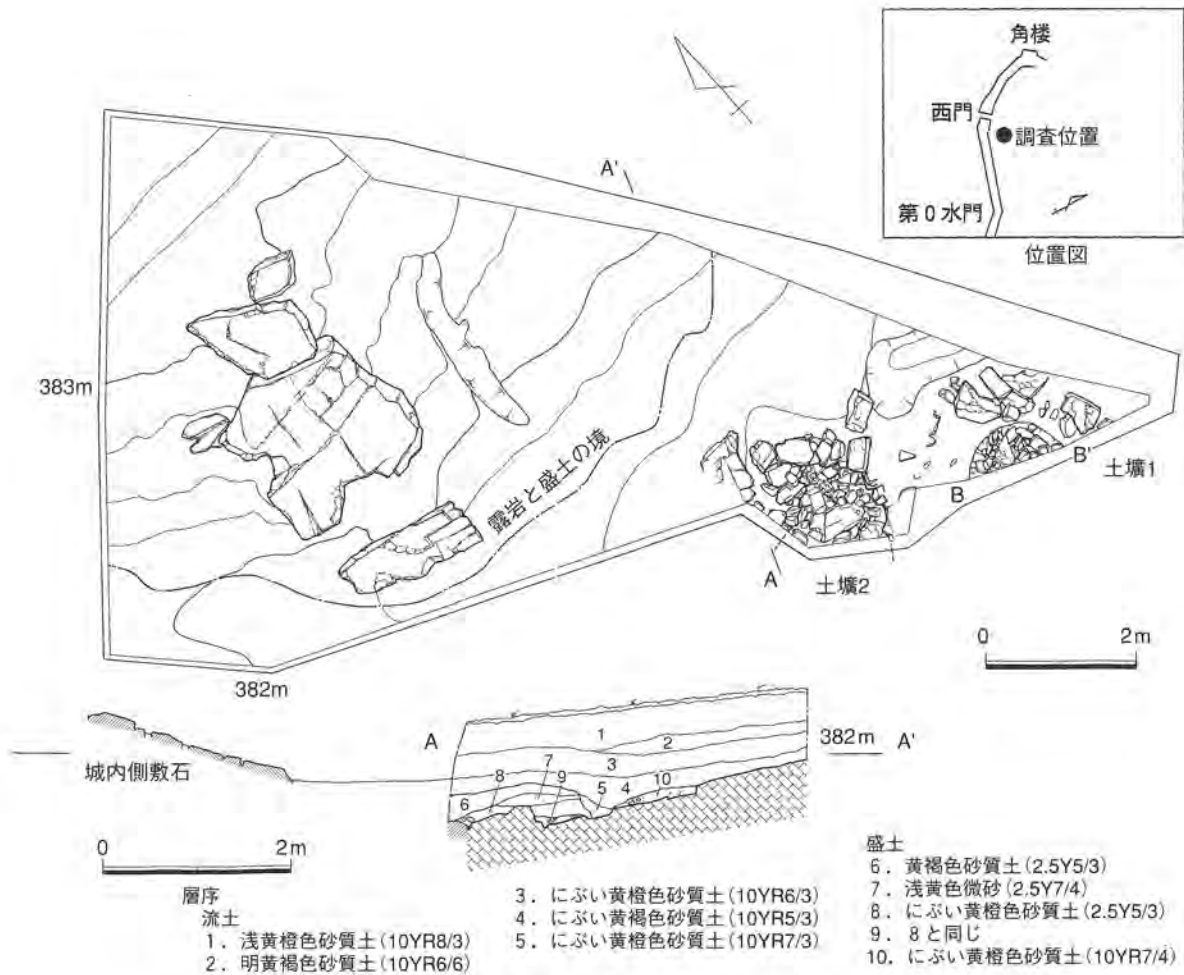


第16図版 城内側柱穴8-1 (西から)

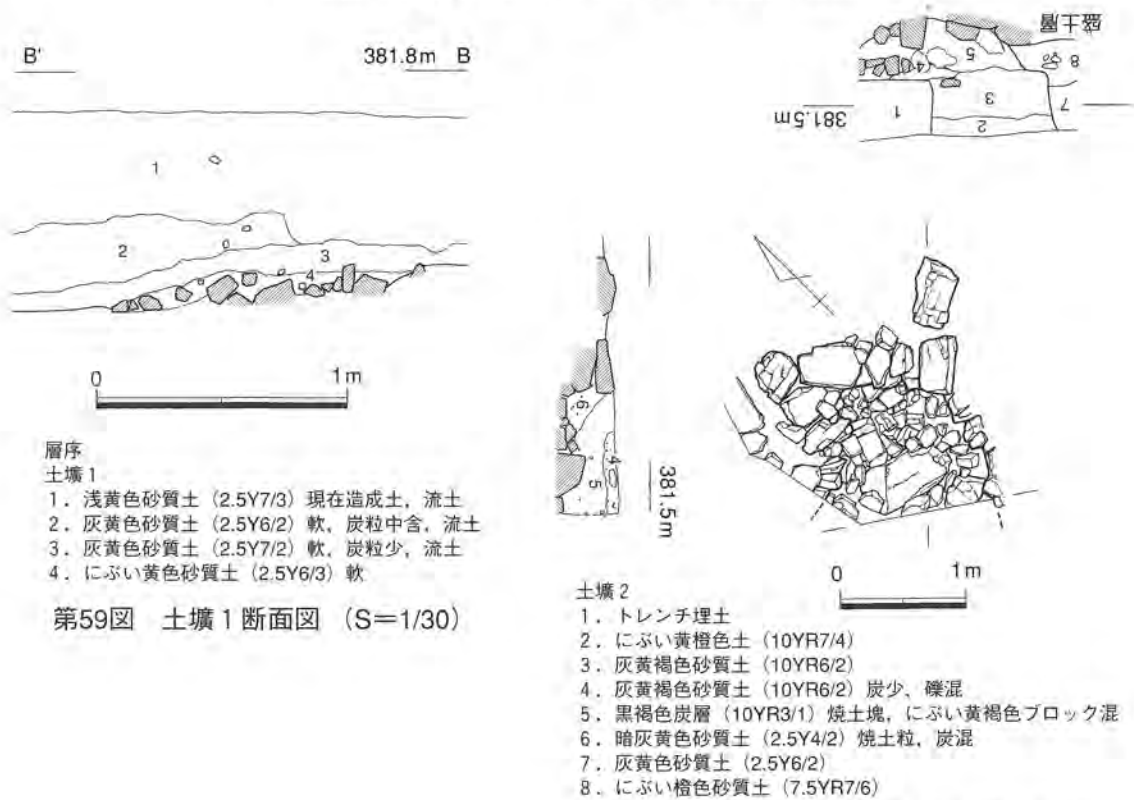


- 層序  
版築盛土
1. 黄橙色砂質土(10YR8/8)硬、灰色土・橙色土混
  2. にぶい黄色微砂(2.5Y6/3)硬、混合物少
  3. にぶい褐色砂質土(7.5YR5/4)  
小礫混、微砂含
  4. 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)  
硬、小礫混
  5. 灰黄色微砂(2.5Y7/2)  
硬、微砂中心、炭小混
  6. 浅黄色砂質土(2.5Y7/3)中、地山礫混
  7. にぶい黄色砂質土(2.5Y6/4)中、小礫混
  - 柱痕
  8. 橙色砂質土(7.5YR6/6)中、炭少混
  - 側溝掘形
  9. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
- 0 1m

第57図 柱穴8-1平・断面図 (S=1/30)



第58図 B調査区平・断面図 (S=1/100, 1/80)



第59図 土壙1断面図 (S=1/30)

第60図 土壙2平・断面図 (S=1/60)

調は暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

7は平底の須恵器壺片で、底部の内外面はナデで仕上げている。なお、平底の壺は南門（註5）や礎石建物6<sup>(註6)</sup>でも出土している。

8の須恵器坏B片は、北門の南側に位置する湿地（第4水門の貯水池）の北岸で採取したものである。坏Bの底部は高台がハ字形に外傾し、体部は椀状になると思われ、定形化前の器形と考えられる。色調は暗灰色を呈し、焼成堅緻である。

9・10・15～17は、突出部（屏風折れの石垣）の南斜面から表採したものである。9の須恵器壺片は外面に3本/cmの平行タタキの後にカキ目調整を施し、内面は回転ナデで仕上げている。色調は灰色で焼成堅緻である。10は玉縁式の丸瓦片で内面にはコビキB痕の後、細い布目が観察できる。15は軒丸瓦の右巻き三巴文の瓦当部で圏線はなく、16は丸瓦片、17は平瓦片である。断片的な資料のため時期は判然としないが、各種の瓦は焼成が甘い点が共通しており近世前期に比定される。

鬼ノ城南麓の奥坂には穴観音古墳が知られており、横穴式石室の玄室内に刻まれた種子十三仏が、現在でも信仰の対象として祀られている。壁面には「文明十一天」「己亥」の紀年（1479年）が刻み込まれ、近世にも弁財天、羅漢など数点の石刻像が認められる<sup>(註7)</sup>。地元奥坂では、雨乞いの際、この穴観音古墳と、鬼ノ城の突出部（屏風折れの石垣）で祭事が営まれており、当所で瓦が表採されるのは、こうした祭事を行う祠や小堂の存在を示唆している。

12と13は第19壘状区間（高石垣）の城外側斜面より表採した。12の坏Bは高台がハ字形に開き、体部と底部との境界が不明瞭な椀形タイプと思われる。色調は淡灰色で焼成堅緻である。

13の須恵器甕片は、外面が4本/cmの平行タタキの後にカキ目調整を施し、内面は暗灰色で焼成は堅緻である。

18は角楼の柱1から柱2間の城外側敷石を検出中に出土した。鑄鉄製の鉄器であり表面は球状を呈し、直径約6.1cm、厚さ3.6cmを測る。採取時には表面にサビの上に木質が付着し、裏面には瘤状の盛り上がりが見られた。

調査後、保存処理に伴うレントゲン写真により、本体の球状部と方柱状の角棒が接合されている状況を確認し、裏面の瘤は角棒が欠損したものであることが判明した。角棒は一辺1.9cm、接合された長さは1.9cmを測り、球状部との間には約2mmの間隙も認められた。

#### (d) 小結

小規模な調査ではあったが、調査成果は以下のとおりである。

A調査区では版築土塁に伴う城内側柱穴が、予想どおり推定箇所から検出され、現道路下にも2カ所の柱穴が埋没していると推定される。

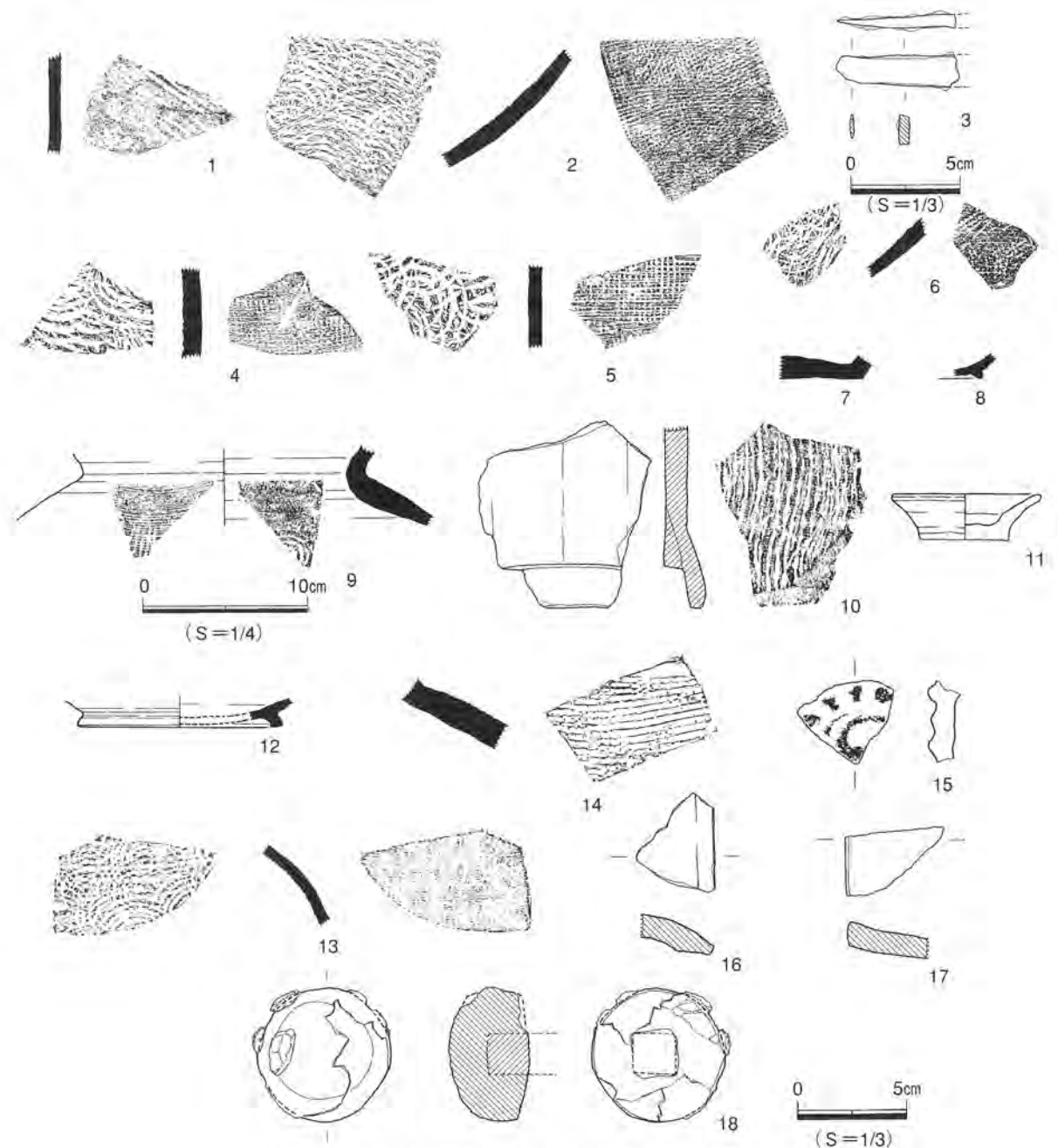
B調査区は、まず西門の背面に地山（露岩）を検出し、西門と平行しつつ途中で北東方向へ屈折する状況を確認できた。そして、土塁の城内側を検出したことにより、地山と盛土の境が明らかとなり、ここから城外側列石までの盛土幅が15mにも及んでいることが判明した。次に盛土中には石材が混在しており、近代に形成された土壇2の底部の状況をみれば、版築盛土より下層にはさらに多くの捨石が充填されている。つまり、第1壘状区間で検出された敷石状小石群と、同じ性格の遺構が存在し、土塁の内部に芯材となる捨石を集石し、その上部に版築盛土が築造した構造がうかがえる。

出土遺物は鬼ノ城に伴う遺物として、須恵器坏B（8, 12）、壺（1, 7）、甕（2・4～6, 9, 13）、刀子状鉄器（3）があり7世紀後半～8世紀初頭に位置づけられ、これまで出土している遺物

の年代観と矛盾はない。坏Bは体部と底部との境が丸みを帯び、ハ字形に開く高台が底部の内側についていることから、鬼ノ城で出土している坏Bの一群と属性が一致している。また、甕の外面調査は平行タタキの後にカキ目調整を施すものが多い。

城壁線から出土する土器の傾向としては坏B、壺、甕が主体を占め、今回表採した遺物も何ら変わりはなく、特に貯蔵具は普遍的に出土が確認できるようになり、城壁線の各所に配置されていたのであろう<sup>(図表)</sup>。

城内の貯水池には第1水門から第5水門に連なる各貯水池が設けられているが、現在までのところ、第1水門貯水池、第2水門貯水池、第3水門貯水池、第4水門貯水池と溜井から遺物が採取されており、今後さらに資料の増加が期待される。(松尾)



第61図 出土遺物ならびに表採遺物 (S=1/4・1/3)

- 註1 「平成17年度 史跡整備に伴う鬼ノ城の発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』16 平成19年(2007)
- 註2 「鬼ノ城 西門跡および鬼城山周辺の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』9 総社市教育委員会 1999年
- 註3 「史跡整備に伴う鬼城山の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』17 総社市教育委員会 2008年
- 註4 「平成17年度 史跡整備に伴う鬼ノ城の発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』16 平成19年(2007)
- 註5 『総社市埋蔵文化財調査年報』8 P.82 総社市教育委員会 1998年
- 註6 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203『国指定史跡 鬼城山』P.47 岡山県教育委員会 平成18年
- 註7 『総社市史 美術編』総社市 昭和61年
- 註8 総社市埋蔵文化財発掘調査報告18『古代山城 鬼ノ城』総社市教育委員会 2005年



第17図版 調査地全景（東から）



第18図版 調査地全景（東から）



第19図版 土層1（北東から）



第20図版 土層2（北西から）



第21図版 土層断面（南東から）



### 3. 発掘調査の概要

## 駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 三輪遺跡群

所在地 総社市三輪

調査期間 2009（平成21）年4月28日～12月9日

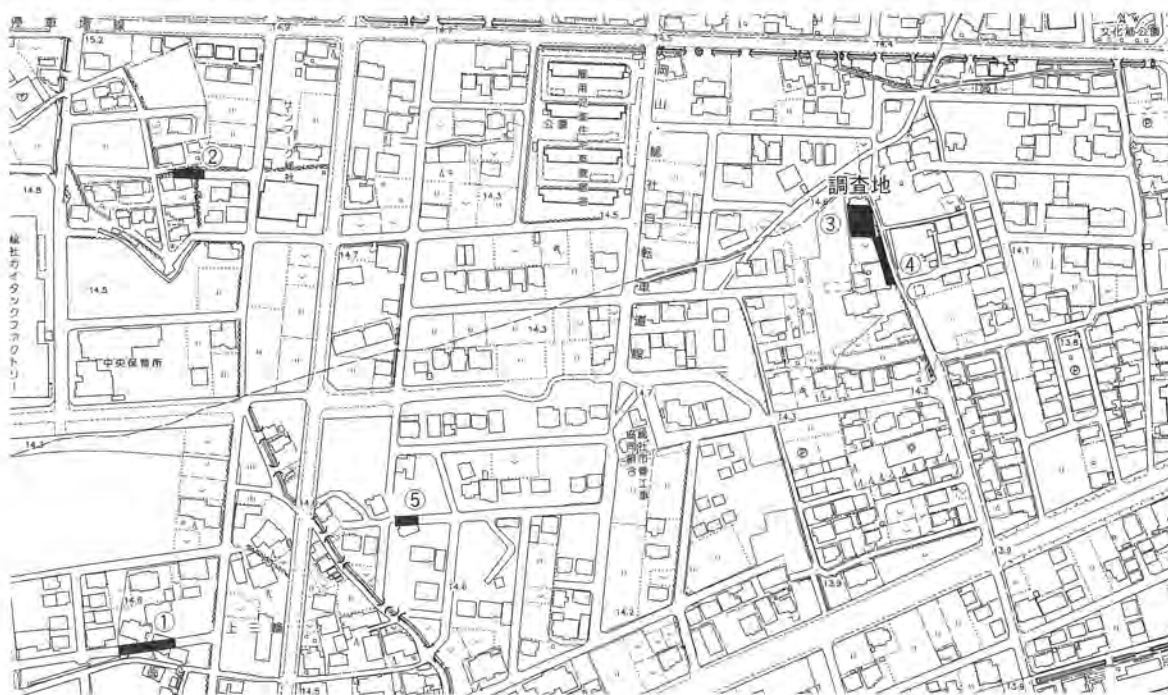
調査面積 約2,500㎡

### 調査概要

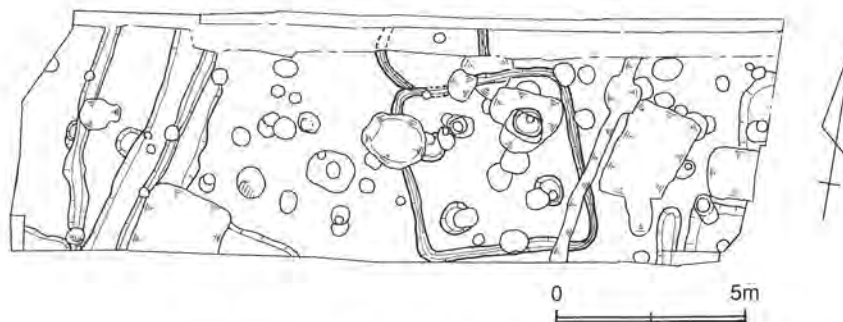
2009（平成21）年度の駅南区画整理事業に伴う発掘調査は、中断を挟みながら、区画道61号線3区、区画道45号線、区画道50号線・児童公園予定地、区画道39号線、区画道58号線の順で実施した。以下各調査区の概要を記す。

#### ①区画道61号線3区

2006・2007年度に本調査地の東隣地を発掘しており、今回の調査でもその時の調査結果とほぼ同様であった。遺構検出面は標高14m弱と、周辺の遺跡群に比べると高く、微高地の中心付近に位置していると推定されたが、1・2区と比べるとやや低くなってきている。ベース層である暗灰（茶）褐色土層の上には20～30cmの厚さに中・近世水田層が堆積していた。検出された主な遺構は弥生時代～



第62図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第63図 区画道61号線3区遺構配置図 (S=1/200)

中世にかけての柱穴約50・溝2・土壙3・住居址2であった。

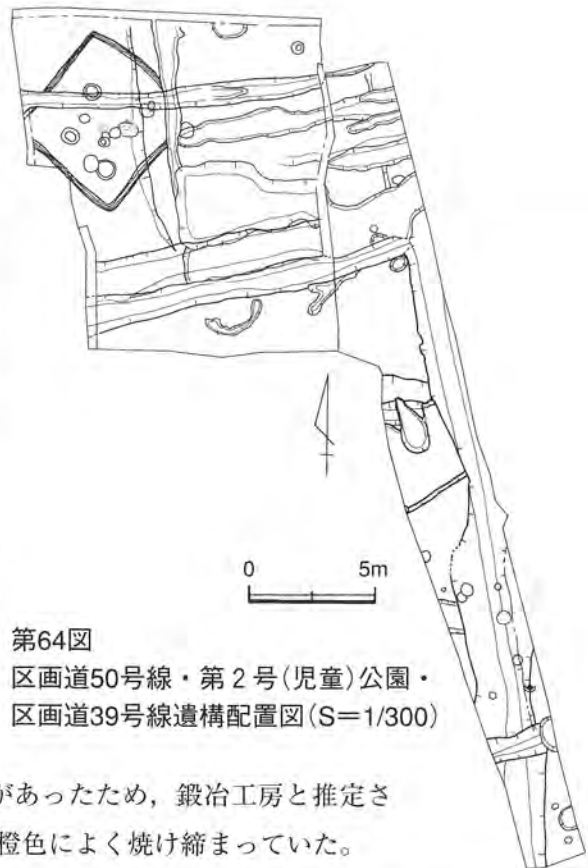
このうち住居址-1は、古墳時代前半の四本柱をもつ方形の住居址で、床面までの深さは10数cm程度とほとんど削平されていた。住居址-2は、約半分強が検出されたが、直径3m弱のやや不整な円形を呈しており、埋土中には炭化物・焼土破片が多く含まれており、床面にも炭化物の分布が認められた。小型の工房のような住居址の可能性もある。

## ②区画道45号線

本調査地の近隣では、製鉄関連の遺物が出土している住居址・土壙や、弥生時代末の土器焼成に用いられたと推定される土壙など多くの遺構が検出されていたが、今回の調査地では、溝1、土壙2、柱穴1、溝状遺構1、たわみ2が検出されたのみであった。調査地東端で検出されたたわみ-2からは比較的多くの弥生時代後期の土器が出土している。



第22図版 区画道45号線完掘（東から）



第64図  
区画道50号線・第2号(児童)公園・  
区画道39号線遺構配置図(S=1/300)

## ③区画道50号線・第2号(児童)公園

区画道50号線と第2号公園予定地は隣接しているため、一つの調査区として発掘調査を実施した。調査地は微高地上に位置しており、柱穴7、土壙1、溝状遺構1、住居址1が検出された。住居址は四本柱の方形の古墳時代前半のもので、床面ほぼ中央に被熱面が認められ、それに隣接して鍛冶炉があったため、鍛冶工房と推定された。鍛冶炉の表面には細かい粘土が貼られ、淡赤橙色によく焼け締まっていた。

## ④区画道39号線

前述の区画道50号線・第2号(児童)公園に南接する南北に長い調査区であった。住居址1、柱穴25、土壙4、溝8、溝状遺構2が検出された。このうち住居址は古墳時代後半の竈付きのものであった。また住居址・柱穴の下層からは、調査区を南北方向に流れる弥生時代後半の溝が検出された。

## ⑤区画道58号線

遺構密度は低く、柱穴8、土壙1、溝状遺構3が検出されたのみである。



第23図版 区画道39号線完掘（北から）

## 常盤小学校校舎増築に伴う発掘調査

遺跡名

所在地 総社市三輪926

調査期間 2009（平成21）年6月8日～6月19日

調査概要

今回の調査は、常盤小学校の児童数の増加によって校舎が不足したため、2階建4教室を増築することになったため実施することになった。

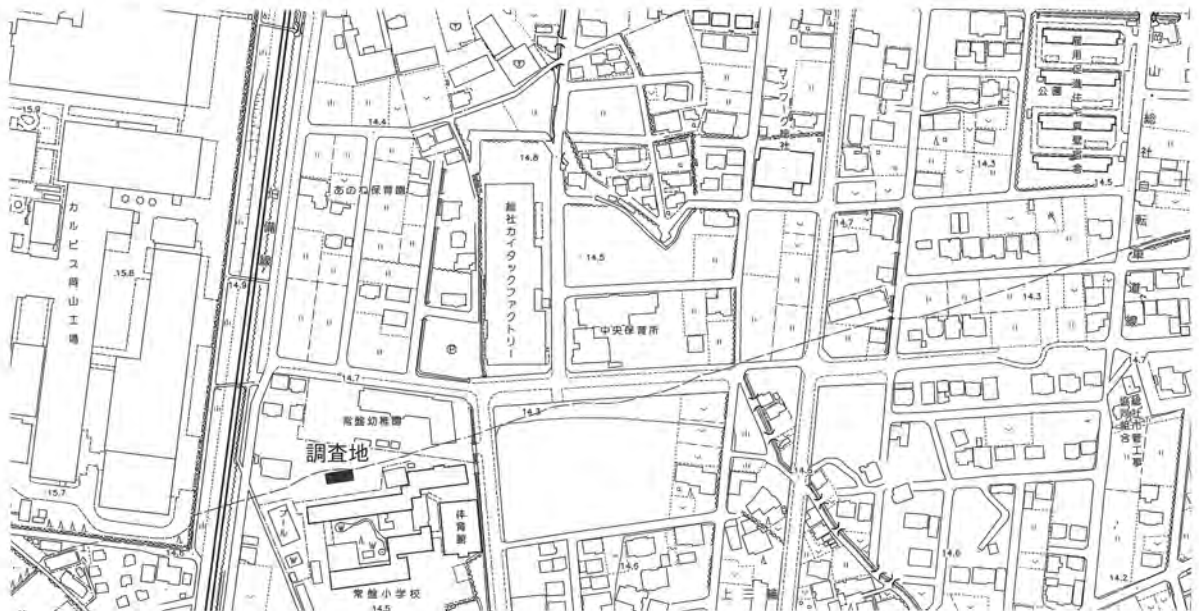
本調査地に隣接する常盤幼稚園園舎の調査は、1998年度・1999年度・2008年度に行われている。発掘調査の結果、中洲状の微高地の端部に位置しており、園舎部分の東半は古墳時代以降に形成された比較的新しい微高地上にあり、古代～中世を中心とする柱穴・土壙・火葬墓・鍛冶炉等が検出された。園舎の西半は縄文時代前期以前に形成された古い微高地上にあたっており、弥生時代の住居址・貯蔵穴・土壙・溝・柱穴の他、微高地の上がり際に、下がりの方角に沿って掘り込まれた溝・古墳時代の住居址・柱穴等が検出されている。なかでも古墳時代の隅丸方形の住居址には拡張が認められ、弥生時代中期の溝が埋まった後に作られていたことが確認された。



第24図版 調査区全景（東から）



第25図版 地下げ内埋土堆積状況（北東から）

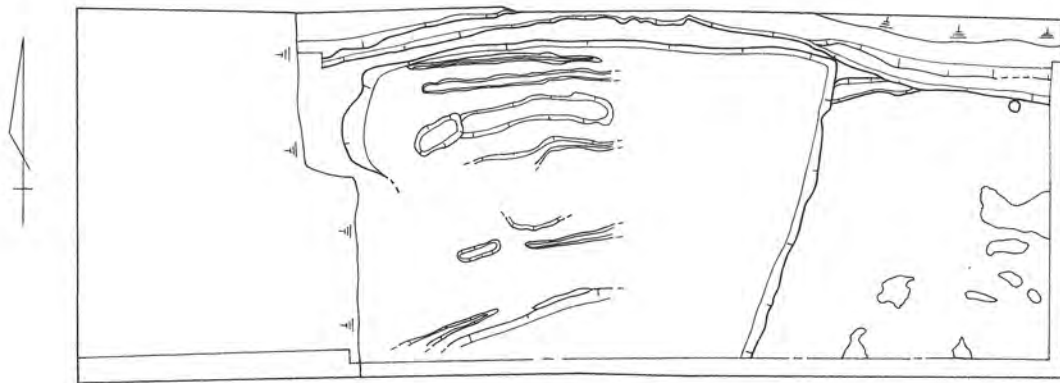


第65図 調査地位置図（S=1/5,000）

また、園舎を西へ拡張するための2008年度の発掘調査では、微高地が高く残っていたのは調査区の東端付近のみで、おそらく中世以降の新田開発によって微高地端部を削って地下げが行われていたことが判明している。

今回の調査では、地下げの境に中世の溝が作られ、溝以西はおそらく水田造成に伴うと考えられる検出規模12×8mの長方形の地下げ様の削平によって砂礫層まで削られて水田となっていた。遺物は地下げで削られた斜面の堆積から、弥生時代中期～後期にかけての長頸壺や甕の破片に混じって比較的残りの良い小型丸底壺・手捏ね土器・甌・少量の須恵器破片が出土しているが、ごく少量の近世土器が含まれており、5世紀を中心として形成された遺構を、近世に削平して地下げが行われたと推定された。

(高橋)



第66図 遺構配置図 (S=1/200)



第26図版 溝-1 遺物出土状況 (東から)



第27図版 P-2 遺物出土状況 (東から)



第28図版 東壁断面斜め (南西から)

## 市道改良工事に伴う発掘調査（第二次調査）

遺跡名 窪木遺跡

所在地 総社市窪木

調査期間 2009（平成21）年10月8日～2010（平成22）年6月30日

調査面積 1400m

### 調査概要

今回の発掘調査は、国道180号バイパスから南に延びる部分の平成19年度の調査につづくもので、国道180号線と同バイパスとを結ぶ市道南溝手3024号線の拡幅・改良に伴い掘削により影響を受ける幅9m、長さ160mを対象とした。

遺跡が所在する総社市東部の平野は、現在の甚井堰付近から東流していた旧高梁川の沖積作用により、ほぼ東西方向に微高地が形成されることが多い。県教委による国道180号線建設に伴う調査を始め、現在までの周辺の発掘調査例からみても調査地周辺では随所で蛇行しながら東流した東西方向の旧河道や礫層の露頭が認められる。

今回の調査区（第29図版）は丁度この旧地形を南北方向にトレンチ状に横断する形となり、調査区の南端と中央部で礫層の露頭がみられ、主としてその間の砂質土部分に遺構が確認された。

発掘調査は1区南端から重機で近世水田を除去した後、人力で中世水田面から精査して遺構の検出を行い、調査区南端から北に30mまで広がる礫層上で中世後半の水田層と溝を確認した。

1区北半では砂礫層がやや下降し、厚さ50cm程度がよく締まった砂質土が認められ、それを基盤層とする弥生～古墳時代の竪穴住居跡と8世紀代の建物跡、中世前期の建物跡・土壙が確認された。

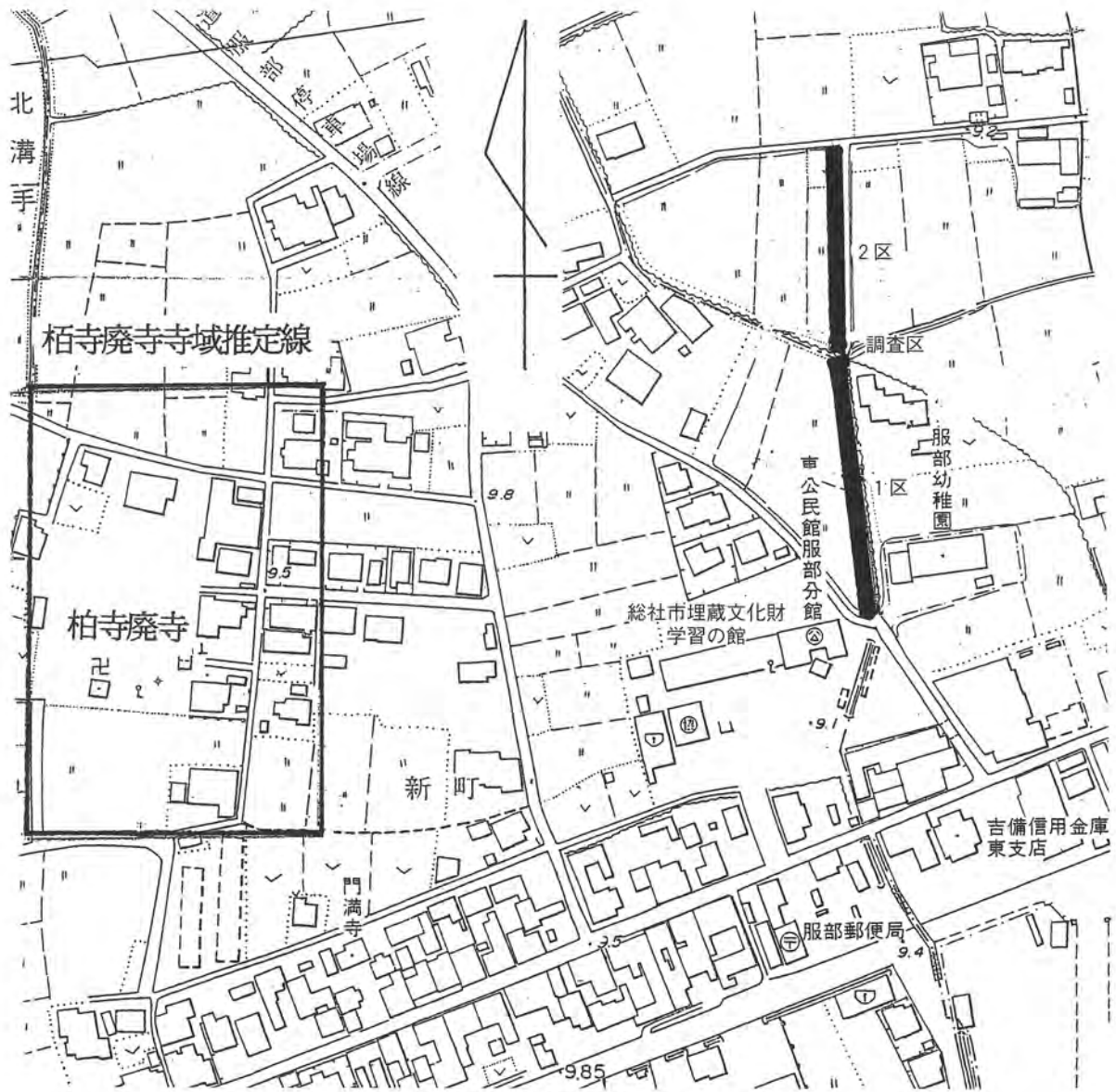
特に8世紀初頭の柱穴は若干のズレは認められるが方位に合致したものが多いが、調査区の幅が10m弱という制約と、検出に際して非常に識別が難しい砂質の柱穴埋土のため建物の規模が把握できるものは多くはなく、後世の削平のため建物周辺での遺物の出土も少ない。

ただ、柱穴の中には1m四方の隅丸方形で、柱間180～200cmの建物があり、数回の建て替えもやはり規則的な柱配置が踏襲されている点等から通常の集落ではなく、検出された建物群は官衙とみるのが妥当であると考えられる。

用水路から北の2区（第30図版）は砂礫層の露頭面が調査区の半分近くを占め、遺構が存在するのは北半分に限られるが、用水路沿いの調査区の南端で砂礫層を掘り込んだ幅360cm、深さ130cmの溝が確認された。この溝は現在の周辺の地割にはその痕跡を留めておらず、幅9mの調査区内では正確な方位は窺知し得ないが、ほぼ1区の建物群の方位と合致することから関連した溝である可能性が高い。この溝の埋土からは8世紀初頭の須恵器の甕・平瓶・坏・坏蓋と布目瓦が出土した他、官衙遺跡特有の畿内系土師器が出土している。

調査区北半は砂礫層が下降し砂質の基盤層が上昇しながら北に伸びているが、1区の基盤層に較べると地下水位の上昇が著しいため脆い状態の部分が多い。この砂質の基盤層部分では2間×4間の総柱の建物群が最低でも2回の建て替えを経て集中して建てられた状態が検出された。これらの建物群の存続時期は出土した須恵器坏等から1区の建物群と同じ8世紀初頭を中心とする時期と考えられる。

今回の発掘調査は確認された遺構の重要性から、調査期間を当初の予定を大幅に延長し次年度の6月30日まで実施したため、遺跡・遺構の評価と考察については次号の年報で行いたい。（武田）



第67図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第29図版 1区全景



第30図版 2区全景

#### 4. 不時立会調査



## 備中国分尼寺推定寺域内の土取りについて

遺跡名 備中国分尼寺

所在地 下林1696

調査期間 平成22（2010）年2月25日

### 調査概要

平成22（2010）年2月8日、吉備路郷土館館長 松本和男氏から、備中国分尼寺推定寺域内に位置する下林1696の山林の一部が、溜池の堤防補修工事に伴う土の補充によって、掘削されているとの連絡がはいった

松本館長の案内のもと、現地で掘削箇所を確認した結果、史跡指定範囲内からはずれているものの、寺域推定地内に入っており、約30mの土が掘削されていた。掘削は土の状況から、かなり前に行われたものと推察された。掘削された壁面の土層は、一部水平堆積のように見受けられ、整地層が存在する可能性があることから、壁面を清掃し土層観察をすることとした。

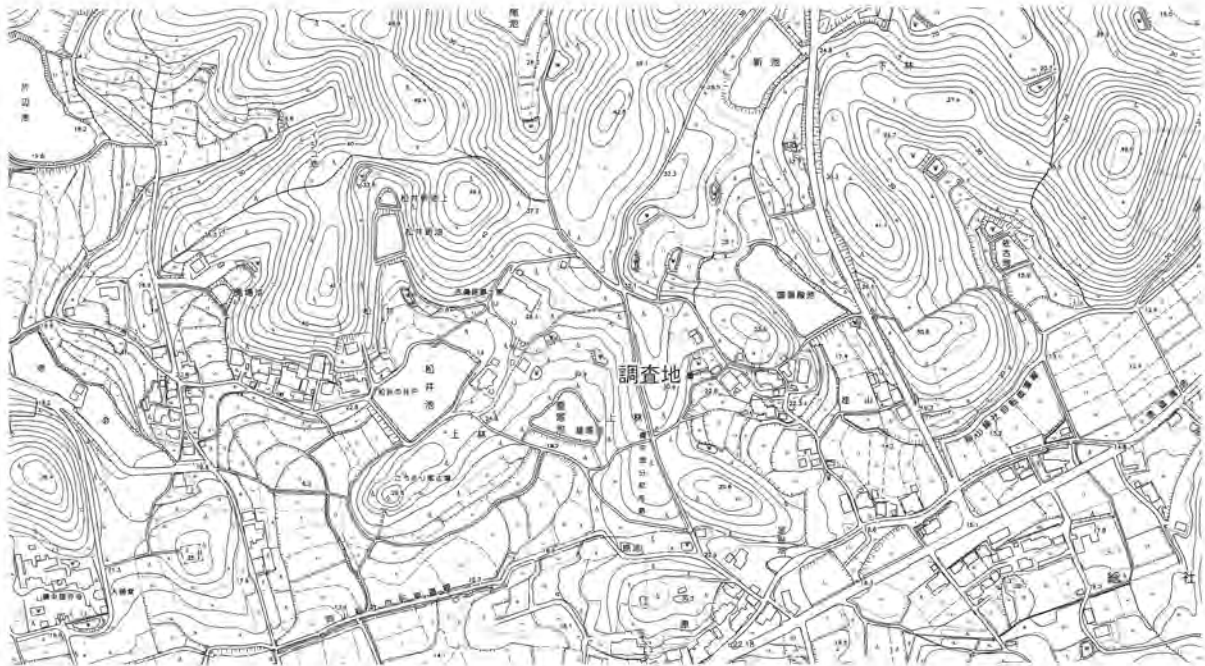
工事について調べた結果、地権者が業者に依頼し実施したものと判明した。

国分尼寺は、そのほとんどが県有地内に属し県が管理していることから、2月18日、県の現状視察を得、「埋蔵文化財発掘の届出」と顛末書の提出を、地権者に要請することとなった。

2月23日、地権者を訪ね、国分尼寺の推定地内であること、それゆえ個人の土地であれ勝手に掘削できないことなどを説明した。地権者は、寺域推定地であることを知らず、自分の土地であることから何の疑問ももたず掘削したとのことであった。推定寺域の入った地図を渡し、事前に届出が必要なことと、掘削した箇所を余った土で埋め戻す可能性があるとのことから、埋め戻す際に連絡をする必要があることを伝えた。

2月25日、地権者の許可を得、掘削面の土層観察を実施した。

調査の結果、版築状の水平堆積が認められ、当該地が国分尼寺の整地内に位置することが判明した。



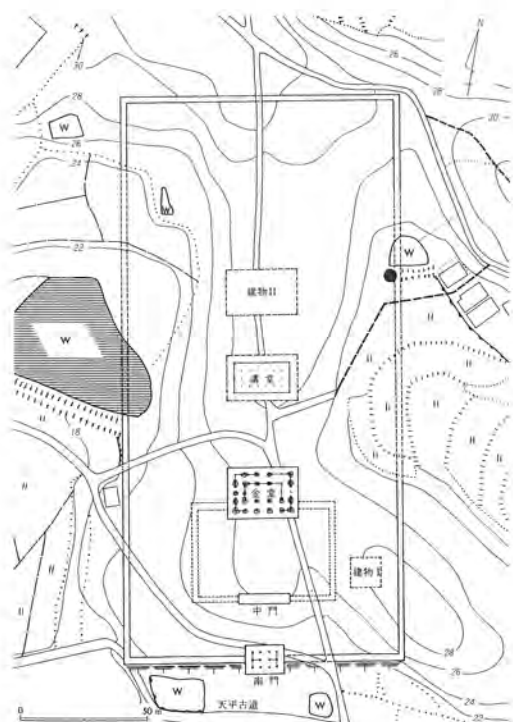
第68図 調査地位置図 (S=1/8,000)

西壁は、南端部分で整地層が大きく掘削されており、その後掘削部分に土が堆積した後、さらに整地層もろとも上部が削平されている。残存している版築状の層は6層で、ほぼ水平に堆積しており硬くしまっている。

北壁の整地層は、西壁との接点から約1.7mは確実に東へ延びることが判明した。地山が東に下がることから、下層は斜めに土を突き固め、上層にいくにしたがい水平になるよう仕上げている。すでに上部は削平されており、その後新しい土が堆積している。東側は後世の攪乱を受け、版築が大きく掘削されていた。

以上、当該地は推定寺域どおり寺域内に位置し、厚い整地層が築かれていたことが判明した。

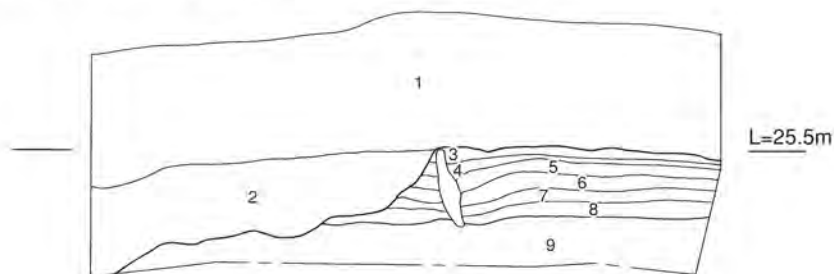
(平井典子)



第69図 調査地位置図 (S=1/3,000)



第31図版 土層断面 (東から)



層序

1. 表土及び造成土
  2. 攪乱
  3. 明桃褐色土
  4. 淡黄灰色土
  5. 淡桃褐色土
  6. 淡黄褐色土
  7. 淡橙褐色土 (茶褐色小礫含む 少)
  8. 淡橙埴土 (茶褐色小礫含む 中)
  9. 地山
- } 整地層

第70図 西壁土層図 (S=1/60)

## 5. 発掘調査の報告

のべ  
延遺跡発掘調査報告

# 目 次

## 第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯 .....	60
第2節 調査の組織 .....	60

## 第2章 発掘調査

第1節 延遺跡の調査概要 .....	61
第2節 検出遺構 .....	61
(1) 確認調査の成果 .....	61
(2) 発掘調査の成果 .....	64

第3章 まとめ .....	67
---------------	----

# 図 目 次

## 第2章 発掘調査の経緯

第71図 調査地位置図 (S = 1 / 5,000) .....	62
第72図 調査地全体図 (S = 1 / 300) .....	62
第73図 トレンチ平・断面図 (S = 1 / 60) .....	63
第74図 トレンチ出土遺物 (S = 1 / 4) .....	63
第75図 建物1 (S = 1 / 60) .....	65
第76図 建物2 (S = 1 / 60) .....	65
第77図 溝1断面図 (S = 1 / 60) .....	66
第78図 溝1出土遺物 (S = 1 / 4) .....	66
第79図 溝2断面図 (S = 1 / 60) .....	66
第80図 溝2出土遺物 (S = 1 / 4) .....	66
第81図 溝3断面図 (S = 1 / 60) .....	66
第82図 溝5断面図 (S = 1 / 60) .....	66
第83図 溝4ほか断面図 (S = 1 / 60) .....	66

## 第3章 まとめ

第84図 調査地と周辺の遺跡 (S = 1 / 1,500) .....	67
第85図 遺構変遷図 (S = 1 / 400) .....	67

## 図 版 目 次

第32図版	P 2 断面（南から）	63
第33図版	土壌 2 断面（西から）	63
第34図版	確認調査（北西から）	69
第35図版	確認調査（南東から）	69
第36図版	調査地全景（北西から）	70
第37図版	南北調査区（南から）	70
第38図版	東西調査区（南西から）	70
第39図版	溝 2 断面（北から）	71
第40図版	溝 3（南東から）	71
第41図版	溝 4（北から）	71
第42図版	建物 1（南東から）	72
第43図版	掘立柱建物群（南西から）	72
第44図版	掘立柱建物群（北東から）	72
第45図版	出土遺物	73

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 調査にいたる経緯

調査地は総社東中学校から南へ200m離れた水田に位置し、市道東総社中原線に接している。水田の標高（約12m）は高く安定した微高地で、東総社中原線の事前発掘調査では古墳時代の竪穴住居址や、溝などが多数検出されている。

このたび当地では、自動車販売店舗及び修理工場の建設が計画され、建設前には事業者である(有)グランディオートと埋蔵文化財の取り扱いについて協議があった。工事計画では敷地全体に約70cm厚の造成が行われることになり、遺跡の大半は盛土で遺跡が保護されるが、地下掘削を伴う工事は敷地の北側と東西側に擁壁が設置され、その規模は幅2m前後で深さ約70cmを掘り下げる予定であった。また、敷地内には修理に欠かせないカーピットも対象となり、埋蔵文化財に影響することが懸念された。

そのため、事業者の承諾を得て造成工事に先行する2月18日に、カーピット部分の確認調査を実施することになり、耕作土直下から弥生時代後期前半の溝や土壌などの遺構と遺物を検出した。

遺構検出面が耕作土直下と浅く、一帯に遺跡の広がりや推定されるため、遺跡に影響を及ぼす擁壁工事については事前に発掘調査が必要という結論になり、事業者とは平成22年3月3日から着手することで合意に達した。

そのため、平成22年2月18日付けで岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」を提出し、平成22年3月18日付けで文化財保護法第99条の「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を提出した。

以上の経緯をもとに自動車工場造成に伴う発掘調査は平成22年3月18日から3月27日にかけて実施し、調査終了後は平成22年3月29日付けで文化財保護法第108条及び遺失物法第13条に基づき、埋蔵文化財保管証及び埋蔵文化財発見届を岡山県教育委員会教育長と、総社警察署長あてに提出した。

### 第2節 調査の組織

発掘調査は岡山県教育委員会の指導助言のもとに総社市教育委員会が実施した。

#### 調査組織

教育長	栗田交三
教育次長	加藤信二
文化課長	荒木泰行
主幹	谷山雅彦
主任	松尾洋平（確認調査、発掘調査、報告担当）
整理作業	田中富子 犬飼真弓

## 第2章 発掘調査

### 第1節 延遺跡の調査概要

発掘調査はL字形となる調査区のうち、方位によって東西調査区と南北調査区に分けた。検出した遺構は掘立柱建物2棟、柱穴16基、土壇3基、溝5条である。

遺構は調査地の全域で検出し、大きく弥生時代後期前葉の溝群と、古墳時代後期の掘立柱建物と溝に分けられる。

出土遺物は弥生時代の溝から出土したものが大半で、例えば溝1からは後期前葉の壺、甕、高坏などが出土し、溝2からは弥生時代前期から古墳時代前期にかけての壺、甕などが出土した。

層序は耕作土の下が中世水田層であり、層中から早島式土器細片などを含むことから、13世紀以降に本格的な農地の開墾が進んだことを窺わせる。直下の明黄褐色砂質土が遺跡の形成された基盤層(第9層)で、層上面から弥生時代から古墳時代にかけての遺構を検出した。全体に基盤層下の礫層が中世水田層下まで隆起している所が大半であり、礫層を検出した箇所には遺構が希薄であった。そして、東西調査区では中世の開墾によって基盤層が削平されている所も多くみられ場所によっては基盤層下の礫層にまで達している所もあった。

断片的な調査ではあったが、検出遺構と出土遺物から遺跡の消長としては、弥生時代後期前半と古墳時代後期に盛期を迎えていることが判明し、東総社中原線の路線内で発掘調査された当該期の集落遺跡の広がりが確認できた。

以下で説明する土器編年については、「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127」『津寺遺跡5』の編年対比表に準じている<sup>(註1)</sup>。

### 第2節 検出遺構

#### (1) 確認調査の成果

確認調査では遺跡に影響を及ぼすカーピット部分にトレンチを設定した。基本層序は耕作土(1層・2層)、明褐色土(3層)で、以下の明黄褐色砂質土(第9層)が基盤層となり、遺構は基盤層上面から柱穴7基と土壇2基、溝1条を検出した。

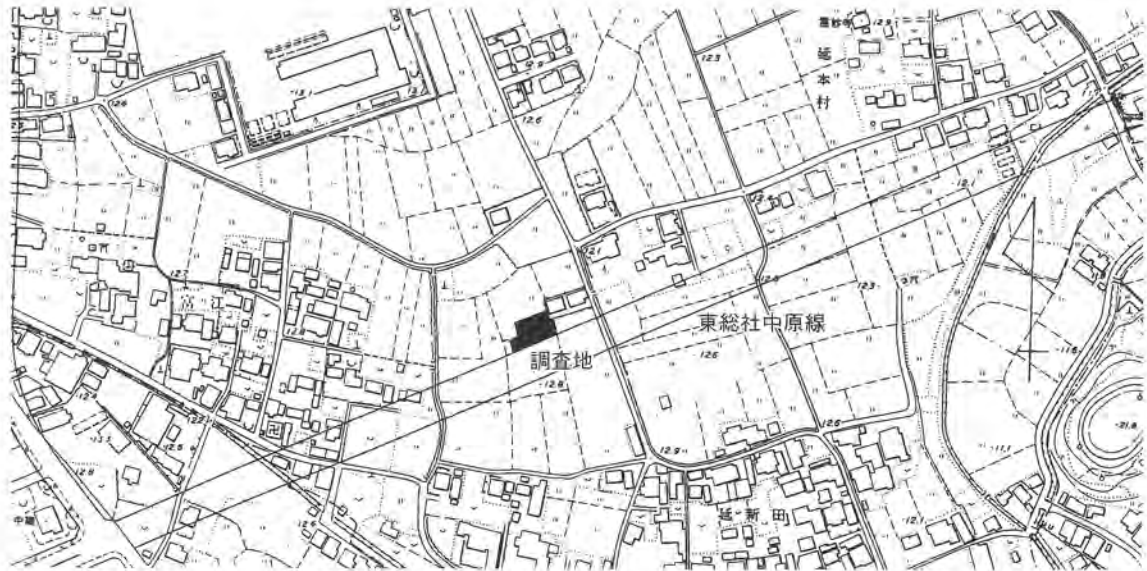
遺物が出土した遺構は、P1とP2、土壇2があり、弥生時代後期の土器片が出土した。P2は平面が楕円形を呈し長径65cmを測り、径約25cmの柱痕から高坏の脚部2が出土した。出土遺物からみてP2の時期は弥・後・1に比定される。

土壇2は長さ1.1mを測る隅丸方形の土壇で5層中から鉢の口縁部1が出土した。口縁部は内傾し、外面に凹線をめぐらすことから時期は弥・後・2に比定される。土壇2と溝1は切り合い関係にあり、土壇2が新しく溝1から弥生時代後期初頭の遺物が出土している点からみても、溝1の埋没後に土壇2が形成されている。

溝1はトレンチの東西方向で検出した。確認調査後の発掘調査では東西調査区で一連の遺構が確認できたため後述したい。

調査の結果、地表から深さ約25cmで遺構面に達し、弥生時代後期の遺構と遺物が濃い密度で存在することが判明した。堆積状況を見るとトレンチの位置では基盤層で多数の遺構が形成される一方で、発掘調査区では礫層が遺構検出面となる所が多く、遺構が少ない状況であった。ここでは地盤の比較





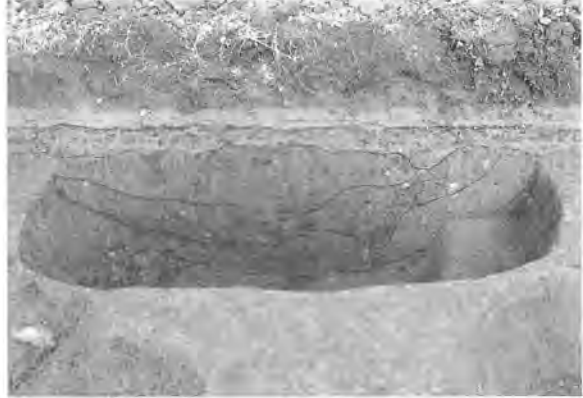
第71図 調査地位置図 (S = 1/5,000)



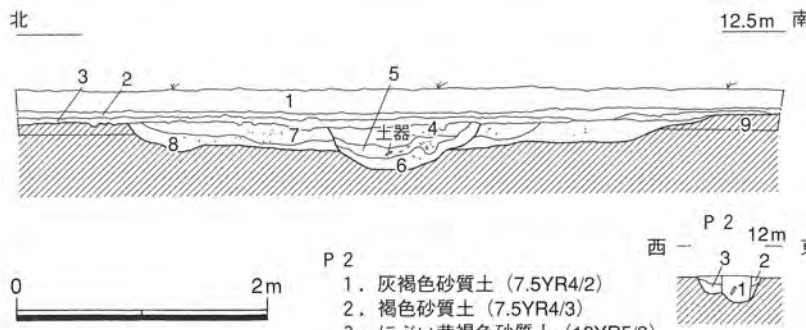
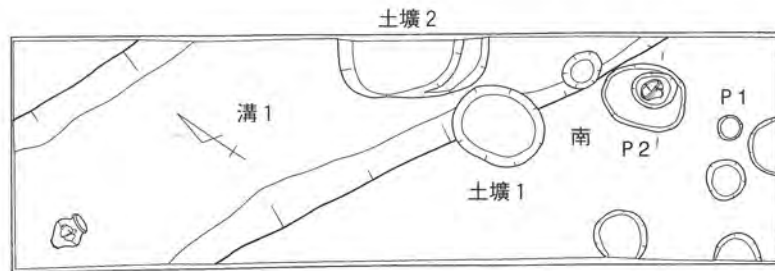
第72図 調査地全体図 (S = 1/300)



第32図版 P 2 断面 (南から)

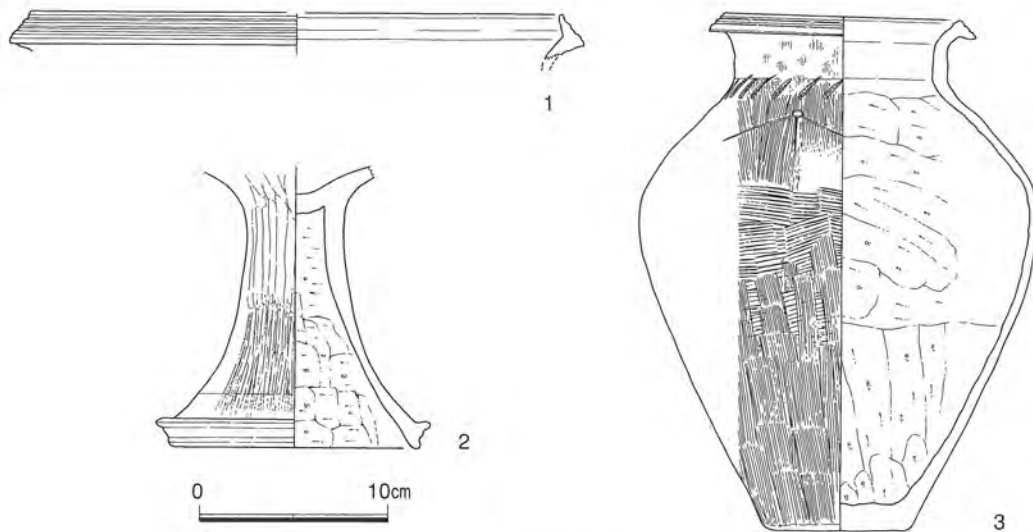


第33図版 土壌 2 断面 (西から)



- 層序
1. 耕土
  2. にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
  3. 明褐色土 (7.5YR5/6) 中世水田層
  4. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/3) 褐色ブロック混
  5. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 炭含
  6. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)
  7. 黄褐色砂質土 (2.5YR5/3)
  8. 黄褐色砂質土 (10YR5/6)
  9. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6)

第73図 トレンチ平・断面図 (S = 1/60)



第74図 トレンチ出土遺物 (S = 1/4)

から意図的に礫層をさけた遺跡の形成を認めることができる。

## (2) 発掘調査の成果

### 掘立柱建物

#### 建物1 (第75図, 第42図版)

掘立柱建物は東西調査区のほぼ中央に位置する。棟の方向をN-131°-Wにとり、桁行4間(6.45m)×梁行1間以上(1.3m)の規模である。柱の掘形は円形で径40~60cm, 深さ20cmを測り, 径15~20cmの柱痕が残存していた。

柱穴内から時期を特定できる遺物は出土していないが, 遺構検出面で須恵器甕片が出土していることから古墳時代後期に比定される。

#### 建物2 (第76図, 第44図版)

掘立柱建物2は東西調査区の中央東寄りに位置する。調査区の関係上, 建物の梁側を検出したことにより, N-63°-Eに振った南北棟と考えられる。

規模は桁行1間(1.7m)以上, 梁行2間(3.2m)を測る。柱の掘形は円形で, 径40cm~50cm, 深さ20cm前後を測り, 径15cm前後の柱痕が残存していた。

時期は柱穴埋土が建物1の埋土と類似していることや, 遺構検出面で須恵器甕片が出土していることから建物1と同じく古墳時代後期に比定される。

### 溝

#### 溝1 (第77図)

溝1は南北調査区のほぼ中央に位置し, トレンチで検出された溝につながる。微高地の高所を開削し, 西北西から東南東につづくと思われ, 規模は上面幅1.8cm, 深さ35cmを測り, 北西に向かって蛇行し, 溝の大きさが縮小している。底部は浅い皿状を呈し, 溝底は礫層を掘り込んでいた。

溝1からは弥生土器2~5が出土し, 確認調査時のトレンチから高坏2と, ほぼ完形の壺3が出土した。壺3は口縁部に2条の凹線をめぐらし, 頸部下にハケ状工具を凹圧して刺突文を配置し, その下には「𠄎」と線刻した文様が描かれていた。

また, 東西調査区では溝底から壺4と高坏5が出土したことにより, 時期は弥生時代後期前葉に比定される。

#### 溝2 (第79図, 第37図版)

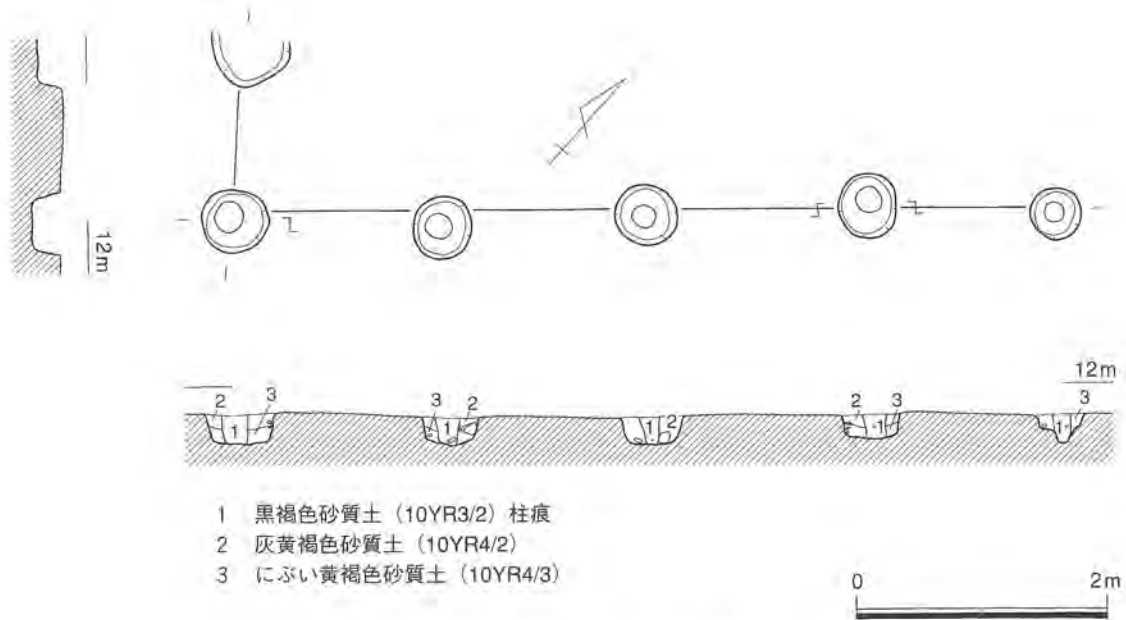
溝2は南北調査区のほぼ中央に位置する。微高地の高所を開削し, 西北西から東南東につづく溝で規模は上面幅2.8m, 深さ約35cmを測る。底部は浅い皿状を呈し埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。

埋土からは弥生土器6~13と土師器14が出土した。壺6は口縁端部に刻目文と頸部下にヘラ描沈線を施し, 壺7は頸部に貼り付けられた3条の突帯に刻目文を施すことから, 弥生時代前期後葉である。中期中葉から後葉の土器は甕8, 壺10~12, 高坏13があり, 壺10と壺12の口縁上部に波状文が施される。また, 後期前葉の甕9と古墳時代前期の土師器甕14も出土した。

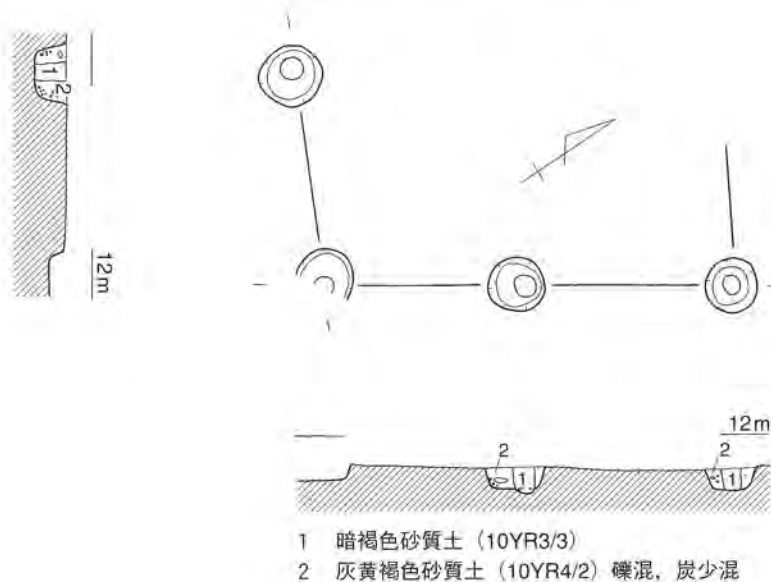
溝の性格上, 混入遺物を含んでいるが, 細片を含めると量的には弥生時代後期前葉の遺物が多いため, 時期は後期前葉に比定される。

#### 溝3 (第81図, 第40図版)

溝3は東西調査区の東端に位置する。他の溝群とは方向が異なり主軸は北北西と南南東を向いてい



第75図 建物1 (S = 1/60)



第76図 建物2 (S = 1/60)

る。断面は逆台形になると推定され深さ約40cmを測る。溝底は基盤層下の礫層を掘り込み埋土から弥生土器片と須恵器片が出土し、小片のため図示できないが、時期は古墳時代後期に比定される。

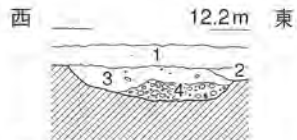
溝4 (第83図, 第41図版)

溝4は東西調査区に東寄りに位置する。溝の方向は西北西から東南東を向き長さ2m, 幅40cm, 深さ20cmを測る。埋土が溝1と溝5に類似することから弥生時代後期前葉と推測される。

溝5 (第82図)

溝5は東西調査区の中央東寄りに位置する。溝の方向は西北西から東南東を向き長さ5m, 幅約50cm, 深さ10cmを測る。

埋土中から弥生土器片が出土し、溝1の埋土との類似から弥生時代後期前葉と推測される。

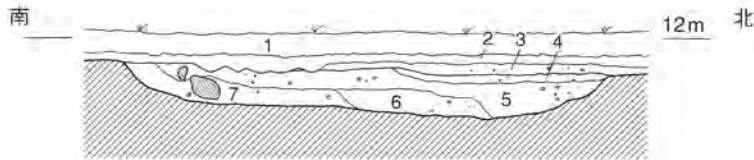


- 1 耕土
- 2 にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
- 3 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 土器含む
- 4 褐灰色礫土

第77図 溝1断面図 (S = 1/60)

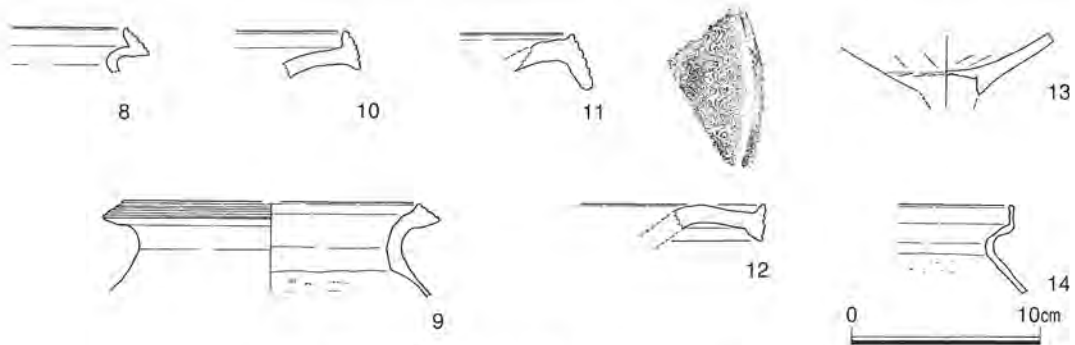
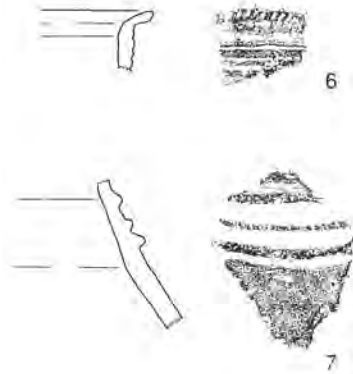


第78図 溝1出土遺物 (S = 1/4)

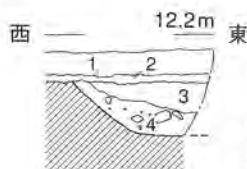


- 1 耕土
- 2 にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
- 4 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)
- 5 黄灰色砂質土 (2.5YR4/1) 土器含む
- 6 オリーブ黒色砂質土 (5Y3/1) 砂多い
- 7 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)

第79図 溝2断面図 (S = 1/60)

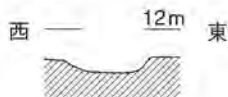


第80図 溝2出土遺物 (S = 1/4)

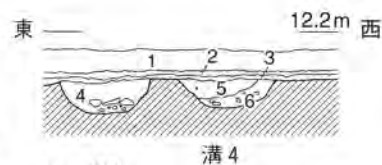


- 1 耕土
- 2 にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
- 3 にぶい黄橙色砂質土 (10YR4/3)
- 4 褐色砂礫土 (10YR4/4) 粘性あり

第81図 溝3断面図 (S = 1/60)



第82図 溝5断面図 (S = 1/60)



- 1 耕土
- 2 にぶい黄橙色土 (10YR7/2)
- 3 灰黄色砂質土 (10YR5/2) に明褐色土混
- 4 褐灰色砂質土 (7.5YR4/1)
- 5 4に同じ
- 6 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 土器混



第83図 溝4ほか断面図 (S = 1/60)

### 第3章 まとめ

延遺跡は総社市井手の延本村、延新田に形成された微高地上に立地している。微高地の北と南には、かつての高梁川東分流が西から東へ流れ、周辺の水田地割にその名残を見て取ることができる。

延遺跡を東西に貫くように敷設された総社市道東総社中原線は、事前の発掘調査によって遺跡の概要が知られるようになった<sup>(註2)</sup>。そのため今回の調査地は東総社中原線のすぐ北側に隣接することになり、弥生時代から古墳時代の遺跡が展開していると予想されたのである。

かつての発掘調査成果では竪穴住居址が18軒あり、そのうちカマド付きの方形住居址や土壙が多数を占め、調査地のすぐ南側の市道部分では西北西から東南東に向かって溝群が確認されている。周辺地形をみても調査地周辺は微高地の高所であり、基盤層である明褐色砂質土下の礫層が上位に露出する所も多く認められた。

今回の調査は、狭い範囲ながら弥生時代後期の遺構と古墳時代の遺構を検出し、その変遷を整理するため第85図を作成した。

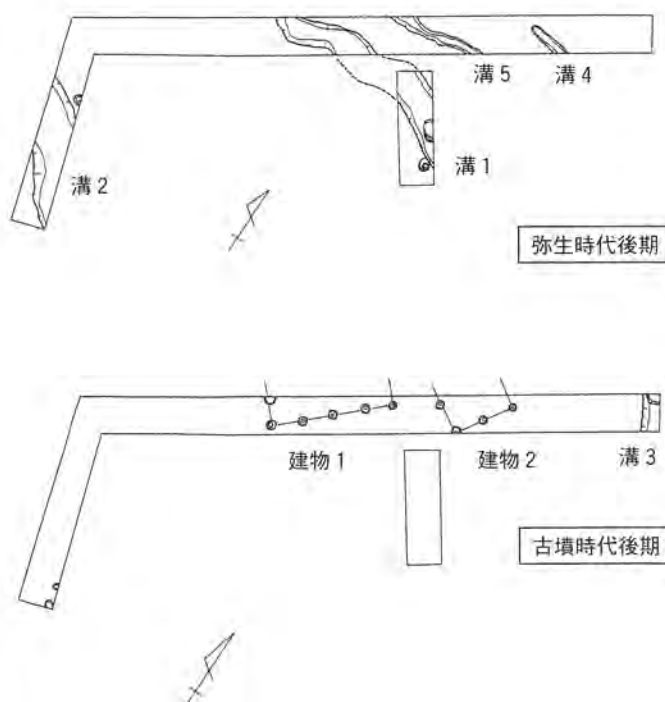
まず、弥生時代後期の溝は4条あり、溝2が最も大きく弥生時代前期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土した。他の溝は比較的小規模であり、弥生時代後期前半の遺物が出土した。これらの溝群は西北西から東南東に向いており、微高地の北側を流っていた旧河道の方向性と一致している。

次に古墳時代後期の遺構は建物1と建物2、そして溝3が該当する。建物1は桁行4間×梁行2間に推定される東西棟で、建物2は桁行1間以上、梁行2間の南北棟である。2棟は近接して建てられているものの方位を意識した配置ではない。溝3は北北西から南南東を向き、弥生時代後期の溝群とは方位が異なる。

古墳時代後期の中心集落は調査地から南西へ約40mはなれた東総社中原線の路線内で検出されてお



第84図 調査地と周辺の遺跡  
(S = 1 / 15,000)



第85図 遺構変遷図 (S = 1 / 400)

り、一連の広がりともみられよう。

以上の調査成果から、高梁川東分流の旧河道に囲まれた微高地上に延遺跡が形成され、弥生時代から古墳時代の遺跡が営まれている状況を追認することができた。一転して調査地から東側へ向かう路線内では、遺構密度が薄くなり新たに中世の遺跡が形成されるなど、時代や微高地の位置によっては土地利用のあり方に違いがある。今後の調査成果により中心集落の移動を含めた変遷も明らかになるであろう。

註1 「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会 1998年

註2 「平成14・15年度 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』14 総社市教育委員会 2005年

表3 土器観察表

番号	遺構	種別	器種	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	備考
				口径	器高	低径				
1	土壇2	弥生土器	鉢	(28)	-	-	良好	橙黄色	やや粗, 3mm以下の砂粒多い	
2	P2	弥生土器	高坏	-	-	13	良好	黄灰色	細かい, 長石・石英多い	
3	溝1	弥生土器	壺	12.4	27.5	7.5	良好	黄橙色	細かい, 1mm以下の長石石英多い	
4	溝1	弥生土器	甕	-	-	6	やや不良	外 黄灰色 内 黒灰色	細かい, 1mm以下の砂粒, 石英多い	
5	溝1	弥生土器	高坏	-	-	-	良好	黄灰色	細かい	
6	溝2	弥生土器	甕	-	-	-	良好	橙褐色	やや粗, 2mm以下の長石, 石英多い	
7	溝2	弥生土器	壺	-	-	-	良好	明橙色	やや粗, 3mm以下の長石石英, 角閃石多い,	
8	溝2	弥生土器	甕	-	-	-	良好	黄灰色	細かい	
9	溝2	弥生土器	甕	(15.7)	-	-	良好	黄橙色	細かい, 長石, 角閃石含	
10	溝2	弥生土器	壺	-	-	-	良好	褐色	細かい, 長石, 角閃石含	口縁部上面に波状文 口縁部外面に棒状浮文あり
11	溝2	弥生土器	壺	-	-	-	良好	黄灰色	細かい, 角閃石含	
12	溝2	弥生土器	壺	-	-	-	良好	黄褐色	やや粗, 長石・石英角閃石多い	口縁部外面に3条の棒状浮文あり
13	溝2	弥生土器	高坏	-	-	-	良好	黄灰色	細かい, 長石多い	
14	溝2	土師器	甕	-	-	-	不良	橙褐色	細かい, 1mm以下の砂粒含む, 長石・角閃石多い	



第34図版 確認調査（北西から）



第35図版 確認調査（南東から）





第36図版 調査地全景（北西から）



第37図版 南北調査区（南から）



第38図版 東西調査区（南西から）



第39図版 溝2断面  
(北から)



第40図版 溝3  
(南東から)



第41図版 溝4  
(北から)



第42図版 建物1 (南東から)



第43図版 掘立柱建物群 (南西から)



第44図版 掘立柱建物群 (北東から)



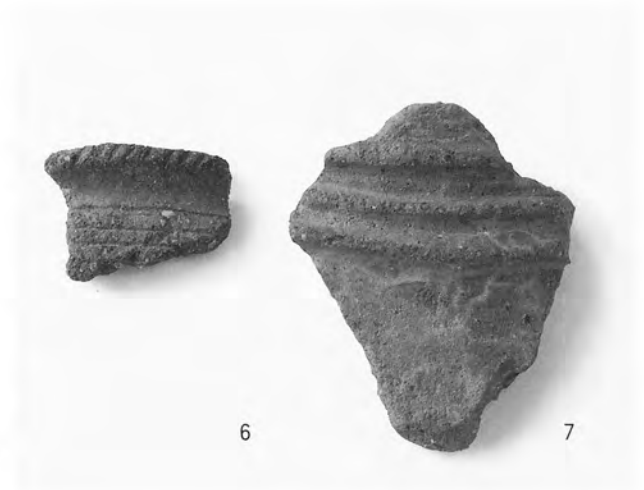
3



壺3の文様拡大



2



6

7



11

10

12

第45図版 出土遺物



## 6. 史跡整備事業の概要

## 2009（平成21）年度 鬼城山環境整備事業

### 1 事業経過

平成13年3月に策定した「史跡鬼城山環境整備基本計画」に基づき、復元地区と位置づけた角楼から第0水門までの整備を推進している。整備にあたっては整備委員会を開催し、委員の意見をいただきながら国・県の指導を得て実施している。平成15年度には西門が完成し、平成17年度にはガイダンス施設が完成している。平成18年度では、北門表示を実施した。

### 2 平成21年度整備事業概要

#### (1) 土塁復元

土塁復元を高石垣から西門側に19.38m延長した。

工法は西門西側と同様に地山にロックボルトを取り付け、これに軽量盛土であるウレタンを噴きつけ、外面20cm厚を版築盛土とした。

土塁復元に伴い土塁内側列石を設置した。

#### (2) 板塀表示

板塀は土塁中に存在する柱跡から推定されたもので、推定高さは約3mである。復元は西門の左右3間分とし他は表示として1m25cmの高さとしている。施工区間は6間分で約18mである。柱間の平均は3.00mである。

#### (3) 城内整地（園路整備）

整備事業で設置していた城内作業場の撤去に伴い、もとの地形に整地した。整地後は城内の雨水がこの部分を流れるため、表面をマサ土舗装とした。この部分が園路として利用される。

### 平成21年度（2009）年度事業経過

平成21年4月1日（水）	補助金交付決定通知（21庁財第8001号）	
補助対象経費		46,000,000円
平成21年4月15日（水）	第31回 鬼城山整備委員会	
6月30日（火）	実施設計並びに監理監督業務契約	3,360,000円
11月16日（月）	史跡鬼城山環境整備工事契約 （土塁・列石・板塀）	33,600,000円
11月19日（木）	第32回 鬼城山整備委員会	
平成22年3月24日（水）	変更契約	41,727,000円
3月31日（水）	竣工検査	

（谷山 雅彦）



第46図版 版築土塁



第47図版 板塀表示



第48図版 園路整備



## 7. 付 載

## 鬼ノ城城外における表採遺物について

所在地 総社市奥坂1758-4

調査日 2009（平成21）年10月28日

### 概要

古代山城の鬼ノ城では、入口部に鬼城山ビジターセンターを設け来跡者を迎えている。ここから岩屋方面へ通じる道があり北へ約160m離れた道路法面から須恵器片を表採した。道路の西側（山側）にあたる法面から発見し、もともと土中にあったものが切土となった土の剥落により露出し、転落したものである。

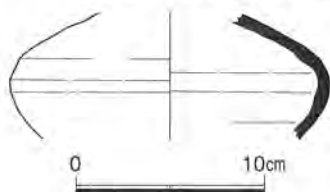
須恵器壺は肩部が張り、丸く収め鋭角に屈折しない。色調は明灰色で胎土は細かく、肩部の形状から壺Kに分類され、これまで鬼ノ城で出土していた土器群とも質感が類似するものがある。時期は7世紀末に比定される。

須恵器が表採された地点は犬墓山の北側裾部にあたり、法面の上部は平坦面や下方に湿地があり、近くには人為的な集石を意味するものかは不明だが、石材のまとまりを確認できる。また、鬼ノ城背面の谷部を利用した西門ルート、もしくは北門へいたるルートへの動線に近いことも注意されるのである。

平成11年度に古代吉備文化財センターが実施した鬼ノ城城内の確認調査では、築城作業者が宿営した簡易小屋などは判明しているとは言い難く課題を残しているが、今回の事例は、鬼ノ城の城外近くにこうした宿营地や、作業場が点在することを示唆するのであろうか。（松尾）



第86図 表採地点位置図 (S=1/8,000)



第87図 表採遺物 (S=1/4)



第49図版 表採位置



第50図版 出土状況

## 稲荷山古墳群出土の須恵器について

### 1. はじめに

本資料は総社市上林の三須丘陵に所在する稲荷山古墳群から出土した須恵器である。出土位置は備中国分寺から北西へ約900m離れた標高約58mの低丘陵頂部付近であり、頂部を基点に尾根は北西と北東に向けて派生している。尾根上には市内でも有数の群集墳である稲荷山古墳群（72基）や、有力な規模をもつ緑山古墳群（22基）が形成されており著名である。

現在、採石場となっている当地では、戦後の開発に伴い複数の古墳が消滅し、多数の遺物が出土したと言われている。今回、紹介することになった須恵器は、前田益生氏の親族が採石場で働かされている際に採取されたもので、これまで自宅で大切に保管されていた。しかし、遺物の状態がよく資料の活用と保管を強く希望されるようになり、平成22年1月6日に吉備路郷土館のご高配を経て総社市教育委員会へ保管することになった。

採取遺物は完形品が多く6世紀代と7世紀代の須恵器優品であり、中には赤色顔料を取めた小壺（11）や短頸壺（13）を含むなど資料的価値が高い遺物である<sup>(註1)</sup>。

残念ながら遺物の採取地点や消滅した古墳との関係が不明であるため、本稿では稲荷山古墳群出土の須恵器について紹介することにした。

### 2. 須恵器について

須恵器は合計14点あり、内訳は6世紀代の坏H蓋3点・身1点、7世紀代の坏H蓋3点、椀蓋1点・椀1点、小壺1点、蓋1点、短頸壺1点、高坏1点、提瓶1点である。

坏H蓋（1～3）は、口径約13.3～13.7cm、器高3.7～4.1cmと近似値を示す。蓋（1）の天井部に一条の沈線があり口縁部が屈折するなど古相を示し、蓋（2）・蓋（3）は口縁部から体部にかけて丸みを帯び、いずれも回転ヘラ削り調整で仕上げる。坏H身（4）は受部を斜め上方に引き出して口縁部を内傾させ、底部を回転ヘラ削り調整で仕上げる。

坏H蓋（5～7）は口径11～11.2cm、器高3.4～3.7cmと全体的に小形化し、天井部は丸みを帯びヘラ切り調整である。

椀蓋（8）と椀（9）は胎土や色調が共に類似し、法量による組み合わせから見て、セットになる可能性が高い。椀蓋（8）は平らな天井部から口縁部に向けハ字形にひらき、しっかりとした厚みのかえりはやや内面に付く。身（9）は底部が丸く口縁部が内傾する深い器形で、外面には2条の沈線が施される。

高坏（10）は坏部外面に稜が2条と、脚部に2条の沈線が施される。小壺（11）は体部外面をカキ目調整し、底部はハケ調整の後にヘラ切り調整を行う。内面



第88図 稲荷山古墳群と須恵器出土地点 (S=1/10,000)

底部には厚さ 6 mm分の赤色顔料が固着しており、顔料の付着によって内面は全て赤色となっている。

蓋 (12) は天井部から口縁部にかけて丸みをもち口縁端部は内傾している。ヘラ切りされた天井部には「×」印のヘラ記号が認められる。

短頸壺 (13) は底部が丸く肩が張り、口縁部は内傾している。内面には赤色顔料が底部から胴部最大径近くまで付着し、口縁部と外面肩部にも部分的に付着が認められた。こうした状況から本来は内部に赤色顔料を入れて副葬されたと考えられる。

提瓶 (14) は、体部に把手はなく口縁部はあまり開きがない。体部外面にはカキ目調整を施し、回転ヘラ削り調整で仕上げる。

### 3. 時期について

以上の須恵器からみて大きく 2 時期に分かれる。まず、坏H蓋と身 (1～4)、高坏 (10)、小壺 (11)、蓋 (11)、短頸壺 (13)、提瓶 (14) は T K 43 型式～T K 209 型式に収まり 6 世紀後葉から 7 世紀初頭に比定される。

次に飛鳥編年によれば坏H (5～7) は飛鳥 1 期の新相で、椀 (8・9) は飛鳥 3 期に位置づけられ、これらは 7 世紀前葉から中葉に比定されよう。

遺物は完形品が多く、椀や短頸壺のセットが確認できるなど、横穴式石室墳に供献されたことは疑いなく、当然追葬に伴う遺物も含まれるであろう。採取地である採石場の山頂部から東斜面ないし南斜面では、15基以上の古墳が確認されると共に、西へ100m降った斜面においても緑山17号墳が発掘調査されており、銀象嵌の装飾付大刀や鉄滓の副葬が確認されている<sup>(註2)</sup>。こうした環境において、採石場でも稲荷山古墳群が密集していた状況は十分に推測され、中には有力な規模をもつ横穴式石室墳も存在したのではないかと推測される。

最後になりましたが、須恵器を寄贈して頂いた前田益生氏に感謝申し上げますと共に、資料化に際しては吉備路郷土館から多大な援助を受けました。ご高配を頂いた吉備路郷土館 館長松本和男氏、松森未佳氏にお礼申し上げます。 (松尾)

註1 赤色顔料を収めた須恵器短頸壺は、帆立貝式古墳の福井大塚12号墳からも出土しており、有力首長墓において副葬されている点が注目される。

「福井新田地区小規模ほ場整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994年

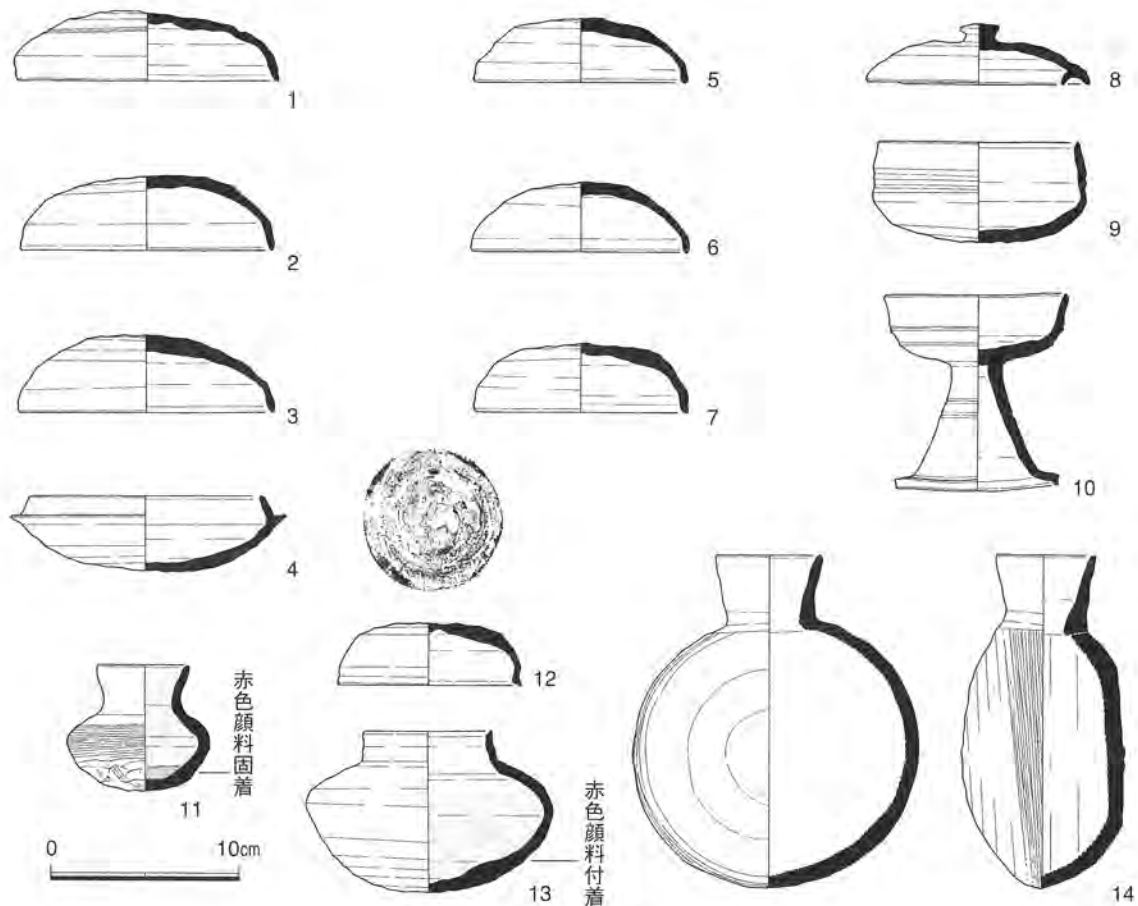
註2 「緑山17号墳 すりばち池3号墳 山津田遺跡 清水角遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984年 第88図は報告書の第3図を引用 一部改変

#### 参考文献

「三須河原遺跡 三須畠田遺跡 三須美濃田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003年

「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要』2001 奈良文化財研究所 2001年

「松尾古墳群 齊富古墳群 馬屋遺跡他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995年



第89図 採取遺物 (S=1/4)

表4 遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	備考
			口径	器高	低径				
1	須恵器	坏H蓋	13.7	3.7	-	良好	暗灰色	粗い, 4mm以下の砂粒を含む	
2	須恵器	坏H蓋	13.3	3.9	-	良好	暗灰色	細かい, 長石多い	
3	須恵器	坏H蓋	13.4	4.1	-	良好	灰色	細かい, 長石多い	
4	須恵器	坏H蓋	12.2	4	-	良好	暗灰色	細かい, 長石多い	
5	須恵器	坏H蓋	11	3.4	-	良好	灰色	細かい	
6	須恵器	坏H蓋	11.2	3.7	-	良好	灰色	細かい	
7	須恵器	坏H蓋	11.2	3.7	-	良好	灰色	細かい	
8	須恵器	椀蓋	8.7	3.2	-	良好	灰白色	細かい	
9	須恵器	椀身	10.6	5.4	-	良好	灰白色	細かい	
10	須恵器	高坏	9.6	10.5	8.5	良好	灰色	細かい	
11	須恵器	小壺	4.7	6.7	-	良好	灰色	細かい	内面に赤色顔料が固形物として残存
12	須恵器	壺蓋	9.7	3.3	-	良好	暗灰色	細かい	天井部に×のヘラ記号あり
13	須恵器	短頸壺	6.7	8.6	-	良好	暗灰色	細かい	内面に赤色顔料付着
14	須恵器	提瓶	5.1~5.5	17.7	-	良好	暗灰色	やや粗, 2mm以下の砂粒多い	



第51図版 稲荷山古墳群出土の須恵器

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	20
編著者名	谷山雅彦, 平井典子, 武田恭彰, 高橋進一, 松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363
発行年月日	2011 (平成23) 年 3 月27日

**総社市埋蔵文化財調査年報 20**

平成23（2011）年3月25日 印刷

平成23（2011）年3月27日 発行

編集発行 総社市教育委員会  
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社  
総社市総社一丁目10番24号



